

研究紀要

# 金沢城研究

第4号

特集「金沢城フォーラム 石垣の匠と技」

講演 「石垣の匠と技」 .....	北垣聰一郎	1
報告 (1)「金沢城の石垣調査」 .....	滝川 重徳	11
(2)「戸室石切丁場の調査」 .....	富田和気夫	19
(3)「城郭石垣を築いた人々」 .....	木越 隆三	27
(4)「金沢城の石垣に学ぶこと」 .....	北野 博司	40
討論 .....		47
金沢城五十間長屋石垣鋤初に係る神具机について .....	出越 茂和	57
—金沢市波自加弥神社所蔵神具机裏書の調査—		
金沢城本丸櫓群の図面類について .....	正見 泰	61
—辰巳櫓・三階櫓の図面類の検証—		
兼六園とはどこのことか .....	長山 直治	98(二)
【資料紹介】金沢城作事所に関する断簡資料(1) .....	木越 隆三	80(九)
—名倉氏採取襖下張文書(金沢大学文学部日本史研究室蔵)—		

平成18年3月

石川県教育委員会事務局  
文化財課 金沢城研究調査室

## 第4号の刊行に寄せて

平成14年度に本格着手した金沢城の調査事業は、今年度、4年目に入りました。この間、石垣の編年をおおよそ解明し、絵図文献等の調査から二の丸御殿の様子を明らかにするなど一定の成果を得ることができました。

こうした成果もふまえ、今年度は、11月に金沢城の大きな魅力の一つである石垣をテーマに「金沢城フォーラム」を開催しましたほか、3月には、ビジュアルでわかりやすく城の歴史などを紹介する「よみがえる金沢城」第1巻を刊行するなど例年以上の情報発信に努めたところです。

本書では、「金沢城フォーラム」の記録のほか、金沢市文化財保護課の出越茂和氏よりいただきました宝暦13年の金沢城五十間長屋石垣修築の鍬初儀式に使用された神具机に関する玉稿や近世史学を専門とする長山直治先生からお寄せいただきました兼六園の位置や呼称に関する大変興味深い論文を収載いたしました。室員による研究、報告とともに多彩な内容となりました。

最後になりましたが、玉稿をお寄せいただきました両先生、金沢城フォーラムの収録につきまして御高配をいただきました北垣聰一郎先生、北野博司先生に感謝申し上げますとともに、本書が県民の皆様の高い関心に応え、金沢城の保存・活用の一助となり、広く近世城郭史研究に資するものとなれば幸いと存じます。

平成18年3月

石川県教育委員会

教育長 山 岸 勇

## 特集 金沢城フォーラム 石垣の匠と技

一、平成17年11月20日（日）石川県地場産業振興センター本館大ホールにおいて、石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室、石川県土木部公園緑地課の主催で開催した「金沢城フォーラム」の基調講演・報告・討論の記録である。

当日の講演・報告のテーマと発表者は以下のとおりである。

講演 「石垣の匠と技」 北垣 聰一郎

報告 (1) 「金沢城の石垣調査」 滝川 重徳  
(2) 「戸室石切丁場の調査」 富田 和気夫  
(3) 「城郭石垣を築いた人々」 木越 隆三  
(4) 「金沢城の石垣に学ぶこと」 北野 博司

討論 パネラー 北垣聰一郎 北野博司 木越隆三 富田和気夫 滝川重徳  
コーディネーター 田嶋 明人

二、このフォーラムは金沢城研究調査室設置から5年目を迎える中、金沢城の石垣に関する埋蔵文化財調査、伝統技術（石垣）調査、絵図および文献調査の成果を中間的に総括し、今後の課題を含めて、一般県民に広く公開する目的で開催した。

三、収載にあたり、当日配布したパンフレットおよび録音テープをもとにしたが、当日、時間の都合等で割愛した部分を復活させるなど、加筆・訂正をおこなった箇所もある。しかし基本的な趣旨は変えていない。

滝川 重徳

金沢城研究調査室の滝川と申します。本日は金沢城の石垣調査の、現段階での到達点についてご報告いたします。前半は金沢城石垣調査の進展について、後半は調査の成果である、石垣の分類と編年についてお話したいと思います。

## 1. 金沢城石垣調査の進展

金沢城の石垣については、先ほど御講演のあった北垣先生が、石垣の技術書との関連でつとに注目されるなど、かなり以前から調査研究が進められていました。

平成9年以後、石川県が金沢城の本格的な整備として取り組んだ、二ノ丸菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓の復元にともない、その櫓台・長屋台石垣の解体調査に着手したことで、石垣の調査研究は大きな画期を迎えることとなりました。近年に続く石垣調査研究の原点として、この解体調査はどのような点で画期的だったのでしょうか。

第1点は、解体調査の対象になった、石垣そのものの特色に関わることです。実はこの櫓台・長屋台石垣は、金沢城石垣の最大の特徴である「多様性」が、凝縮された場所だったのです。

これはひとつには、櫓台・長屋台石垣が創建された、寛永8年（1631）当初から、場所に合った石垣の使い分けがされていた点を挙げるすることができます。内堀側は、割石にノミで粗々と形を整えた、粗加工石を用いて積まれています。一方、二ノ丸御殿側は、さらに丁寧に加工を施した、切石を用いて積まれております。これが多様性のひとつの背景です。

さらに、石垣は度重なる修理を受け、そのつど新しい様式が生み出された点も、多様性をもたらした原因として重要です。この石垣は、寛永8年（1631）の創建以後、約200年の間に4度の修理があり、発掘調査でほぼ修理範囲とその特徴を把握することができました。

写真では、石垣の根本の方に、寛永期、1631年創建時の石垣が少し見えますが、修理で積み直した部分と、石材や積みの整い方が違ってきているのが判ります（写真1・2）。

場に応じた使い分けと修築ごとの様式創出、この二つが、石垣の多様性をもたらした大きな要因で、金沢城全体にあてはまることです。パラエティに富んだ石垣を調査することで、城の一部分に過ぎないのに、少しオーバーに言えば、金沢城全体を見通すような成果を挙げるのが、可能となったのです。



写真1. 橋爪門続櫓北面・五十間長屋東面石垣



写真2. 五十間長屋西面石垣

さて、檜台・長屋台石垣の解体調査が画期的だった、理由の第2点—むしろこちらがより本質的だといえるのですが、それは調査方法や調査の視点にありました。

まず、ごく当たり前のことなのですが、石垣の解体調査ですから、当然内部の構造を調査することになる。さらには、解体された石垣の石材をじっくり観察する、ということを実施しました。

では、内部構造の発掘調査から、どんなことが判明したか、いくつか具体的に紹介しましょう。

写真の部分は、二ノ丸御殿側の切石積で、宝暦13年(1763)に修理した部分を、さらに文化5年(1808)に再度修理したことによって生じた境を示しています(第1図右上)。

宝暦と文化、一見すると同じように見えます。もちろん、詳細に観察すれば、石垣表面にも違いが見いだせるのですが、内部はどうなっているのでしょうか。

内部にはかなりの違いが認められます。まず、表面では同じように見える、石どうしの密着部分、これを合場といいます。内部からみると、宝暦期の石垣では少ししかくっついていないのに、文化期の石垣は、かなりぴったりくっついていることが分かります(第1図左上)。

また、宝暦期石垣の場合、石垣の背後すぐのところ裏込の石が少し詰まっているのですが、内部の大部分は土で充填されています。一方、文化期の石垣では、全体に裏込石が見られます。ただし、これは表層だけで、1mも掘るとやはり土で内部を充填する割合が高くなりますが、いずれにしても、土や石の使い方が異なることが確かめられました。

宝暦期石垣の背後については、発掘前は、すべて裏込石で充填されているものと思いましたが、この箇所は、土の占める割合が高いことが判明しました。同時に、どのような手順で作直したのかもある程度窺うことができました(第1図左下)。

また、菱檜台石垣の解体では、くさび状、かすがい状の金属製品が検出されました。敷金などと呼ばれる道具です。石垣の隙間に詰め込んで、安定を図ったものと言われています(写真3)。

鍬始とは、おおざっぱに言えば、土木工事の起工式と行って良いかと思えます。これは、宝暦13年(1763)の改修に際して行った起工式の、いわば小さな記念碑と言えるもので、石垣の背後に置かれていました(第1図中央下・写真4)。完成を記念して石垣に刻む、ということはあるようですが、起工式を記念するという例は聞きません。さしあたって年代がはっきり刻まれているので、出土した付近が、宝暦期の改修部分だという決め手となったことも、大きな成果でした。

先ほど、二ノ丸御殿側と内堀側とで、石垣の石材、積み方が違うと申しましたが、内部を発掘することによって、石材の控え(長さ)も全然違う、ということが一目瞭然となりました(第1図右下)。

さて、以上のように、内部構造の発掘調査によって分かったことを幾つか紹介しましたが、もうひとつ、解体した石垣石材をかなり徹底して観察したという経験が、むしろ現在実施している、石垣の詳細観察調査に生かされていると思えます。

総数4千個の石材について、ひとつ残らず、大きさや加工の痕跡等を観察カードに書き込みながら、石垣を見る目を養っていきました。そして、内部構造の調査とあわせて、石垣の加工痕を詳しく検討



写真3 敷金出土状況



写真4 鍬始刻石

することで、石垣の年代を特定していく方法を見出していくことになったのです。

このように、菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓台の解体調査は、その後の調査研究の在り方に大きな影響を与えることとなりました。とくに、修築ごとの石垣様式を把握し、石垣編年の基礎を築いたという点で、重大な成果を収めたといえます。現段階では、この成果や方法論にもとづき、多様な石垣を大きく7段階の年代に分けるとともに、石垣から、金沢城の築城過程まで窺えるようになりました。

## 2. 石垣の分類と変遷

次に、こうして組み立てられた、金沢城石垣の分類と変遷について紹介したいと思います。

さて、石垣の大分類を言うのに、耳慣れない用語の説明があるかと思えます。ここでは、石材の加工状態に重きを置く立場から、

- ・主に自然の形状のままの石材を用いて積み上げた石垣を、自然石積
- ・主に粗割した石材を用いて積み上げた石垣を、割石積
- ・主に割石を更にノミなどで粗く加工した石材を用いて積み上げた石垣を、粗加工石積<sup>あらかこう</sup>
- ・粗加工段階から更に進んで、正面を中心に丁寧に仕上げ、隣同士の石材と密着するように切り合わせて積み上げた石垣を、切石積、と呼ぶこととします。

石垣の変遷は、石材が加工され、積み方とともに規格化する過程だと考えることができます。自然石積・割石積・粗加工石積という区別は、その段階差であり、時期的な変化を示すものと考えられます。

具体的には、石垣構造の要である角部分に、最も著しい変化が見て取れ、石割りの痕跡や、ノミ等の工具による調整加工の度合いによって分類することとなります。なお、石材の規格化は、現象面であって、背景には、石垣設計の合理化や理論化が図られてきたことと表裏一体の現象だと推測することができます。

では代表的な石垣を紹介しながら、変遷をたどることとしましょう（第2図）。

現在、金沢城で知られる最古段階の石垣は、文禄年間頃（1592～1596）に築造されたもので、これを1期とします。自然石積段階の石垣です。ただし、角部分はすでに割石が用いられていて、算木積みとなっています。どの段階においても、角部分の加工は、他の大部分（いろいろな言い方がありますが、ここでは築石といえます）よりも一歩先を行っている点が注意されます。また角石の隣の石を角脇石と呼びますが、この段階では築石一般と変わりはありません。

なお、自然石積の段階では、戸室石以外の石が、少量用いられている箇所がありますが、基本的に金沢城の石垣はほとんど戸室石で造られています。

次の段階、2期＝慶長年間頃（1596～1615）は、割石積の段階です。築石は割石が主体となりますが、角石は更に形が整ってきており、角脇石も築石と分離して、整った形状に定着します。

3期＝元和年間頃（1615～1624）には、粗加工石積に変化します。築石は、割面にノミなどの工具による調整が部分的に入った粗加工石が主体となります。角石と角脇石は、整った直方体の切石になっています。

さらに、一つ一つの石材に、刻印とよばれる記号が刻みつけられる割合が高くなります。3期の刻印はやや小型であるのが特徴です。刻印の意味するところは、諸説あってまだ定説がないのが実情ですが、少なくとも石切丁場＝生産段階でつけられていることははっきりしています。

3期以降は、粗加工石積が踏襲されます。4期＝寛永年間頃（1624～1644）は、正面全体がノミ等の工具によって調整された石材が主体となり、5期＝寛文～元禄年間頃（1661～1704）になると、石材の規格化が一層進むとともに、これに合わせて積み方もたいへん整然としてきます。

石材の規格化は、この5期でほぼ達成されます。6期＝宝暦～安永年間頃（1751～1781）以後も変

化はあるのですが、基本路線は踏襲されます。

また、3期に普遍的となった刻印ですが、4期には大型化して一層たくさんつけられるようになります。金沢城にいくと、刻印がたくさん見られてそれだけでも楽しいのですが、実は年代的には限定され、ほとんどがこの4期の石垣なのです。5期になると、大型刻印は急速に影を潜め、漢数字の「一、二、三」等を小さく端に刻むのが見られる程度になり、石材生産の体制に大きな変化がおこったことを推測させます。

以上、駆け足で、自然石積から粗加工石積の変遷について見てきましたが、このような石垣の発展は、金沢城の整備の過程と密接に関わっています。

1期石垣は、本丸の東西、2期は本丸のほか、三ノ丸の北側、尾坂門周辺など、大手筋ルートに認められます。3期は本丸の周囲のほか、城郭の外回りに重点的にみられ、4期の石垣は、二ノ丸を中心に広い範囲でみられます。4期について補足すると、この段階は、寛永の大火といって大きな火災があり、本丸から二ノ丸へ御殿を移すということをやっており、金沢城の形が最終的に確定した段階です。

このように、1期から4期までの石垣整備は、ほとんどそのまま、金沢城の築城過程にオーバーラップすると言えます。5期以降は、修理、修築という要素がほとんどとなります。

次に、切石積石垣の出現と展開について、お話しします（第3図）。

切石積も、自然石積から続く系譜に位置付けられ、直接的には、切石化した、粗加工石積の角石から発展したと推測できます。しかしながら、石材の規格化を推し進めたというより、むしろ造形、デザイン性の方向へ向かったと考えられます。

というのも金沢城の切石積は、石と石とが密着する合わせ方であり、特に上下関係でいいますと、石の圧力が先端にかかり過ぎて、高く積むと破損しやすくなるというデメリットがあるのです。ですから粗加工石積の発展形態というより、別の意図をもって取り入れられたものと考えられます。

切石積石垣の分布には、一定の傾向が認められます。石川門などの主要な門、二ノ丸御殿や本丸正面一帯、それから玉泉院丸にあった庭園を取り囲む部分。このように、切石積石垣は、場に応じた使い分けを前提に、出現した石垣と言えそうです。

切石積石垣が初めて造られるのは、4期（寛永年間頃、1624～1644）のことです。最初の切石積は、粗加工石積の角石から発展したことをうかがわせるような、正面真四角の石材を用いたものです。文献では四方積みと呼ばれることがあります。

次の5期（寛文～元禄年間頃、1661～1704）以降は、石材の正面の形状と、積み方にバリエーションが出て、多様化が進行します。

前代の四方積みを継承するとともに、正面長方形石材を横長に据えて、レンガ積みのようにみえるものや、正面が多角形の不定形な石材を、水平方向の目地をとおさないよう、落とし込んだり、跳ね上げたりして積んだ、躍動感のある乱積みなどが見られるようになります。

これは、場に応じた使い分けの考え方が、更に細かくなっていることを窺わせるとともに、破損した古い石材を有効に転用したという側面も指摘されています。

江戸時代後期になっても、新たな様式が生み出されています。6期（＝宝暦～安永年間頃、1751～1781）には、正面が不定形の石材を水平方向の目地を通しつつ積むという様式が現れます。ところどころに横長の石や縦長の石を配置することがあり、陰陽思想の影響も考えられるという特徴があります。

7期（享和～文化年間頃、1801～1818）は石垣技術体系の理念が集約された時期でもあり、切石積石垣においても、前代以来の様式を継承しつつ、理念を意識してつくられたものがみられます。概し

て6期よりも丁寧な仕上げとなっています。

代表的な切石積の展開を示しましたが、この他にもユニークな石垣があります。「<sup>かねぼとりのこし</sup>金場取残積」は、石材正面の周囲はしっかり切り合わせますが、内側は断面の凹凸を強調してわざと残すという、趣向を凝らした石垣で、庭園など数寄空間にふさわしい石垣です。

また、粗加工石垣にも変化があり、石材間の隙間を板状の詰石で塞ぐことにより、切石風に見せるスタイルも5期に生み出されました。

さて、このように多様化した切石積石垣ですが、4期に出現した四方積みが、7期に継承されるなど、様式が継承される場合、時期の違いをどう見出せばいいのでしょうか。

ここでは、石材の正面加工について、時期による違いがあることを指摘しておきます。

かいつまんでいいますと、

- ・ 5期は全体的に丁寧な仕上げ
  - ・ 6期は粗い仕上げで、縁取り加工が意匠化する
  - ・ 7期は丁寧な仕上げで、引き続き縁取り加工が明瞭である
- ということです。

なお、縁取り加工は、もともとデザインではなく、面調整の一つの工程で、5期の石垣では丁寧に調整を重ねて行なっているため、むしろ消えてしまっていると考えられます。6期の石垣では、調整の省略をうまくデザインに生かす工夫をした、と言えそうです。

このように、金沢城石垣のユニークさは、かなりの部分切石積石垣に負っています。なかでも、玉泉院丸庭園向きの石垣は、基礎構造物という性格にとどまらず、庭園の借景、構成要素として、場にふさわしい景観を積極的に演出するまでに至りました（写真5）。

石垣の当初の性格、要塞の防壁という武張った領域を大きく飛び越えたところに、文化政策に邁進した加賀藩の性格が顔を覗かせている気がいたします。

いずれにせよ、このような石垣は、当代きつての文化・芸術の担い手達と交流した結果、創出されたと推測されますが、その具体的な動きを解明していくのが、今後の課題の一つだと思います。

なお、私のこの報告は、『金沢城研究創刊号、第2号』に掲載されました北野先生の御論稿や、調査室発行のパンフレット等の内容を再構成したものです。あわせて御参照いただきたいと思います。石垣調査の課題は、多岐にわたりますが、このあとの報告がそのまま課題や展望につながるとしますので、バトンタッチすることとしたいと思います。どうも有難うございました。

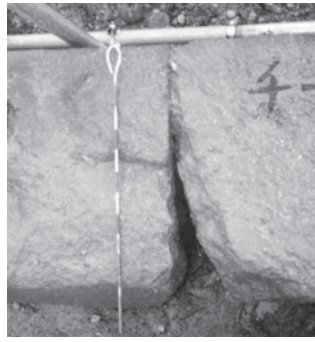


写真5 玉泉院丸庭園向きの石垣



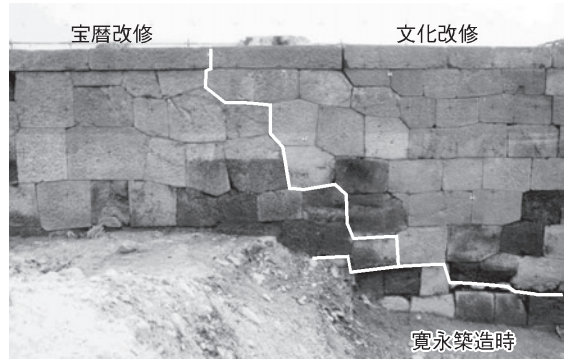


宝暦期の合場

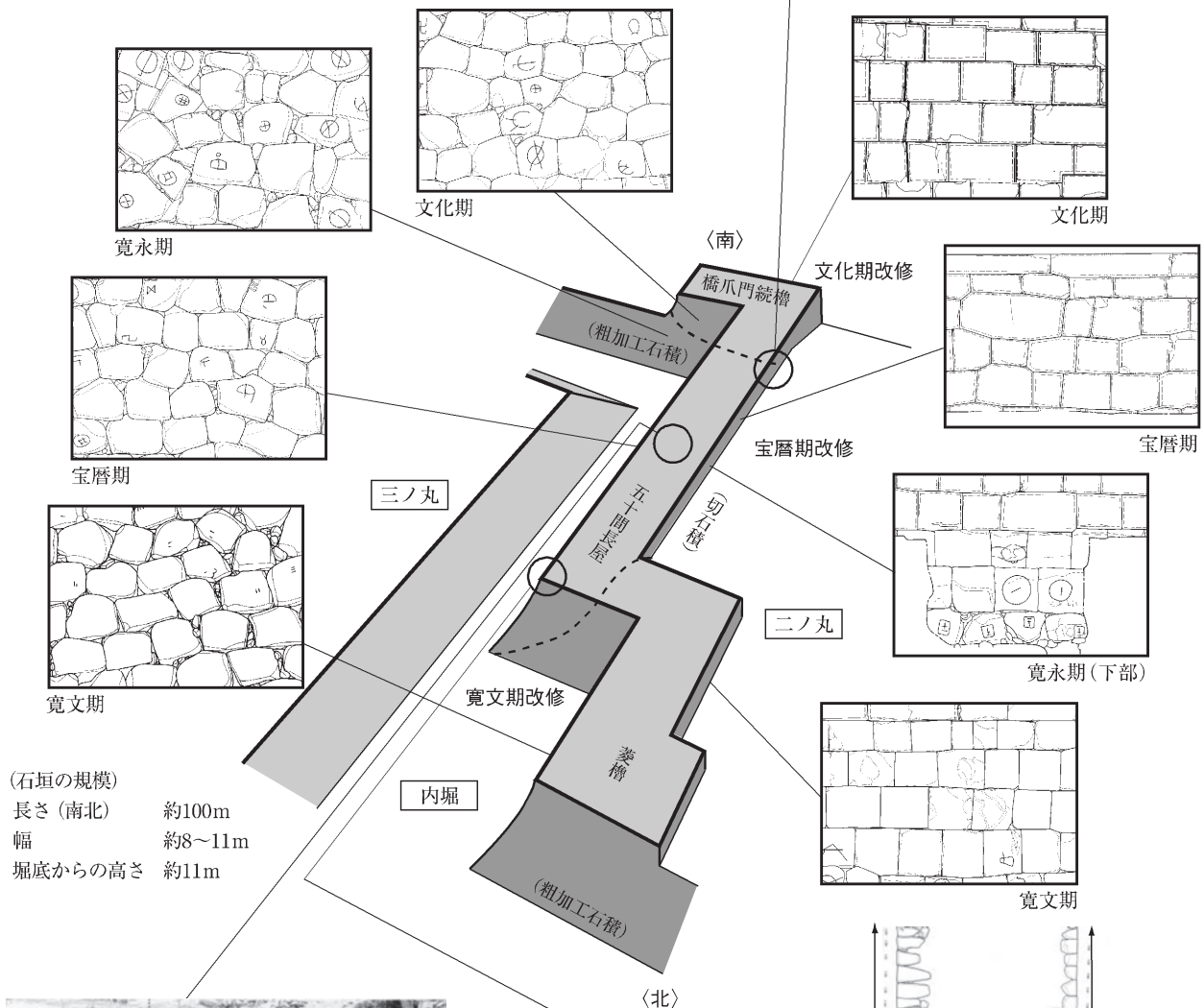


文化期の合場

石が密着する部分(合場)の加工に差がみられる



五十間長屋・橋爪門続櫓台石垣西面改修境部分



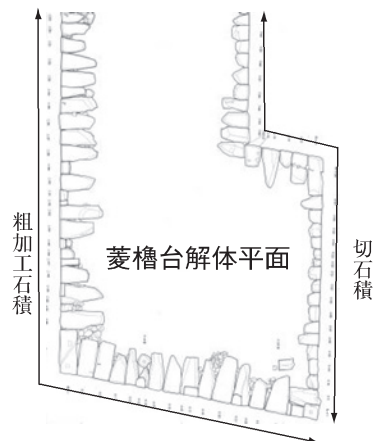
(石垣の規模)  
長さ(南北) 約100m  
幅 約8~11m  
堀底からの高さ 約11m



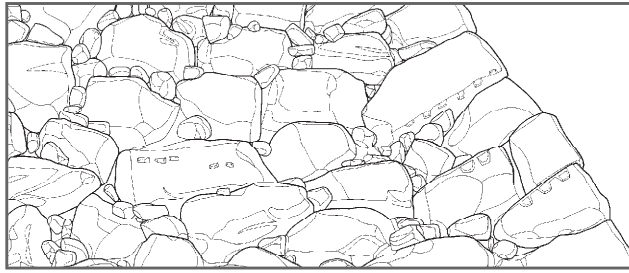
長屋台中央断面



「鋤始」刻石出土状況



第1図 菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓台石垣の解体調査

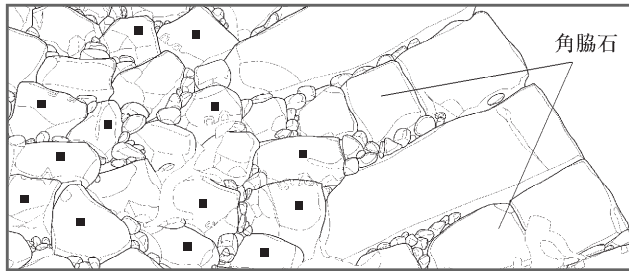


丑寅櫓下（北）（東ノ丸北面）

### 1期 文禄年間頃（1592～1596）

#### 自然石積

- ・築石は自然石主体（割石混じる）
- ・隅角部：算木積み  
（角石は割石、角脇石未成立）
- ・刻印ごく稀

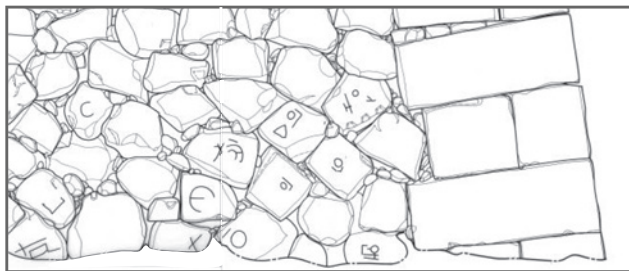


■ 小面が割面・ノミ加工面の築石 辰巳櫓下（本丸南面）

### 2期 慶長年間頃（1596～1615）

#### 割石積

- ・築石は割石主体  
（ノミによる部分加工石混じる）
- ・角石加工進展、角脇石の定着
- ・小型刻印増加



東ノ丸附段（東）（上部積み直し）

### 3期 元和年間頃（1615～1624）

#### 粗加工石積

- ・ノミによる部分調整の粗加工石主体
- ・角石、角脇石の切石化（～7期）
- ・小型刻印普遍化

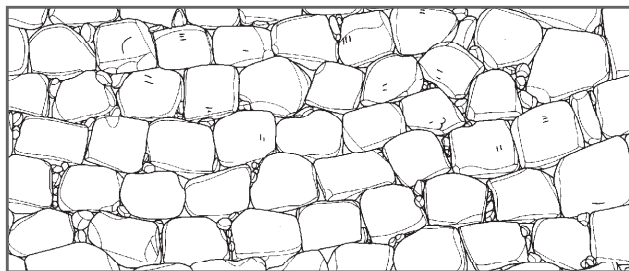


石川門下（白鳥堀縁）

### 4期 寛永年間頃（1624～1644）

#### 粗加工石積

- ・ノミによる全面調整の粗加工石主体
- ・粗加工の板状詰石出現
- ・刻印の大型化



二ノ丸菱櫓下（東）

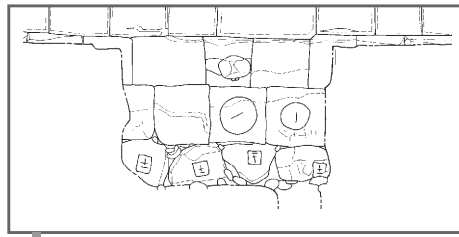
### 5期 寛文～元禄年間頃（1661～1704）

#### 粗加工石積

- ・粗加工石の規格化
- ・隅角の稜線を縁取り加工
- ・精加工の板状詰石出現
- ・刻印の減少、大型刻印の消滅



第2図 自然石積・割石積・粗加工石積の変遷（S=1／80）

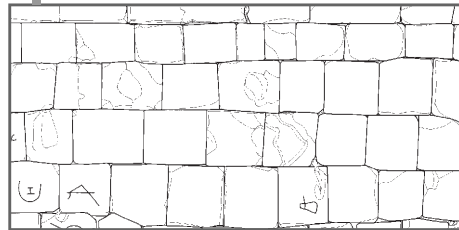


五十間長屋 (西) 下部

#### 4期 寛永年間頃 (1624~1644)

- ・正面が正方形の石材 (四方石)
- ・石切丁場で専用材に加工

四方積み (正方形石)



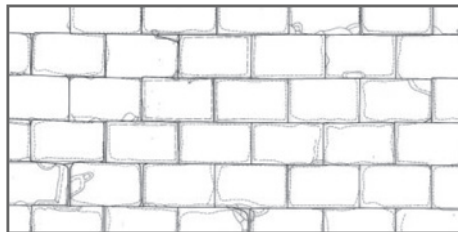
五十間長屋折曲部 (西)

#### 5期 寛文~元禄年間頃 (1661~1704)

- ・様式の多様化 (乱積み・布築積み等)
- ・旧材再加工石材の併用 (~7期)

四方積み (正方形石、角落とし)

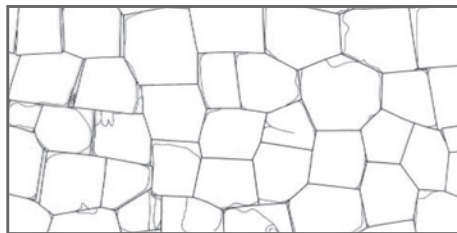
旧材 (角が欠損したもの等) を再加工



数寄屋屋敷 (東) (裏口門西側西面)

布積み (布築積み) (長方形石)

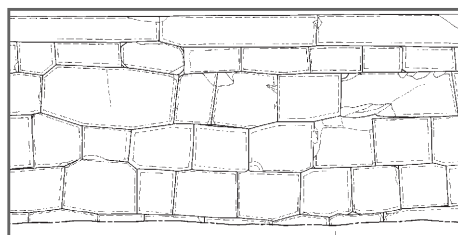
正方形石を再加工 (分割)、正面長方形とし横長に積んだもの



薪ノ丸下 (泉水縁)

乱積み (不整 (定) 形石)

正面不整 (定) 形の五~六角形石を用いる  
横目地は波打つ



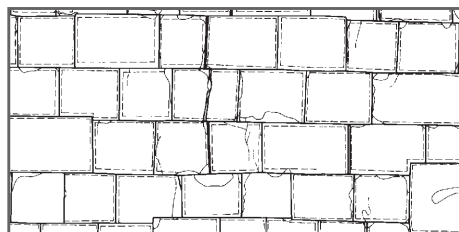
五十間長屋 (西)

#### 6期 宝暦~安永年間頃 (1751~1781)

- ・粗い面加工
- ・正面縁取り加工の意匠化 (~7期)

布積み (不整 (定) 形石)

正面不整 (定) 形石材、上下辺は水平部分が多く、  
全体として横目地が通る



橋爪門続櫓 (南)

#### 7期 享和~文化年間頃 (1801~1818)

- ・精緻な面加工と丁寧な仕上げ
- ・合場 (石材間の密着部分) の拡大

四方積み (正方形石、角欠き)

鋸形に角を欠く (角欠き) 石材を多用



第3図 切石積の変遷 (S=1/80)

富田 和気夫

金沢城研究調査室の富田でございます。よろしくお願いいたします。

私の報告では、金沢城の石垣に用いられた戸室石の石切場、その実態が、どこまで分かってきたのか、また、そこでは、どんな仕事か、どのようにして行われていたのか、ということについてお話ししたいと思います。

## 1. 石切丁場はどこにあるか

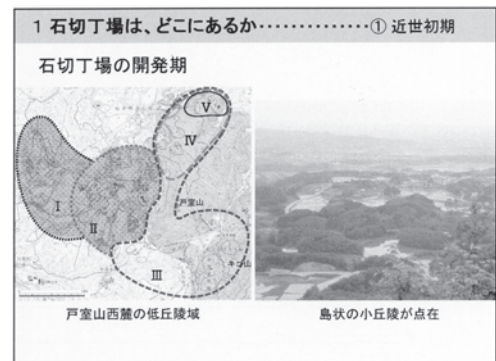
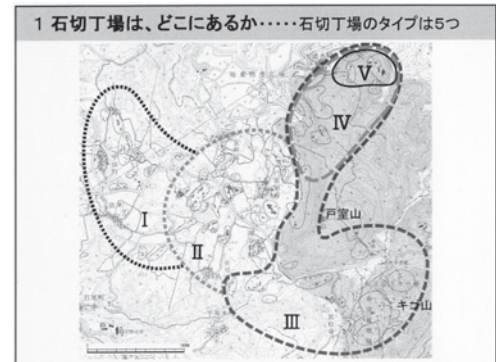
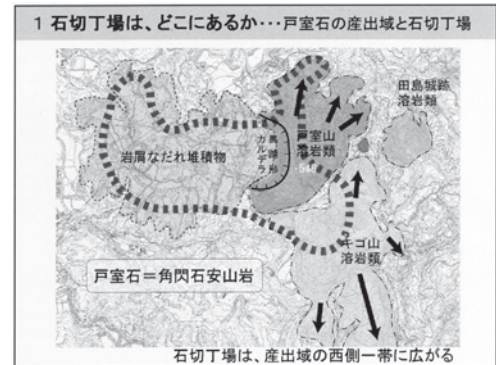
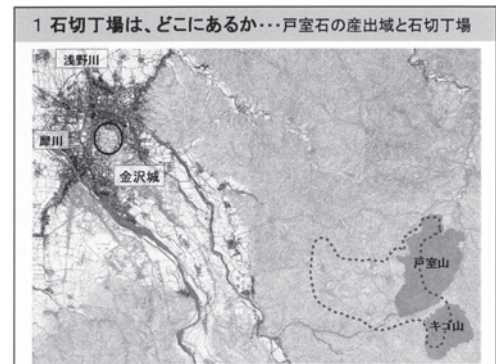
では、早速ですが、「石切丁場はどこにあるか」から、始めたいと思います。

**戸室石の産出域** まず、金沢城との位置関係を確認しておきます。

このスライドの左上が金沢城。そして、右下が戸室山とキゴ山、破線が石切丁場の分布範囲です。お城からの距離は、直線で結んで、7キロ～10キロ程になります。戸室山とキゴ山は、約40万年前にできた火山でありまして、火山活動に伴って、地表付近に出てきたマグマが冷え固まってできたのが、戸室石です。岩石名は、角閃石安山岩に分類されています。その後約2万年前、戸室山の西部で大規模な山崩れが発生しまして、戸室石を含んだ大量の土砂が山の西側約2キロの範囲に広がりました。こうして戸室石を含む地層は、戸室山・キゴ山の本山域だけでなく、西側の丘陵地＝前山域にも及んだ訳でございます。石切丁場も、破線で示したように、前山域を含む広い範囲から見つかっています。

**石切丁場の分布範囲** これまで確認した石切丁場の採掘地点は、数にして約700、範囲は東西3.5キロ、南北3キロ、面積にして570ヘクタールという広大な範囲に及びます。これらの石切丁場のほとんどは、実は、まだ所在確認を終えた程度の調査段階なのですが、それでも場所によって、採掘跡や石材などに特徴があることが分かっています。これを手掛かりにグルーピングしたものが、図のⅠからⅤの囲み線です。この5つのグループの意味は、結論から申しますと、「採掘時期の違い」を示していると考えています。その理由を説明しはじめますと間違いなく時間オーバーになりますので、今回は省略させていただくことにしまして、このあとは、近世初期、前期、後期、この3つの時期に大別して、石切丁場の特徴をお話ししたいと思います。

**近世初期の石切丁場** まず最初は、近世初期の石切丁場です。この時期は、戸室山西側の丘陵地帯が主な採掘域であると考えています。低く小さい丘陵が、島状に点在する地域で



す。金沢城との位置関係では、最もお城に近い場所となります。そこでは、山の斜面に、小規模なクレーター状の窪地がたくさん残ってしまっていて、それが原石を掘り出した痕跡、つまり石材採掘坑です。この地域は、戸室山崩壊の時に土と石が地表を覆った場所で、概ね1mクラスの戸室石が地表面や、地下の比較的浅いところに埋もれています。採掘坑が小さい訳ですから、1箇所掘り出した原石の数は数個程度でしょうし、原石自体も小振りですから、石割りで形を整えると、原石1個から2個の石材がつかれるかどうか、といったところでしょう。いわば「一本釣り」に近い採掘を基本に、それを次から次へと繰り返して、石の数を確保したのだらうと思います。

**近世前期の石切丁場** 次の近世前期の石切丁場は、キゴ山から戸室山にかけての本山域に移動します。立地的には、山裾の斜面から尾根の上、キゴ山では山頂近くでも、採掘の跡が見つかっています。本山域は大粒の原石が豊富な場所です。それに対応してか、採掘坑の規模も10mクラスとなります。大型原石を半分に割り、それを更に半分にする、という具合で石割りを3回以上繰り返しながら、必要な寸法とふさわしい形の石材をつくっていく。その当たりの様子がキゴ山西オクノタニ丁場跡によく残っています。

**石切丁場の再編成と近世後期の石切丁場** 戸室石切丁場は17世紀後半、寛文年間の採掘の後、単発的な石取りはありますが、石垣石の石材採掘は一旦中断しまして、閉山状態になりました。それが再開されたのは約100年後の近世後期、安永5年(1776)のことでした。再開後の石切丁場については、文献記録がたくさん残っておりまして、当時の様子をかなり具体的に知ることができます。その舞台となった「戸室山御丁場」は、実は戸室山の北端部、現在の田島町、清水町地内だけでした。

つまり、近世前期にキゴ山まで、広域に拡散した石切丁場は、少なくとも江戸後期には、戸室北部に一極集中するかたちで再編成されたものと考えられます。そのタイミングが戸室山での石切り再開の時なのか、あるいは近世前期の中で再編成が進んで、寛文年間の閉山時には既に北部集中の状態にあったのか、そのあたりが今後の調査で詰めていかねばならない課題です。

この北部地区の石材採掘坑は、直径15mから20m、深さ5mを越えるような大型採掘坑です。なかには近代に採掘していたことが分かっている箇所もありますので、そのすべてが近世後期の遺構だというわけではありませんけれども、採掘作業が集中的におこなわれていたことは間違いないと思い

1 石切丁場は、どこにあるか.....① 近世初期



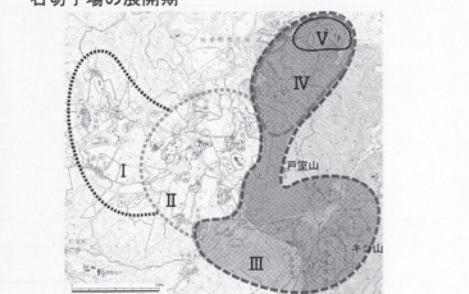
- ① 金沢城に近い前山域の丘陵地
- ② 小規模密集型の露天掘り
- ③ 小型原石→石材1、2個程度




採掘坑の規模は径3~4m程度      石材は割り面、小型刻印

1 石切丁場は、どこにあるか.....② 近世前期

石切丁場の展開期



1 石切丁場は、どこにあるか.....② 近世前期





- ① キゴ山～戸室山の本山域に拡散
- ② 採掘坑の規模拡大
- ③ 大型原石→分割成形




1 石切丁場は、どこにあるか.....③ 近世後期

石切丁場の再編成

清水～田島地内

1 石切丁場は、どこにあるか.....③ 近世後期

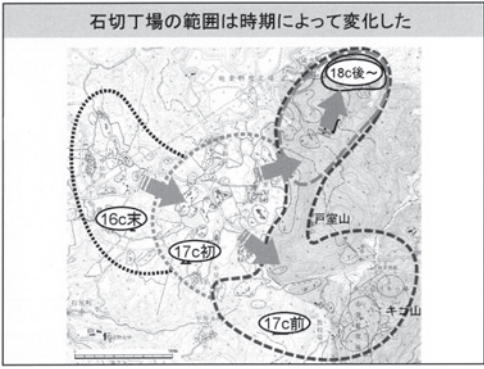
- ① 戸室山北端に一極集中
- ② 大型で深い採掘坑(15m～)
- ③ 「戸室山御丁場」




ます。また、画面のような絵図面も残っていて、当時の記録と現地の遺構とを、きちんと照合することもできます。戸室山北端域は、戸室石切丁場を考える上で、欠くことのできない大変重要な場所であると言えます。

**採掘域移動の意味** このように、「戸室石切丁場は、時期によって採掘域が変化した」というのが、ここ数年の調査成果です。では、なぜ採掘域が移動したのか、ということが問題になるわけですが、これは、もう少し基礎的調査を続けてデータを

を集め、事実関係をきちんと把握した上で考える必要があります。今のところの見込みでは、ただ単に、城に近いところから着手したとか、石を採り尽くしたから奥へ進んだという、それだけではなくて、石垣づくりの技術の変容であるとか、石材採掘の体制変化であるとか、石切丁場以外の条件との関わりも含めて、移動の理由を説明する必要があるのだろう、と考えています。



## 2. 石切丁場では、どのような作業が行われたか

次に、2つめのテーマ「石切丁場では、どのような作業が行われていたか」に移ります。

これを探るには、文献記録や伝承の聞き取りを進める方法が一番具体的です。ただ、その多くは、石切り作業の再開後にあたる近世後期以降の情報になります。

近世前期や初期の石切丁場で、何が、どのような形で行われていたのか、ということを探るためには、現地に残る遺構の分析、つまり考古学的なアプローチが必要です。となると、やはりまだ資料不足、調査不足の感が否めませんが、今回は、あえてそこに踏み込んで、お話ししてみようと思います。

**石材採掘坑の形状と分布** 石切丁場を考古学的に見ていくときに大切なことは、相互に異なる要素を見いだすだけでなく、互いに共通する要素を確実におさえることだと思っています。

この点でいうと、戸室石切丁場の全てに共通することの1つ目は、石材を掘り出した窪地、つまり採掘坑と、それに伴う土砂堆積、ここでは排土山と呼びますが、それが必ずあるということです。これは、とりもなおさず戸室石の採掘が、時期や場所を問わず、露天掘りで行われていたためです。戸室石の埋蔵状態という、自然的な条件に強く規定された共通性と言えます。

2つめの共通点は、この窪地と排土山からなる遺構は、単独ではなく、複数群在しているということです。群をなす採掘坑の数は、2、3基のものから、10数基のものまで様々です。これは初期から後期まで、時期を問わない共通の現象です。

この二つの条件を満たすなら、たとえその場に石が見あたらなくても、戸室石の産出範囲内であれば、そこは、石切丁場であった可能性があると考えています。

**石材遺存状況の3類型** さて次に、石切丁場には、どのような形で石が残っているのかについて、保存状態が大変良好なキゴ山の丁場を例にご説明しましょう。そのパターンは3



つあります。

1つは、採掘坑の中に、原石だけがあるパターンです。石を割るための矢穴は、まだ掘られていませんし、割ったときに出る割りクズ石もありません。ただ、原石に小さい刻印がつけられていることが多く、原石の周囲には、土を掻き出した痕跡、つまり採掘坑や排土山が確実に伴っています。

2つめのパターンは、採掘坑内に、石垣石として加工を終えた完成品の石材がある。あるいは加工途中の未製品が残っている場合です。完成品の石材には、正面に大型の刻印がついていて、城内石垣との対比から、キゴ山が寛永期の石切丁場であることが分かります。また、資料に図を載せましたが、石割り加工の途中で放置された石材や、割りの作業を終えて、最終調整段階にある石材など、現地での石割り作業の現場が、あたかも時間が止まったかのように、リアルに残っている。これは、城郭石垣の石切丁場全般に言える際だった特徴です。

その一方、3つめのパターンですが、割り石のクズや、使い物にならない小型の石はたくさんあるけれども、未製品や完成品は残っていない採掘坑もある訳です。

このように、石の残り方で分けられる3パターンの採掘跡が、石切丁場の中でどのように分布しているかを示したのが、この図面です。場所はキゴ山西丁場跡A群と呼んでいる石切丁場になります。ここでは図の左側、つまり山裾側になりますが、そこに1グループ、中腹に1グループ、そして頂付近に1グループと、計3つの小グループがありまして、クズ石のみの採掘坑(▲)と、完成品や未製品を伴う採掘坑(■)は、同じ小グループの中にあります。一方、原石のみの採掘坑(●)は、山頂付近に固まっています。

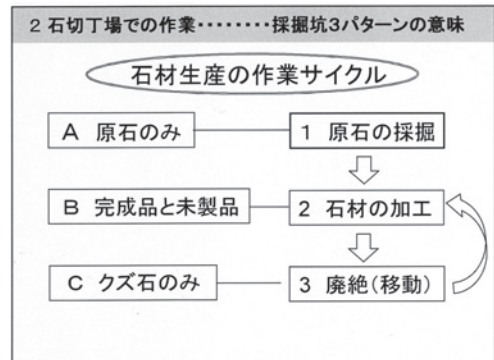
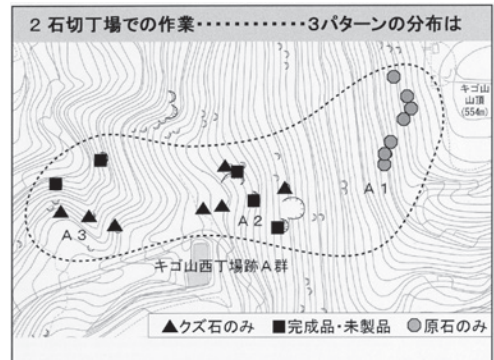
これは、どうしてでしょうか。あるいは、なぜ、3つのパターンの採掘坑があるのでしょうか。

その答えは一つではないかも知れませんが、私は3パターンの採掘坑というものは、おそらく、石切丁場で行われた石材生産の作業サイクルを反映しているのではないかと考えています。

つまり、原石のみの採掘坑は、土中から原石を掘り出しただけで、まだ石割りに着手していない地点、完成品や未製品を伴う採掘坑は、その後続く石材加工を実際に行っていた地点、さらにクズ石のみの採掘坑は、その場で石材生産が終わって、次の場所へ移動した跡地である可能性を考えたいと思うのです。

石切丁場の刻印 考える手がかりはもう一つあります。それは刻印です。

キゴ山西では3種類の刻印を確認していますが、この場所では、三角形の中心に点を打つタイプ(●)が、採掘坑の3グループに、共通して見られます。つまり、この3グループは、同じ刻印を共有するような関係だった訳です。山頂のグループ、これはまだ石割り作業に着手していないグループ



でしたが、そこにも、おなじ刻印があります。

刻印が同じだ、ということ、どう評価すべきかは、考古資料だけでは証明しにくい課題なのですが、例えば、城下町絵図では、下屋敷の位置が分散している場合、下屋敷にマークをつけて、どの重臣に連なる下屋敷であるのかを示しています。

こうしたマークの使い方を参考にすると、刻印が同じということは、石切丁場の場合、同じ石工のグループというか、一つの石工の組に属することを示す、と考えるのが自然ではないでしょうか。

ただ、それが、Aのマークは富田組だとか、Bは滝川組だとか、特定の組が特定のマークを常に固定的に使っていたかどうか、については、慎重に考える必要があると思っています。

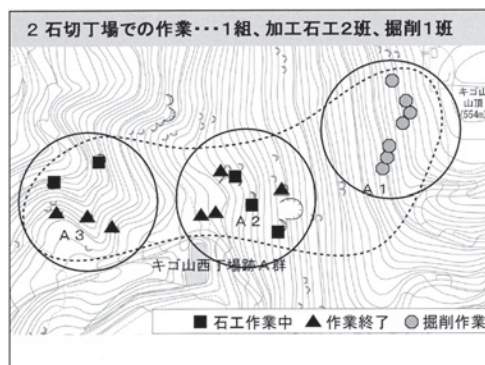
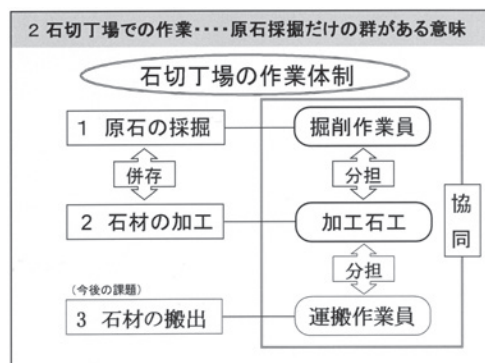
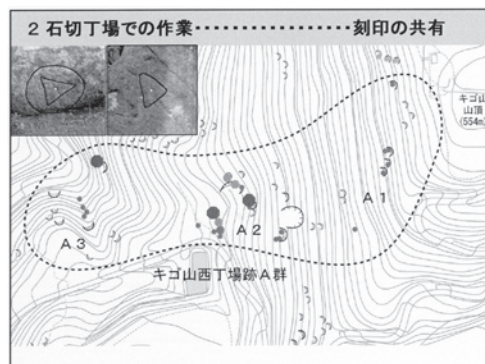
戸室石切丁場の作業体制 話を戻しますと、キゴ山西では原石採掘段階の場所と、石材加工段階の場所とは、同じ組が作業を行っていて、しかも作業内容が異なりますので、同時併存していてもおかしくはない、ということです。作業の担い手という観点から言い換えれば、土を掘る掘削作業員と、石を割って加工する加工石工とが、分担して仕事をすすめるような作業体制を想定することができることになります。

また、これも遺構としては不明瞭なのですが、できあがった石材は、当然、運び出す必要があります。石材搬出の担当も、石工とは別の手として組織されていたと思います。掘削と加工と運搬、この三者がそれぞれ役割を分担しながら、協同で作業を進めるとというのが、江戸前期の作業体制ではないかと考えられる訳です。

そういう視点から、もう一度、採掘坑の分布状態を見ますと、加工石工は山裾と中腹の2班に分かれて作業を行っている。それとは別に、掘削作業班が、より標高の高い、奥まったフロンティア的な場所で、次の石割り作業を速やかに進める下準備をしている。そして、それらが全体として一つの組に編成され、同じマークを使っていた。そういう状況が復元できるのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

また、加工石工の作業形態についても、採掘坑の中に完成品や未製品が残っていること、採掘坑の中はさほど広くなくて10坪に満たない程度ということ、つまり、大勢で仕事ができるほどの作業スペースはないということ、この2つから言えそうなことは、採掘坑の中が石工の作業場であること、そこでは一人ないし数人の加工石工が仕事をしていて、石工の仕事は、石割りから石材完成まで一貫して行われていたこと、つまり、加工工程によって作業場所を分けたり、分担したりするような作業分担スタイルは想定しにくいこと、などが指摘できるだろうと思います。

石切丁場の作業単位は、意外と小規模でプリミティブなのではないか。というのが、江戸前期の戸室石切丁場に対する現在の理解です。





少々分かりにくい話だったかもしれませんが、考古学的な手法で、どこまで石切丁場の実態に迫れるのか、これからも分析を深めていきたいと思えます。

### 3. 石材は、どのようにして運んだか

**修羅引き** では最後に、石材の運搬のことを紹介しておきたいと思えます。これは、「築城図屏風」という屏風絵に描かれた「修羅引き」の様子です。資料の表紙裏にも、口絵として載せておきましたので、あとでごらんください。おそらく鏡石として使う石材だと思えますが、3m近い巨石を木製のソリに載せて、大勢の人足が引っ張っています。ソリの下には丸太が敷かれていて、これを丸太持ちの人足が順繰りに前に送っています。また、最後尾には修羅の舵とりをする梶子使いがいます。石の上には、異形の衣装をまとった木遣りが、ホラ貝や太鼓を鳴らしながら音頭を取って、引き手が力を入れるタイミングを指図しています。石釣り こうした修羅引きの風景は、当時の石材運搬では通常の姿だと思われがちですが、実は、必ずしもそうではありません。金沢の文献では、修羅引きも巨石を運ぶ方法として確かに出てきますが、石材運搬の基本は、「石釣り」だとされています。

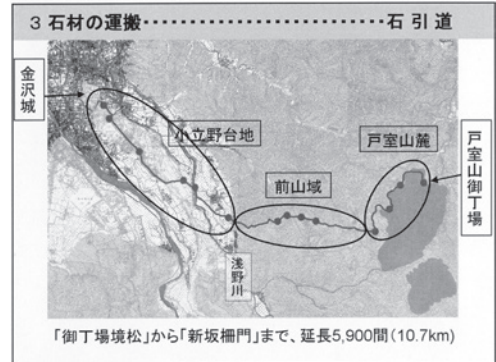
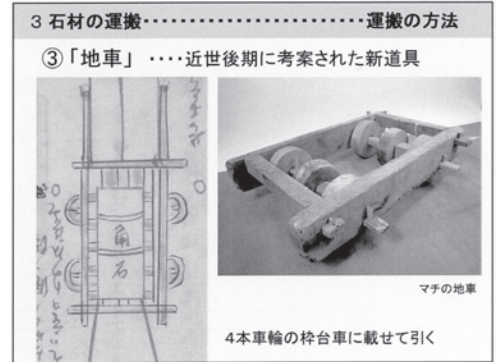
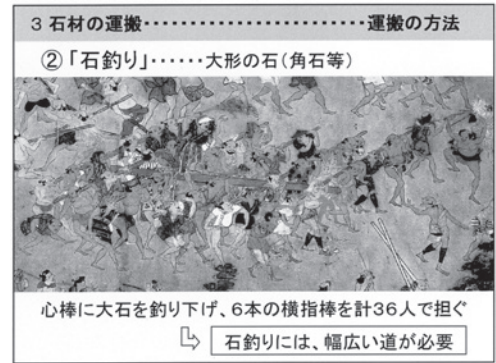
**石釣り** というのは、このように、石を釣り下げた心棒に、4本ないし6本の横棒を指し渡しまして、横一列に並んだ担ぎ手が、4列横隊、6列横隊になって、石を運ぶ方法です。この図では、1列が6人で、6列横隊の、計36人で担いでいますが、もう少し小さい石では、1列8人が、2列縦隊で担ぐこともあったようです。石釣りには、それなりに広い道幅が必要となりますから、石引道の規格とも関係します。

**地車** 近世後期になると、新しい道具が考案されました。それは、地車と呼ばれる、枠台車です。石を台車に乗せ、ロープをかけて引っ張ります。台車には車輪がありますので、運搬効率が向上し、また、経費節減にもつながった、と文献には書かれています。

**戸室山麓の石引道** 石釣りや地車を使った石材運搬は、専用に整備された石引道を通して、城内へ運び込まれました。石引道は、丁場の入口から城の入口まで、延長5,900間、約10.7キロの道のりです。地形的には、戸室山麓、次ぎに前山城、そして小立野台地と、3つにゾーンニングできます。

まず、戸室山麓ゾーンですが、ここは山あり谷ありの山間部ですので、アップダウンを最小限にとどめるために、等高線に沿って、山を巻くように進みます。

それでも、避けきれない難所がいくつかあったようです。その一つが、「大渡し谷」と名付けられた谷です。安永5年の石切り再開時には、谷底まで下って登るつづら折りの旧道を山側に迂回して高低差を少なくしたバイパスが造られています。現在の道は、その時に造られた新道でありまして、文



書では大田切新道という名前が付いています。

前山域の石引道 戸室山本山を抜けて前山域に入ると、道は小山をすり抜けながら、ほぼ一直線に西へ進みます。石引道の道幅は、五間、約9mが基準です。石釣りという方法で、石材を運ぶためには、これだけの幅が必要になるためです。地車が採用されてからも、道幅だけは五間を踏襲しました。

写真は、戸室別所地内の石引道の現状です。現在の道路幅は4m弱ですが、隣に帯状の畑がありまして、これを含めたものが、当時の5間幅の石引道になります。

お城への戸室石の供給に、特別な役割を果たした場所が、前山域のはずれに位置する「中山」地区です。寛文年間、戸室本山の石切丁場を閉山するにあたりまして、ここ中山の石引道に沿って、約4,000個の石材がストックされた記録があります。もちろん、閉山後の石材需要に備えるためです。実際、安永年間の石切り再開も、中山の石材備蓄、特に大型の角石がなくなったことに、端を発しています。

中山を超えると、「ネバ坂」という名の、長い坂道をくだります。坂道には、とりわけ急な坂になる場所が7ヵ所ありまして、いかに安全に急坂を下るか、それが重要な課題でした。石引にあたっては、上り坂よりも、下り坂こそが、気を引き締めるべき難所だったようです。

ネバ坂をすぎると、田上に出ます。写真は現在の田上橋です。この川下に石材運搬用の仮橋を架けて、浅野川を越えた様子が記録に残っています。増水で川を越えることができず、予定が遅れた、という記事もありますので、浅野川越えは、石引きの最後の難所だったようです。

『御造営方日並記』という書物、これは文化5年の二ノ丸御殿再建の時に書かれた造営奉行の業務日誌ですが、そこには、浅野川を越えたあと、石引の人足達の労をねぎらうために酒を手配する、という記述が何度か出てきます。用意された酒の量は、人足130人に対して3斗1升、とありますので、一人あたり3合弱の計算になります。これは、結構飲めるということなのか、ちょっと少なめ、ということなのか。そのあたりは、人によって印象が異なるかも知れませんが、とにかく、作業員に祝儀の酒を振る舞うような、石引の節目が、浅野川越え、でした。

小立野台地の石引道 川を越えると、「牛坂」という坂から台地に引き上げます。あとは、最近移転しましたが、金大工学部グラウンドの脇を通過して、小立野の街道筋に進み、天徳院の脇の「亀坂」の谷をこえて、石引通り経由で城内へ入ります。



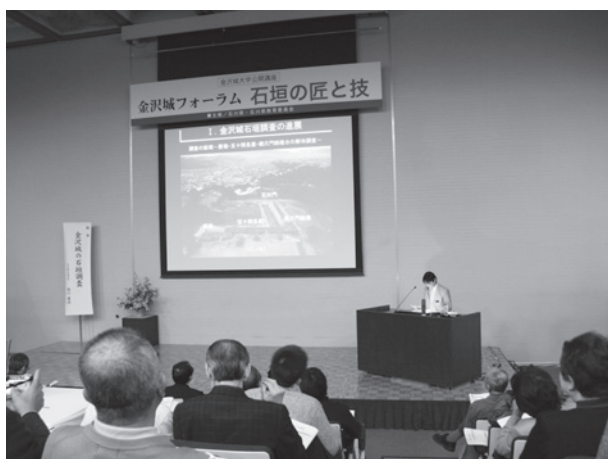
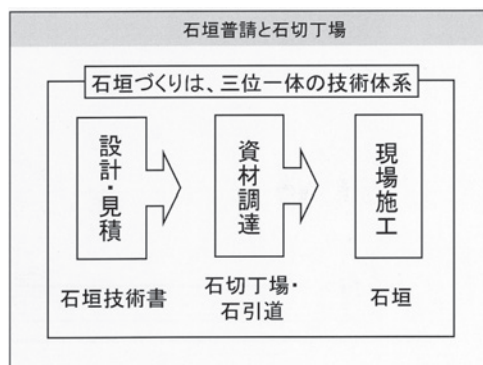
この間、急ぎで2日、大きな石だと5日間程かけて、石を運んだようです。

#### 4. 石垣普請と石切丁場

石垣づくりは、設計と見積の作業から始まります。それに基づいて資材を調達し、城の現場で積み上げる訳です。設計、資材、施工という、それぞれの技術が一体となって、石垣普請が実現されます。

戸室石切丁場や石引道は、直接的には資材調達を担った現場ですが、石垣造りは三位一体の技術体系ですので、調査研究の面でも、石垣技術書や、城内の石垣との関連性というものを意識しながら、進めることが大切なのだろうと考えています。

時間がまいりました。私の報告は以上でございます。ありがとうございました。



滝川報告



木越報告



富田報告



北野報告

木越 隆三

はじめに

四年前から城絵図および、石垣技術に関する文献の調査を始めていますが、調査を進めるなかで、重要資料は大体すでに北垣先生が周到に考察されていることに気づき、北垣先生の拓かれた跡をひたすら追っかけているような感想をもっています。しかし、今日は北垣先生の大きな業績を踏まえながらも、出来るだけ新しい成果を紹介したいと思います。どこまで、うまくできるかわかりませんが、努力したいと思います。

最初に「城作りのプランナー」と書きましたが、金沢城の築造において、城の大手を西方から北の尾坂口に変更し、内惣構を築造したといわれる高山右近、あるいは本丸で高石垣を造営した篠原出羽守（一孝）といった人物が「縄張り巧者」として知られています。また最初の金沢城主佐久間盛政、次いで金沢城に天守や石垣を作った前田利家、その後城作りを引き継いだ利長・利常などの藩主たちも城作りのプランナーといってよいでしょう。大名自身のものの考え方や意志が、城の基本構造に大きく作用したことが予想されるからです。

午前の北垣先生のお話によれば、江戸初期、加藤清正のように石垣の名人と呼ばれるような大名は、いずれも優秀な穴生を召し抱えていたということでした。つまり、いい石垣職人を抱えていないと、いい城も出来ないということでしたが、私の今日の話では、石垣作りを命じた大名や篠原のような有力武将ではなく、その下で石垣作りに直接従事した専門職人である穴生衆・御大工あのを おだいのような職人頭たちを「城作りのプランナー」とみて、彼ら特に穴生を中心に報告したいと思います。このような現場で陣頭指揮をとる穴生を中心に、普請現場ではどのような作業がなされたのか、どのような労働編成がとられたのか、主に文献史料をもとに概要を紹介したいと思います。また彼らの家臣団の中での身分や地位についてもふれ、彼らの技術が子孫にどのように伝えられたのか、技術継承の問題にも最後に少しふれたいと思います。

ここで、会場からの質問に一つ答えておきます。私の資料では石垣職人のことを「穴生」と表記しましたが、北垣先生の資料では「穴太」とあります。こういう文字の違いに何か意味があるのかという質問が寄せられていますが、異なる文字にした理由までは、残念ながら、いまの段階ではわかりません。「あのを」の地名については、穴太のほか「安濃」などもあり多彩ですが、加賀藩の史料では藩直属の職人名として「穴生」の文字を使っています。漢字表記は、音韻の宛字として使われることもありますので、字面に惑しづらわされると本質を見失う恐れがあります。「あのを」と発音されたことが重要であると、私は考えており、漢字表記は穴生・穴太どちらでもよいと思います。加賀藩の穴生関係史料では、「穴生」と一般に書くので、私の話では穴生に統一しました。

## 1. 藩に仕えた穴生たち

それでは本題に入ります。加賀藩で石垣造営に従事した現場作業員は石切と呼ばれており、扶持人石切と二十人石切に区分されています。前者は足軽並み、後者は小者身分（苗字なしの武家奉公人）に相当すると思われます。穴生は、これら石切たちと一線画された上位の身分しぶんで士分に属します。といっても士分の中でも最下層の「御歩並おかなみ」という身分です。お目見え以下です。所属は普請会所という役所で、普請奉行さらには、その上にいる金沢城代（年寄衆）が上司となります。そこで加賀藩前田家の穴生を定義すると「石垣職人として江戸初期より召抱えられた藩士。お目見え以下の御歩並身分で普請会所に属し普請奉行・金沢城代の支配をうけ、最大300石から切米40俵程度の扶持を得る」となり

ます。なお、御歩並身分の相続については、お目見え以上の士分（平士以上）のように世襲が当然という家柄ではなく、親の功勞により嫡男や養子への相続が、個々に「格別のこと」として認められる身分であり、安定した世襲ではなかったようです。足輕・小者の場合は、完全に「一代抱え」であり世襲ではありません。原則一代限りで身分も職務も終わりますが、終身まじめに奉公すれば、その功勞に免じて子孫を同職に付けるということが広く行われたので、外見上、世襲同様にみえる面がありました。原則は世襲ではありません。御歩並の穴生は、足輕よりも優遇されており、完全な一代抱えとはいえませんが、世襲ともいえない微妙なあり方だといえます。

前田家に仕えた主な穴生としては江戸初期の穴太源介、寛文年間(1661~73)に活躍した後藤権兵衛、宝暦大火後の城再建時に活躍した正木甚左衛門、12代藩主斉広時代(1802~22)に頭角を表した後藤彦三郎など、個性豊かな穴生が多数輩出されています。前田家が天正15年(1587)、最初に召し抱えた穴太源介については、午前の北垣先生の講演のなかで紹介されましたので省略します。穴太源介は丹波の穴太出身という伝承をもち、100俵(50石)で前田家に召し抱えられましたが、それより少し遅れて召し抱えられた後藤家についてふれておきます。

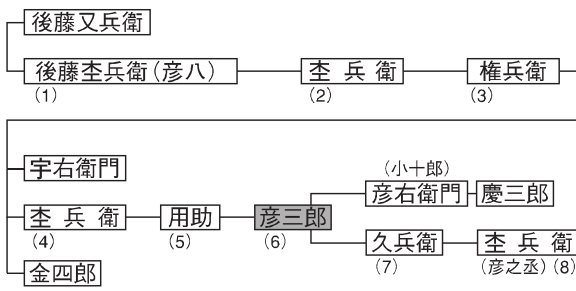
後藤家の先祖由緒書によれば、後藤家の初代彦八の出身は播州三木であります。三木城主別所氏の家老に後藤又兵衛という石垣作りに通曉していた武将(～1615、黒田孝高・長政に仕えた武将で大坂陣では豊臣方の勇将として活躍)がおり、その次男が後藤彦八で、天正6年(1578)、越前府中で前田利家に母衣役として仕官したと由緒書で主張しますが、確かな文献はありません。ただ、ここで注目したいのは、前田家に仕えた時は、穴太ではなく母衣衆であり、普通の武士として召し抱えられたという点です。その後、与力として篠原出羽守家に仕えたようですが、利長の代になって篠原家の「拝領者」となりました。つまり、篠原家の家来(陪臣)となり、慶長4年(1599)、篠原出羽守(一孝)から知行100俵(50石)を拝領します。これが最初の確かな古文書です。このあと元和8年(1622)、彦八は篠原家の家来から前田利常の直臣に復帰し70石拝領、奎兵衛と改名、「御石垣御用」に従事したといえます。

つまり、後藤彦八は利常のもとに直臣として復帰した頃、間違いなく穴生になっていたわけであり、篠原出羽は石垣作りを得意とする重臣であり、篠原家に仕えた時期(慶長年間)に、彦八は穴生へ転身したと推測されます。彦八つまり奎兵衛は、寛永13年(1636)に亡くなりますが、跡を継いだ2代目奎兵衛も利常に仕え、3代目の後藤権兵衛は寛文期に金沢城内で多くの石垣作りに従事しています。午前の報告で紹介した石垣編年の第5期の石垣にあたります。2代目の奎兵衛の代の寛永16年まで後藤家は出羽殿町2番丁、今の県立歴史博物館のあたりに屋敷があったと述べています(古伝書)。出羽殿町というのは、篠原家の家中町で、今も出羽町と呼んでいます。2代目後藤奎兵衛は、前田家直臣になってからも、出羽町に住み、寛永16年(1639)に利常が小松に隠居すると、いっしょに小松に移住し小松城で石垣造営の御用をつとめ、万治元年(1658)の江戸城天守台石垣普請にも参画し、万治2年死去したといえます。その後、江戸後期の史料によれば、後藤家の屋敷は犀川水溜御歩町にあり、文政年間、敷地が78歩から120歩に増えています(請地許可書)。引っ越したのは、利常死後、小松から金沢に帰った時なのか、さらにもっと後なのかはわかりませんが、江戸後期までに、出羽町から犀川筋の御歩町へ引っ越したようです。

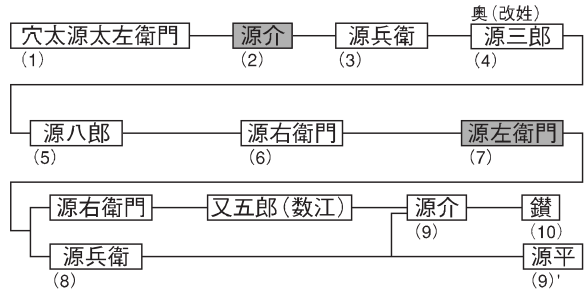
穴生の仕事については、戸室での石切そして石引き、城石垣の石積み、修理などがあるということでしたが、御歩並身分の穴生が石切たちを指揮し、これら一連の業務にあたったわけですが、資料1に後藤家と奥家の系図を掲げましたが、後藤家の6代目の彦三郎は、多くの石垣構築の技術書、秘伝書を著した人物で18世紀末から19世紀前半に活躍します。奥家は最初に前田家に仕えた穴太源介の子孫ですが、4代目の源三郎のとき奥と姓を改め、7代の源左衛門が後藤彦三郎と同時代となります。その頃、後藤家の分家からも穴生が出ています。幕末になると奥家では石垣御用以外の業務に就くこともあり、石垣職人の仕事が大きく減少したことが窺われます。

(資料1) 後藤家系図・奥(穴太)家系図

後藤家系図



奥(穴太)家系図



奥家・後藤家のほかにも加賀藩に多数の穴生が召し抱えられていたことが、侍帳などをみていくとわかります。まず「慶長10年(1605)富山侍帳」には穴生又助が載り、「寛永4年(1627)侍帳」には、戸波清兵衛300石(江州穴生出身)・杉野久左衛門100石、後藤李兵衛70石・奥源兵衛50石・杉野清右衛門50石、藤田三右衛門40石の6人が載っています。また、寛永16~17年の小松城普請に従事した「穴生の弥七」が『三壺聞書』にみえます。戸波清兵衛は駿河ともいい、北垣先生のお話にも出てきた公儀穴生、つまり幕府直属の穴生でありまして、幕府から100石支給されていましたが、加賀藩からは300石もの高給で抱えています。ヘッドハンティングされたわけですね。

また、万治元年(1658)の江戸城天守台石垣普請に石工400人が金沢から動員され、石切頭小川長右衛門・戸波清兵衛・杉野茂兵衛(以上近江坂本出身)や後藤李兵衛、石工検見の勘七などが穴生として動員された記録があります。藩士の石垣奉行・石奉行・石引奉行・くり石奉行などの下で活躍したようです(古伝書)。したがって寛永4年(1627)から万治の江戸城普請まで、公儀穴生の戸波は加賀藩に仕えていたことは間違いありません。ところが元禄年間の「普請会所役付等覚書」(河内山家文書)という記録に、戸波駿河300石・奥源三郎70石・後藤権兵衛49俵・杉野伝右衛門35俵・後藤勘左衛門30俵・林市左衛門29俵の六人の穴生の名前を収録していましたので(資料4)、元禄年間まで、公儀穴生の戸波清兵衛の子孫を300石で召し抱えていたことがわかりました。この史料は初めて紹介するものですが、戸波清兵衛について「江州坂本在住、旅宿野町松任屋」と注記し「無役で出銀の負担はない。藩主が国元にいる時はご機嫌伺いに出仕していたが、近年は不参である」と書き、「先年、飛脚にて礼物を送ってきたが藩の大老衆の判断で、藩主へ、ご披露なく返却した」という出来事も記しています。公儀穴生といえども、扱いがかなり軽くなってしまったという印象をうけます。このように寛文・延宝以後の戸波家は、近江穴太に住み、何か御用があれば金沢にきて宿に泊まり御用に応じたようですが、かなり疎遠になっていたと解釈できます。「普請会所役付等覚書」には、扶持人石切(2人扶持・銀200匁支給)として正木甚左衛門・下沢市左衛門の名前をあげ、このほかに石切が12人いたと書いています。ほかに「扣切石売上人 千日町石屋権右衛門」という石の商売人、藩に切石を買ってもらっている商人名もみえ興味深い記録といえます(資料4)。

このほか「享保9年士帳」には、奥源右衛門70石、後藤李兵衛50俵10人扶持、後藤只右衛門40俵の3人を載せ、「天明3年侍帳」は奥源左衛門70石、後藤元右衛門35俵、後藤用助50俵と正木吉左衛門を載せています。このほか名前は略していますが扶持人石切が6人いたと記載します。

なお、穴生の正木吉左衛門は、正木甚左衛門の息子と思われませんが、彼は、天明5年に奥源左衛門とともに改易、召し放ちとなっています(由緒一類附帳)。天明5年9月に、隠居中の前藩主重教が、財政再建など藩政の低迷を憂い、突如弟の藩主治脩を抑えて政治の前面に出て、質屋弾圧など極端な改革政治を断行しますが(天明の御改法)、これに連動し人事の一新がなされたのに引っかけたものと推定されます。この事件のあと、寛政年間から文化年間にかけて後藤彦三郎が台頭することになります。

このように加賀藩では多いときには6人、少なくとも3～4人は穴生を常時召し抱えており、ほかに扶持人石切や二十人石切まで抱え、相応の祿を与えていました。他藩と比べ多かったといえます。

## 2. 穴生方の仕事

それでは、次に穴生はどんな仕事に従事したか、具体的な史料に即して紹介したいと思います。資料2の「穴生方の勤務内容」を御覧下さい。これは享和2年(1802)に11代治脩から12代齊広に藩主が交替した際、穴生方の後藤彦三郎ら4人から普請奉行に、自分たちの勤務内容を上申したものです。藩主交替時には、このような「勤方帳」という書類が各役所で作成され上司に提出されます。これを読むと穴生がどのような業務に従事していたか具体的にわかります。資料2では原文(漢文)を読み下し、現代語で要約しています。

まず「1、工事見積り」を見てください。下線の「<sup>すみいし</sup>角石」・「<sup>すみわきいし</sup>角脇石」は、滝川さんの話にあったもので、石垣構築の核となる部分です。「かつら石」は石垣の最上部に置かれるもので、「くり石」は裏込めに入れる栗石です。こうした石材の必要量や小者・石切などの必要人数を、切石積みや割石積みなど石垣の積み方に応じ、所要日数、延べ日数などを積算することが穴生の仕事であったとわかります。現在の役所や会社が行っている工事積算にも匹敵する見積り作業を行っているのに驚きます。次に「2、資材・道具類の見積りと届出」では、石垣普請に必要な資材や鶴嘴や玄翁などの道具類の調達も計画的に見積もり、普請場所に設置する仮囲や現場事務所にあたる仮小屋も<sup>つるはし</sup>図面を作成し準備しています。準備の仕方がたいへん周到であります。3・4はとばし5にいくと、修理工事は、まず石垣石や裏詰石の撤去・解体作業から始まったことがわかります。作業時間は午前7時から午後4時頃まででした。

8では、午前に北垣先生から紹介のありました「<sup>のりあい</sup>規合・<sup>のりかた</sup>矩方」について述べています。石垣の勾配をどのように取るかという施工技術は、後藤家のような穴生の家に伝来した「家法」をもって決めるといい、それは従来の石垣通りに積むことを原則としていました。そのための指示を「<sup>さしず</sup>指図」や「<sup>さしず</sup>絵図」にしたため、現場で施工にあたる扶持人石切らに指示しました。扶持人石切は石積みの現場監督という重要な役割をしており、穴生は現場監督である扶持人石切に、秘伝の「<sup>かねじゃく</sup>規合・矩方」の技法を指示し、その施工結果を吟味する「<sup>かねじゃく</sup>曲尺合わせ」を行い相違がないか点検したようです。工事検査のようなことをしていますから偉いんですね。

9では、石垣の積み方は往古の通りにせよといい、「石取り」「石配り」「裏詰め」の工事仕様は、毎日穴生から扶持人石切や二十人石切に申し渡すと言っています。石取り、石配りは、石積みの基本作業と思われ、裏込め石の作業と同時に進めたのでしょう。この作業を扶持人石切と二十人石切が主に担当したこともわかります。8・9で指示する秘伝の技術に関わる<sup>さしず</sup>絵図などが、後藤家文書のなかにたくさん残っています。その中の一点を今回のフォーラムのポスターでも利用しています。後藤家文書のなかで彦三郎は、このような秘伝を現場の石切たちに口頭で伝えるけれども、文書などに書いて指示するなどいい、最も大事な所は秘伝として、一族の穴生家であっても教えてはいけないと述べています。10では、前にも指摘していますが、石垣は古例通りに修復するのが第一だと言っています。それは彦三郎の金沢城石垣に対する観察眼、古来の石垣に対する評価によるものといえます。まだたくさんの箇条があり、きりがありませんが、13をみると、大きな角石を<sup>さしず</sup>棧橋から引き上げる時の道具の工夫についてふれています。大石を釣り上げるのは、たいへん手間のかかる作業だといいい、その場に応じた臨機応変の工夫が要ると言っていますが、具体的にどんな工夫をしたかはわかりません。時間がないので、これ以外は略します。

次に、このような石垣修理事業や石垣構築に、どのような労働力が動員されたか説明したいと思います。石垣作りに動員された労働力として、いちおう三種類の労働力があつたとみています。一つは

やくこもの役小者、一つは村・町から動員された百姓・町人の夫役人、もう一つは金沢町などに在住する日用、つまり日雇い人足の雇用です。このほか町石工などの民間業者に委託することも、江戸後期にはあったようです。

やくこもの役小者というのは、藩士が藩主への義務として負担する普請役（軍役）の一種で、知行千石につき普請人足を3人負担するのが原則ですが、3人のうち2人分は代銀で納め、1人分は役小者という人足で提供する慣例が、万治3年（1660）までには確立していました。たとえば加賀八家（藩年寄衆）の前田土佐守家は知行1万石ですので、普請役は毎年30人負担しなければなりません。20人分は銀納で、10人分を小者で提供しました。土佐守家の当主が小松城代とか学校方御用などの役職を勤めると、それに対し「役引き」という特典があり、30人の負担が半減されたり全額免除となることもありました。「役引き」がなければ30人の役小者を提供し、割場という役所を通して石垣工事現場などに「懸け渡される」というシステムでした。その土佐守家には28人の小者がいたという記録があり、そのうち2人は石切専門の小者を召し抱えていましたので、彼らは優先的に石切や石積みの現場に送られたのでしょう。5万石の本多家にも石切小者が数名召し抱えられていました。家臣団から提供される役小者には、専門性をもつ石切小者が含まれていたため、穴生たちも石垣構築現場では重宝したように思います。石積みは夫役人や日用でなく役小者をもって行うのが正当なあり方だと後藤彦三郎は書いています。

夫役人というのは、村・町から動員されるもので、村の石高千石につき1人という高割で賦課されました（千石夫）。500石の村なら2カ村で1人ですね。しかし、こうした村からの一律の夫役徴発は江戸初期に限られ、改作法のあった17世紀中期以後は、村からの徴発はほとんどなくなります。普請人足は農耕の妨げになるという理由からでしたが、それでも時々、金沢周辺の村では、石引き作業に動員されることはあったようです。ただし、その際、賃金を払っています。村・町に村請・町請による夫役人を依頼し、藩からも賃金を払ったのですが、それは江戸初期から行われています。百姓・町人など領民を城作りや土木工事に動員するのは、無償の労働徴発であるというイメージが戦後歴史学において形作られています。それは間違っていると私は考えています。戦国期より動員した夫役人には、それなりに、銀5分とか扶持米5合とか日当を払っています。

次に、日用は現在の賃銀労働に近いもので、普請会所に登録されている藩指定の日用頭（町人）が人を集め提供します。17世紀後半以後、日用の比重が大きくなります。大坂や江戸では多数の日用が必要とされ、膨大な人口が形成されたといわれます。先般公刊いたしました『御造営方日並記』によれば、1808～10年の二ノ丸再建にあたり石引作業に日用・夫役人・役小者の三者が動員されたことが窺え、石切丁場では役小者が主に使用されましたが、田島村・戸室新保村など戸室山麓の村人も人足として動員されたことがわかります。このほか石切技術をもつ町石工・町石切がいたことも断片的ながらわかります。また、石材を供給する石屋から石材（庭石・敷石・土台石）を購入したり、石切を委託する例もありました。しかし、町石工の状況については、まだ十分な研究蓄積がありませんので略します。

### 3. 穴生方後藤彦三郎と技術書

では最後に、後藤彦三郎とその石垣技術書についてふれたいと思います。さきほどの富田さんの報告で、戸室石切丁場は寛文・延宝期（1661～80）から安永年間（1772～1780）にかけ約100年ほど石切作業が中断されていたという指摘がありました。宝暦9年（1759）の金沢大火で金沢城の大半が焼失し、宝暦11年から再建事業が始まり、宝暦13年に藩主の御居間が再建され、その年4月藩主重教は新御殿に移住します（資料3参照）。また同じ年の6月に、五十間長屋下石垣台の修築が始まり、穴生衆による石垣修理も本格化します。



17世紀後半に戸室山麓の中山村で四千個もの石を蓄え、戸室石切丁場での石切作業を中断していたわけですが、石垣修築普請が宝暦大火によって本格化したことで貯蔵石が底をつき、戸室石切丁場を再開する必要にせまられます。宝暦大火前から、石切丁場の再開と石切道の拡張や再興が検討されていましたが、大火をきっかけに拍車がかかります。細かな経緯は略しますが(資料3参照)、安永5年(1776)には「留山」とされていた戸室石切丁場が解禁され、戸室での石切そして石引き、さらに城内での石積みがすすめられました。この結果、城内に滝川さんの示された石垣編年第6期に相当する石垣が作られます。

宝暦～天明期にかけての、この一連の動きをリードした穴生は、扶持人石切から穴生に昇進したばかりの気鋭の穴生、正木甚左衛門まささきでありました。同時代の穴生であった奥源右衛門や後藤用助の活動に覇気は感じ取れません。正木の先祖は、扶持人石切として現場で経験を積んだ階層に属しますので、穴生より一ランク低い身分から、技を認められ穴生に出世したのが正木甚左衛門でした。正木は石積みや石引きの現場に通曉していたため「地車」という便利な石の運搬具を採用するなど合理的判断のできる技術者であり、石垣「巧者」として評価されました。しかし、後藤彦三郎は「万事が手軽である」「日用は石垣普請に使用しないのが原則なのに、お構いなしに日用を使った」「石垣は古例通りに復元修復すべきなのに、先例を軽視した面がある」「正木は巧者な人間だから手柄を独占した」「正木の書類の書き方はいい加減だ」など正木を批判する言葉を吐いております(後藤家文書)。その正木甚左衛門の晩年に、ようやく後藤彦三郎が登場し、彼の批判を行ったわけです。

後藤彦三郎という人物は、後藤用助の跡を継いだ穴生方後藤家の6代目ですが、実は定番御歩じょうばんおちの栗山家の次男で、安永7年(1778)、24才で婿養子に入った人物です。戸室丁場が再開されたのは、その2年前でした。彦三郎は、「御歩並」の穴生より一つ身分が高い定番御歩の家に生まれたが、次男なので穴生の子に養子に入ったわけですが、天明4年(1784)、30才になってから穴生の御用見習を許され、寛政5年(1793)39才で漸く家督を継ぎます。穴生の家では幼少の頃から見習御用を勤め修練に励むのですが、彦三郎は30才になってやっと見習いとなり、40代になって穴生家当主となり、現状をみて石垣職人の将来を憂えたのではないのでしょうか。このように後から穴生の子に入り、ある年齢に達してから穴生の技術を身につけた彦三郎は、穴生として晩成とあってよく、おそらく扶持人石切の息子として少年期から現場に出ていた正木と好対照といえます。彦三郎は正木の活躍、そして彼の子供吉左衛門の改易といった盛衰をみて、穴生の危機を痛感したのではないかと思います。

享和年間(1801～03)から彦三郎の著述が始まりますが、文化年間(1804～17)、50代になってから、文政8年(1825)にかけ、金沢城の来歴や石垣技術書を書き、秘伝書の創作まで行っています。彦三郎・小十郎父子の著述した石垣技術書は約70点余にのぼりますが、穴生方後藤家文書213点のうち3分1を占めます。それらを簡単に分類しますと三つぐらいのグループに分けられます。一つは金沢城の歴史や諸施設の来歴を考証したもので12点ほどあります。それらの中には金沢城代に提出された「文禄年中以来等之旧記」(文政8年著)や上司への意見書もあります。文政8年11月に完成した「金城深秘録」は、それらの集大成とあってよいものでしょう。次に彦三郎や小十郎が穴生として個々の普請場で、たとえば橋爪門の櫓台工事や石川門続櫓下の石垣工事をどのように進めるか扶持人石切らに指示した図面類、石垣職人に技術的な指図をした際作成された図面類が14点ほどあります。三つ目としては、穴生の子の家長として子孫に技術伝授するため、経験知をまとめた冊子・図面類が19点ほどあります。その多くは文化元年から著述され、「他見不可」の断りを記載した秘伝の書が大半です。家に伝来する秘法を書き残したのですが、このうち元和・寛永および宝永の年号のある「秘伝書」は、どうも彦三郎が創作したものであると北垣先生がすでに明らかにされています。これらの秘伝は、文化12年から文政7年に書かれた「唯子一人伝」(五巻本・一卷本)に集大成されたようですが、この書物の名前が面白い。「ゆいしいちにんでん」と読むのでしょうか。ただ一人の息子、小十郎にたいし秘伝

を伝授するという意味なのでしょう。

これらの著作物を眺めていくと、彦三郎は三つの性格を合わせもつ特異な穴生であったことが窺えます。一つ目の性格は、藩の技術官僚として、ある危機感をもって意見具申する面、金沢城が軍事の城から御殿や庭園の城へと変化してゆく風潮に危機意識をもつ武士としての側面です。二つ目は、伝統ある穴生の家の家長として、責任をもって子孫に技術伝授をする職人の棟梁という性格であります。三つめとして、上の二つの性格の土台となるものといえますが、危機意識や家に伝わる技術を表現するにあたり、歴史的な考証を行い、また兵学や陰陽道などの学識をもって整理するなど、考証家・学者的な資質を発揮しております。このような学者的な性格、危機感をもつ武士としての性格、技術伝授を責務と考える職人棟梁的性格、この三つを併せ持った存在だったと思います。

## 結 び

最後に「技術を記述する意味と影響」と書きましたが、時間がありませんので、彦三郎の技術伝授について一言だけ申し上げたいと思います。

彦三郎は石垣技術の秘伝書を著し、それを他人に見せるな、秘伝であると注意を促しているけれど、これだけ多くの著述がなされ、その一部は城代や普請奉行にアピールするため奉呈されてもいましたから、完全に秘匿されたわけではありません。むしろ後藤家に伝わる技術を記述する過程で技術というものを相対化し、かつ客観化したように思われます。さらに書かれた技術書は書物を通して子孫以外の人々にも伝達可能となったように思います。つまり普遍化の可能性をもったわけであります。それが実際にどこまで流布したのか、まだ解明されてはいませんが、後藤家文書の原本を見てみると、そのような普遍化の可能性を感じさせてくれます。それではこれで終わります。御清聴ありがとうございます。御座いました。

### (資料2) 穴生方の勤務内容 享和2年(1802)「穴生勤方帳」の要約

<奥源左衛門・後藤彦三郎・後藤小十郎・後藤金平→ 普請奉行4人>

#### 1. 工事見積り

城中石垣普請の仰せ付けがあれば、石垣を見分し縄張坪数を見積る。角石・角脇石・かつら石・平石・くり石がどれくらい必要か見積もり、労働力も家中役小者は何十人必要か、二十人石切は坪当たり何十人必要か、積み方に応じて積算し、完成までの日数を積算する。石垣の積み方を勘案し、普請箇所事情に応じ石切高の増減を見積る。

#### 2. 資材・道具類の見積りと届出

普請御用の諸品(資材)や御道具類については、石垣の坪数や普請箇所の性格に応じて見積もり、帳面に記載し道具奉行へ送り点検を受ける。そのあと、穴生方として道具調達経費を見積り普請会所で帳面を調べ、普請所の仮囲・仮小屋の略絵図を添付し金沢城代へ上申し決済を受け普請にかかる。

#### 3. 御道具の受領

普請御道具の受取りは、普請会所棟取が調べ、道具奉行中へ連絡し穴生方の印証文通り、扶持人石切が受け取る。

#### 4. 仮小屋建造

普請所に設置する1年限りの仮小屋は、石垣坪数・設置期間・番人数の多少により、小屋の規模を決めて建てる。

## 5. 石垣石・裏込石の取外し

仮小屋・仮囲などができれば、石垣石・裏詰石などの取り除き作業に取りかかる。

## 6. 普請場の勤務時間

毎朝6つ時より普請会所および仮小屋へ出仕し、6つ半時（午前7時）頃に工事を始め、夕方7つ時（午後4時頃）まで従事。

## 7. 火の番

普請箇所仮小屋に火の番の役小者を昼夜2人ずつ配置。

## 8. 規中矩方の指示

石垣の規中矩方は家法をもって決め、元どおり復元するため指図や絵図を扶持人石切に渡し、吟味し曲尺合わせに相違なきよう申し渡す。

## 9. 石取・石配等の指示

石垣の積み方は、往古の築き置きを通り相異なく積立てる。石取り・石配り・裏詰めの仕様などすべて扶持人石切、二十人石切へ毎日申し渡す。もっとも、積み方については前もって覚書を申し渡す。

## 10. 古例通りの石積が第一

すべて石垣は古来築き置きを通り、縄など元のごとく相異なく積み立てることを第一と心得る。

## 11. 石垣技術は秘伝

石垣は地形により種々の縄張りがあり、その築き様・積方などは秘伝ゆえ、すべて書き上げていない。

## 12. 点呼と休憩

普請人数の点検は、朝五つ時（午前8時）と昼9つ時（正午）の2回行い、休憩は1日2回とり、拍子木で合図している。

## 13. 大石釣上げの工夫

角石を棧橋から引き上げるときは、車などの道具を使って引き上げる。大石の引上げは所により非常に手間取るので、それぞれの場に応じ工夫する。

## 14～17. 石垣見分の立合い等

城中御巡見、金沢城代の城中見分・普請視察の際、地震・災害時は城を見廻る。火事の際は仮小屋や普請会所に詰める。

## 18. 石垣修理願の絵図作成

幕府へ石垣修理願を行うための修理願絵図の下絵を作成、地震で崩れた石垣や孕んだ石垣の間数なども絵図に示す。

## 19. 貯石場からの石材調達

修理用の足し石は戸室山麓の中山村から地車で引出し、小石なら釣り出す。

## 20～23. 普請場の労務管理

役小者の点呼と人数確認は、毎朝出す指紙で行う。怪我した役小者の見届けと手当なども行う。

## 24. 足代・棧橋等の設置

宝暦大火前は、石垣足台・棧橋・仮小屋・仮囲などは作事所が設置し、大火以後は穴生方配下の者が対応。冬場は雨覆を設置し普請行う。

## 25～29. 決算事務

諸品・諸道具の出納管理。道具類の点検と返上。諸道具・荒物等の道具奉行への返却。御道具・役小者の年切り決算帳作成と上申。御道具・松木・役小者高の1カ年の決算帳面と入切手の集計など決算事務。

### 30～32. 石切の役支配

扶持人石切と二十人石切の役支配を担当。病死の扶持人石切の代人選び。二十人石切からの推挙。二十人石切が病死または交替を願った時は代人召抱えの吟味行う。

### 33. 先祖の業績

穴生衆の先祖が担当した業務は、江戸城天守台石垣普請・小松城石垣・・・石動山などがある。

### 34・35. 石垣等の清掃管理

城内石垣の竹取り、草木根取りは、他役所が担当していたが安永年中より私共が担当、年中5・6度根取りを行う。城の坂道修繕、式台の豆砂利ならし、堀の掃除、土居修理などは、それぞれ担当者がいるが、時々私共にも命ぜられる。

### 36～39. その他

毎年冬中、来年用のくり石・夫石を役小者に運ばせる。城中御用のないときは、二十人石切は犀川・浅野川の川除普請の定小屋の番人を勤める。城中の見回りは年に数度行う。毎朝、扶持人石切は城中を見回る。藩主の参勤発駕・帰城前は御通行筋の石垣見回り、石垣の詰め石および草取りを行う。

## 戸室山での御石割等御用勤方

### 1. 戸室石切場の来歴

往古は石切出し・石釣り御用に穴生方は関与していない。その当時は、山奉行・道奉行は定番馬廻・組外組の藩士が就任したと聞くが、万治の頃、戸室本山から中山村まで夥しき数の角石等を釣り出し、一部は城内に釣り出し普請に使用し御用を済ませた。宝暦大火前後より普請用御石を中山村まで釣り出し置き、地車をもって引き出した。安永年中の本丸高石垣普請の仰せ付けで、角石を要求され、安永2年、往古のごとく戸室山が再開され、戸室に出仕し御石を段々切り立てた。安永7年、大角石引出しを命ぜられ、道難所につき新道建設が仰せ付けられ、山奉行・道奉行兼帯で勤めるよう御城代より命ぜられた。

### 2. 石切丁場の見分

戸室の石割御用を勤める以前は、中山村の御石や戸室石切丁場の見分を毎年2回行い出役した。

### 3・4. 戸室山の仮小屋に、穴生・御扶持人石切・二十人石切は交替で止宿。

### 5. 石割御用は、毎年3・4月頃より10月中旬まで。

### 6. 石切丁場を仕舞い帰るとき、御小屋や御丁場の締まりをし、二十人石切に見回りさせるが、大雪で差し支えれば田嶋村肝煎が代行。

### 7. 石割手伝いは家中小者を使うが、家中小者が不都合なら日用を手伝わせる。

### 8. 石切丁場の朝の刻限は御城と同様。

### 9. 石切工程

御石は山巻きを行い、掘り出したあと割立てに取り掛かり、柁目等を詮議し、大割・中割・小割を順に行う。角石・角脇等の寸尺は御普請会所の御手当に従い、石垣の高さの割合によって小割し角石等に割り立てる。もっとも角石に仕るべき石はとくに吟味する。

### 10. 石切丁場からは屑石であっても持ち出しを堅く禁ずる。

### 14. 役小者の不法取締まり

役小者が丁場内の山中から柴などを切り出し、道中で田畑を荒らさぬよう杖突に嚴重に取り締まらせる。

### 17. 修羅から地車へ

往古は石の引出しは、石釣り(肩に担ぐ)や修羅で行ったが、役小者を多数動員する必要があり、

宝暦年中に地車が登場し大石引き出しが便利になった。小人数で済み便益が大きい。地車を使用し始めた頃は手木足軽を雇ったが、すぐに扶持人石切等が馴れ、御雇いは中断された。

### 18～23. 城内への石引入れ

中山村より御城中へ御石を引き入れる時は、私共が暁天より出役、御石などの惣締まりに従事。御城中より中山村まで一里半、中山村から戸室山まで一里半、都合三里の道程。戸室より中山村までの御石引きのとき私共も出役。中山村より御城中に御石を導入する時、先払いの割場足軽を二名配置。中山村筋の道修繕がある時も、穴生は暁天より出役し指図を行う。

#### (資料3) <年表> 宝暦大火後の穴生衆の活動

1755	宝暦5年	城内石垣修理用の「足し石」が不足となり「戸室山御留山」解禁を検討したが、当面は中山村の貯石で対応することとした。
1759	宝暦9年4月	金沢城下の大火で金沢城の大半が焼失。
1761	宝暦11年	城の再建工事始まる。
1763	宝暦13年4月	藩主重教、再建なった新御殿（御居間廻）に入居。6月五十間長屋下石垣台の修築始まる。穴生の正木甚左衛門らが鋤始式行う。
1764 ～70	明和初期	中山村の貯石が払底し、戸室本山丁場の再開準備を進め、正木甚左衛門に石引道の増設・拡幅が命ぜられる。
1771	明和8年	10代藩主重教、金谷御殿に隠居、弟治脩が11代藩主となる。
1775	安永4年	奥源左衛門、父の遺知70石相続し穴生となる。
1776	安永5年	田嶋村領などで石切再開（戸室丁場再開）。後藤用助、戸室山仮小屋に詰める。
1778	安永7年	栗山家の二男彦三郎、後藤用助の婿養子となる。奥源左衛門、戸室石引新道付替につき山奉行・道奉行兼務。
1779	安永8年	後藤用助、山奉行・道奉行兼務。
1783	天明3年	正木甚左衛門から吉左衛門へ代替わり。
1784	天明4年	彦三郎、金沢城石垣御用及び戸室山石伐出御用見習許され切米30俵拝領。
1785	天明5年	奥源左衛門と正木吉左衛門、天明の御改法に連座し、知行・役目召放ち。
1786	天明6年	重教逝去。彦三郎、戸室石で石槨作り野田山に納める。
1793	寛政5年	彦三郎、父用助の跡相続し切米50俵拝領。
1795	寛政7年	彦三郎、重教長男齊敬逝去につき石槨作る。
1799	寛政11年	彦三郎・小十郎親子、地震で石垣大破につき幕府への城郭修補願絵図を作成。
1800	寛政12年	彦三郎嫡子小十郎、穴生に登用され、山奉行・道奉行兼帯。この年より「定普請」始まる。
1806	文化3年	彦三郎父子、石川門下石垣修理に従事。関連の石垣修築設計絵図を作成。
1808	文化5年	彦三郎父子、二ノ丸御殿再建事業に加わる。橋爪門櫓台などの設計絵図作成。
1816	文化13年	彦三郎父子、本丸高石垣普請に従事。
1820	文政3年	彦三郎、功勞により新知行80石拝領。居屋敷78歩拝領。
1822	文政5年	彦三郎、嫡子小三郎とともに竹沢御殿(12代藩主の隠居所)の石垣普請に従事。
1825	文政8年	彦三郎、加増うけ100石取となる。
1828	文政11年	彦三郎、病死。

(資料4) 元禄年間の普請会所職員と石切道具覚書

元禄年間「普請会所役付等覚書」(河内山家文書)より

『普請会所役付等覚書』(加賀市 河内山家所蔵)は、墨付81丁におよぶ手帳である。河内山家に残る系図や由緒帳によれば、河内山家は藩の馬廻組藩士(200石取)であり、18世紀前半に当主となった河内山忠太夫は内作事奉行を勤めたという。河内山家と普請会所との関連については、今後解明しなければならないが、本文書は普請会所の人事・法令・来歴などに関する手控であり、職務を行ううえでの私的なマニュアルといってよい。

本文書の冒頭に書かれた元禄9～15年時点の「普請会所役付」(職員・出入業者一覧)と、83～84丁目に書かれた穴生の任免記事と石切道具の記録(11月20日付北国新聞で紹介)は、フォーラムで報告したことと関連が深いので、この3点に限って内容を紹介した。

(1) 元禄9～15年の普請会所職員一覧

役職	人名	肩書・注記など
普請奉行	1 高島久兵衛 (1200石)	元禄3年12月10日就任 (元禄15年御免)
同上	2 高木庄兵衛 (1000石)	元禄6年5月14日就任 (元禄15年御免)
同上	3 浅加十郎右衛門 (1000石)	元禄9年8月22日就任 (元禄15年御免)
普請道具拵奉行	1 大野伊右衛門	定番馬廻組
同上	2 田部佐次右衛門	定番馬廻組
普請道具渡奉行	1 城戸伝右衛門	
同上	2 湯原伸右衛門	
才川河除御普請奉行	(不記)	
浅野川河除普請奉行	(不記)	
普請銀渡方諸事帳切手算用当り吟味役	坂井伝兵衛	35俵
御屋敷方并地子出来退転算用役	山木勘七	35俵
川除破損修理見積役	時目伝内	30俵
領国中川止・川除破損修理見積役	1 河合半四郎	20俵
同上	2 橋本仁兵衛	20俵
石垣普請之時分手木遣役 (御屋敷方兼役)	小島弥助	20俵
石垣普請之時分手木遣役 (紙裁許兼役)	林 徳右衛門	20俵
物書役并御家中定杖突	山本源右衛門	給銀290匁
穴 生	1 戸波 駿河	300石、江州坂本住居。当地宿松任屋次兵衛、 豎町。無役、出銀不出之、前々ハ御在国之時 分、為同御機嫌罷越、近年不参、先年飛脚上 之候処、御大老衆御指図ニ而御披露無之相返、 年頭御礼錢百疋上之。
同上	2 奥源三郎	70石、無役、出銀上之
同上	3 後藤権兵衛	49俵

同上	4 杉野伝右衛門	35俵
同上	5 後藤勘左衛門	30俵
同上	6 林 市左衛門	29俵
扶持人石切	1 正木甚左衛門	2人扶持 銀子200匁宛、小払銀并御堂形米之内を以請取。
同上	2 下沢市左衛門	2人扶持 銀200匁宛、小払銀并御堂形米之内を以請取。
石 切	1 六左衛門	御扶持方御給銀右同断、但役銀之内を以請取。
同上	2 七右衛門	御扶持方御給銀右同断、但役銀之内を以請取。
同上	3 覚右衛門	御扶持方御給銀右同断、但役銀之内を以請取。
同上	4 仁右衛門	御扶持方御給銀右同断、但役銀之内を以請取。
同上	5 伊左衛門	御扶持方御給銀右同断、但役銀之内を以請取。
同上	6 八兵衛	御扶持方御給銀右同断、但役銀之内を以請取。
同上	7 治兵衛	御扶持方御給銀右同断、但役銀之内を以請取。
同上	8 佐左衛門	御扶持方御給銀右同断、但役銀之内を以請取。
同上	9 甚兵衛	御扶持方御給銀右同断、但役銀之内を以請取。
同上	10 十兵衛	御扶持方御給銀右同断、但役銀之内を以請取。
同上	11 又兵衛	御扶持方御給銀右同断、但役銀之内を以請取。
同上	12 小兵衛	御扶持方御給銀右同断、但役銀之内を以請取。
人持組下奉行詰所番人	前原六左衛門	給銀170匁
御馬廻組下奉行詰所番人	岸井太右衛門	給銀170匁
石裁許并二十人之石切裁許	(不記)	割場附足輕
御普請方帳切手跡書	(不記)	割場附足輕
二十人石切懸取役、外御扶持方石切1人宛加り勤之	(不記)	割場附足輕
竿取并諸方使役	(不記)	割場附足輕
辰巳水道裁許	吉田紋兵衛	
定番足輕	早川七郎兵衛	
役銀奉行	1 原 九郎三郎	馬廻組
同上	2 福田市左衛門	組外
この外、七手頭下奉行・定番頭・御馬廻組下奉行・組外下奉行などの職名があったが、藩士名がないので略した。以上の所属藩士の後に、「御用相勤候町人」として普請会所出入りの町人名が、当地日用頭12人、遠所日用頭7人、算用場附日用頭10人、鍛冶10人、苧売上人3人、両川籠組2人など職種ごとに氏名を載せる。この外の出入商人では、荒物御用・柄木品々売上人・砂土御用・芝御用・蔣御用・扣切石売上人・筆売上人・墨売上人がそれぞれ1名のみ登録されていた。		

(2) 元禄4年正月の穴生の異動

一、私共支配之内穴生奥源三郎、(寛永21年穴生召出、寛文5年より70石、元禄16年没)四五年以前ヨリ病氣ニ罷成、御用相勤申儀難儀仕、其上今年七拾一歳ニ罷成申候、穴生之内後藤権兵衛、近年中風相煩、林市左衛門儀も病者ニ罷成、御普請御用之時分、後藤勘左衛門・杉野伝右衛門兩人ニ而相勤申候故、手間申候間、右源三郎せかれ源八郎、(寛文8年より見)当年三拾一歳ニ罷成候、御普請御座候時分指遣候様ニ可仕と尋候、以上、  
辛未(元禄4年)正月廿二日 高(高島久兵衛)・津(津田治兵衛)・戸(戸田清大夫)

御年寄衆充所

此書付入 御覧候処、僉議次第之旨被 仰出候、御普請手つかへ候時分ハ、源八郎相勤候様仕、其身裁許之様子見届可被申候、以上、

辛未(元禄4年)三月廿九日 前田佐渡(孝貞) 印

(3) 普請会所が管理する石切道具覚

- 一、新丸鑿 柄ナシ 羽釣鑿 四角ハツリ木ニハサム、先平  
羽釣玄能鉄鎚ナリ タ、キノミ  
羽玄能直ニ石ウチカク羽金入タルツチ  
小鎚鉄ノ小キツチ也 ○羽釣鑿 ハツリノミ柄縮タル
- 大玄能 大石ノ矢ヲワルモノ也、五貫目五貫目迄有之、
- 石鍍リ シユラアクル石ニカクルクサリ也、
- カナツキ 土ニフカキ石ヲトルモノ也、長三尺計有之、丸ク先ホリナルモノ也、
- 石マワシ
- 天秤 四本入、五本入トテ天秤ノ切カキヨコホウヲ入所也、
- 定尺 カネナリ 南蛮金
- 大鋸 是ハ跡石垣御用ニ付、木切候トキ入タル由、

(後 略)

【参考文献】

北垣聰一郎『石垣普請』法政大学出版会 1987年

同 上 「穴太の系譜と石材運搬」(『日本城郭大系』別巻1) 1981年

木越隆三「武家奉公人の社会的地位」(『近世社会と知行制』思文閣 1999年)

脇田 修「近世初期の都市経済」(『日本史研究』200号 1979年)

竹松幸香「前田土佐守家の家臣団について」『金沢文化振興財団研究紀要』1 2004年

金沢大学日本海文化研究室編『金沢城郭史料—加賀藩穴生方後藤家文書—』1976年

金沢城研究調査室編『御造営方日並記』上下 2004年・2005年



北野 博司

只今御紹介いただきました東北芸術工科大学の北野と申します。午前中から石垣編年のことだとか、戸室石切丁場の話、あるいは、石垣普請に携わった人々の話がありました。ここではちょっと視点を換え、これだけ貴重だとか、全国的にも価値があると喧伝されている金沢城の石垣、それが、現代に生きる我々にとって、一体どういう意味があるのか、ということをごさんと一緒に考えてみたいと思います。

前半は石垣普請技術についておさらいし、後半は、木越さんのお話にあったような石垣普請に活躍した人物を再度取り上げながら、技術の世界と人の世界から学ぶべきと思う点を2つ指摘して今日の締め括りにしたいと考えています。

## 1. 都市の中の金沢城跡と石垣

金沢というのは、今日も観光客が随分沢山来ています。観光都市として、全国の観光地が今厳しい中、金沢は非常に人気を集めている歴史都市であります。その中にある金沢城は整備が進行中です。観光都市金沢の拠点として、魅力アップを図ろうと県を上げての事業が展開されています。観光資源として金沢城をみた場合、櫓・門・石垣・堀という4つの要素が近世城郭らしさを表す代表的な遺構です。どこの都市へ行っても、近世の城下町に端を発した所には、お城があります。その都市の歴史を知る時には、やはりお城を見るのが、手っ取り早い方法なんです。だから、金沢へ観光客が訪れた時に、金沢城を見て、やはり金沢の現代の都市の成り立ちというものを知る。そのような拠点をこれからどういうふうに整備したり、保存したりしていくか、非常に重要になってくると思います。

それで、現在テーマになっている石垣というのは、本当に観光資源になるのか、こういう問いをまず発してみたいと思います。石垣というものに対する一般的なイメージはどうだろうか、ということを考えてみます。石垣を見て、まず思うのは、古いもの、歴史性のあるもの、だということではないでしょうか。あるいは高石垣などを見ますと、非常にスケールの大きな、壮大さというのを感じます。それと、現代の人が造ろうと思っても、どうやって造ったかということを経験には想像させない神秘的な技術、あるいは、それを造らせた権力の大きさというのを感じることでしょう。それ以外にも、「癒し」という効果もあると感じます。石垣にそっと寄り添う、ただそれだけで自然の石がもっているやさしさとか、あるいは冬なんかですと、石がもっている冷たさ、そういうものを肌で感じるができます。また、非日常的な空間であるといえます。石垣がある空間というのは、そんなに我々の住む住宅環境の中にはないわけですから、非日常的と感じるわけです。実は、石垣がもっている、こういう性質というのは、一般に観光資源と呼ばれるものもつ性質をすべて兼ね備えているといえるわけです。

ただ観光資源たるためには、もう一つ大事なものは地域性です。金沢城らしさです。全国どこへ行ってもお城があつて、石垣があるわけですがけれども、やはり他の地域から、金沢城の石垣を見て、これは見たことがない、という感動を与えるような地域性、金沢城らしさというものが必要になってくる。そういうものを金沢城の調査とか研究に携わる我々は掘り起こしていく作業をやらなければいけない。今日のシンポは、2001年にこの金沢城研究調査室ができてから、その作業を行ってきたこれまで5年間の成果になるわけです。私は2001年に同じ会場で、フォーラムを行った時に、金沢城の石垣というのは石垣の博物館だということを申しました。その時指摘した4つの点というのが、石垣の多様性、滝川さんがお話しされたことです。その中でも「数寄の石垣」というふうに名前を付けましたけ

れども、庭園空間に主に配されました非常に、デザイン、装飾性の豊かな、見るための石垣が、金沢らしい個性的な石垣の代表であります。

2番目は、富田さんが発表されました石切丁場、石切道。石垣普請の技術とか工程を考えていく時になくはない、こういう要素が全国の城郭遺跡と比較しても、金沢の場合は非常によく残っている。さらに3番目は、木越さんがお話になりました秘伝技術書です。後藤家文書を代表とした石垣普請にかかわる古文書が豊富に残っている。

こういう3つの基本的な要素と現在、残っている城の石垣の保存状態が良いということ、さらにそれを我々が間近に観察できることです。江戸城なんかですと皇居ですから入れない部分もありますし、大坂城でも広大な水堀があって、なかなか石垣の近くまで立ち寄れない場所もありますが、金沢城はそういうことはない。こういう要素が博物館と呼ばれるゆえんであり、博物館が果たす機能を金沢の場合一番よく残しているのので、この点を象徴的にお話したわけです。

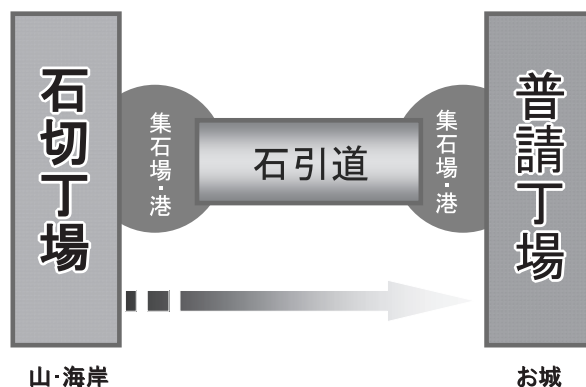
今日のテーマです。観光資源として石垣を見ていくことは非常に重要なんですが、その前にまず、金沢城という歴史遺産をかかえている我々石川県民が、この石垣をどうみていくのか、そこから何を学びとっていくのか。歴史遺産、文化遺産というのは、先人が作った遺産です。当時の石垣としての役割については時代の変化によりすでに一旦失われたわけですが、それが遺産として現代人にも何らかの価値を残している。歴史遺産として石垣を見た場合に、何を我々はそこから学んだらいいのか。私の個人的な意見として、これからお話をさせてもらいたいと思います。

## 2. 金沢城の石垣づくり

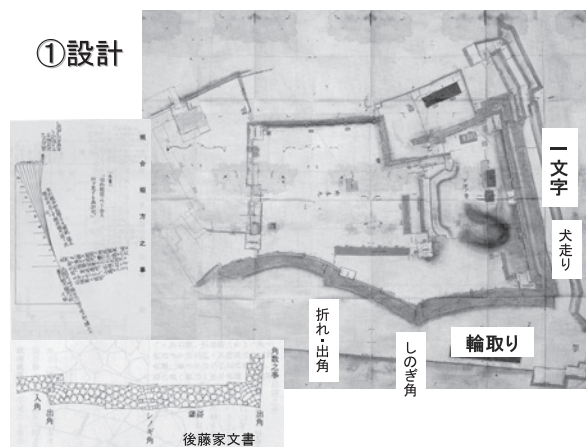
石垣造りの工程をおさらいします(図1)。左の方から石切丁場。ここに戸室山から出した石を集める集石場、中山村に石を貯める場所がありました。大坂城や江戸城の場合、船で石を運びますから、湊が大体そういうストック地になっています。普請丁場というはお城です。金沢城の場合は、お城の近くに仮置場があって、ここに切出した石をどんどん運んで来て、集めていました。

石垣造りの技を全部紹介していたら、とても時間がありませんので、2、3思いつくままに取り上げます。これは本丸の絵図です(図2)。本丸の南側にある高石垣を見ると、何やら複雑な形をしています。石垣というのは山なりに築く、自然地形に合わせて築くのだと穴生は言っています。そう言っても、例えば、百間堀に面した石垣は直線です。100m余りを一文字石垣、つまり直線に築いています。それに対し南側の方は何やら彎曲しています。こういう高石垣を長い距離にわたって築く時に、どうしたら崩れないかということ当時の石垣造りのプランナーであるとか、穴生たちは知っていて、例えば、直線の所はここに「犬走り」という小段を付けることで、上からの荷重を軽減する。あるいは「輪取り」という内彎するような曲線で石垣を築いていく。直

### 石垣普請の工程と場



(図1)



(図2)

線で築きますと真中の所に荷重がかかって崩れやすいので、そういう時には「輪取り」にしないと後藤家文書で絵図を示しながら提示しています。あるいはここに、折れ、出角と入角を造るわけです。こういうふうにしてひずみを分散していきます。「輪取り」の場合でも、両方とも「輪取り」にしていくと、ここの先端部が尖ってしまうのです。こういうのは、剣先というのですが、尖ってしまうと櫓が造れない。ですからわざと「折れ」を造って、ここに櫓をのせる。辰巳櫓の所もそうです。「輪取り」にしているけれども、入角で角を造って、櫓を造りやすいようにする。こういうような縄張り一つとっても設計段階で、崩れないような知恵というものが出ています。「のり」「反り」の話は先ほど、北垣先生の詳しい説明がありました。

次は2番目の石を切る段階です(図3)。これは戸室山で行っている作業です。この絵は、甲府城の石垣改修工事報告書の中から取らせていただきましたが、「石を割る」というのではなくて「石を切る」というのです。予めノミで矢を入れる穴を直線的に彫っておく。それから矢を入れてゲンノウで割って行く。その時に石の目を見る。柁目を見て石を切るのです。木ですと柁目にクサビを打てば簡単に木は割れます。石にも目があるのです。これは石を扱っている職人には当たり前のことなのですが、現代の我々のように石に親しまない人間にとっては「石の目を見る」ということはさっぱり分からない。ただやみくもに変な所に矢を入れると石は思ったように割れないのです。石工さんたちは、石をちゃんと見ることができる。そういう技術をもっていたわけです。

これは大坂城の元和・寛永期の石垣を造った石切丁場です(図4)。岡山県の前島という所にある石です。非常に大きな石に直線的に矢穴がずーっと掘られています。ただこれは最終的には石が割れていませんので、石の目が悪かったのか理由は分かりませんが、そのまま現在残されている。こういうものを見ると石を切るというイメージがよく分かります。

これも同じ大坂城の石切丁場、小豆島にあるのですが、本当にこういう巨大な石を割っているのです(図5)。高さ4m、奥行も確か4m以上あったと思います。それをここに矢穴を入れて割った時に半分に割れたのです。その時に下で作業をしていた職人が下敷きになって8人死んだという伝承が残っています。これは悲惨な例で後から供養塔が建っています。見てほしいのは、たとえ巨石といっても一つの石です。戸室山の石切丁場の話が先ほどありましたが、基本的には同じです。



(図3)



(図4)



(図5)

岩盤から切りとって行くのではなく一個の石を割って石垣石を作っていくということです。

次は石を運ぶ作業です(図6)。これも先ほど「築城図屏風」の絵にありました心棒に石を吊って大勢で担いで行く。修羅は大きいもの、小さいもの、様々ありますけれども、こういう二股のそりを使って石を引く。これは地車です。四輪の台車。記録では大八車みたいなものであるとか、先ほどの築城図屏風ですと、牛に引かせている例もあります。

これは今、小豆島で積み出し港の遺跡が整備されている例です(図7)。このように轆轤を設置して石を引いた様子が再現されています。下に角材のレールみたいなものを敷いて、丸太のコロを転がし、その上に修羅にくくり付けた大きな石があって、轆轤を回す棒が抜けていますけれども、この棒を何人かでグルグル回して石を引っばる。陸から船に積む時に、この轆轤が搭載された船を轆轤船といいますが、轆轤船を海に置いて、石との間にもう一つ石船を置いて、陸から海に積み換えていく。逆にその海から陸へ上げる時も同じことです。陸に轆轤を設置して、船から栈橋で石を上げていく。金沢城の場合でも、宮腰(金石)湊から、小松城の石垣普請の時に戸室山から石を運んでいますから、こういうような作業が行われていたとみられます。

石を積む現場でも、轆轤が使われた記録がいくつか残っています。こういう足場を組むような絵が、先ほどの築城図屏風の中に出ていました(図8)。金沢城では地面の方から栈橋・足代を組んだ絵図が残されています。石積みの技術というのは、滝川さんの発表でもありましたように、解体調査を行って、いろいろな工夫があることが分かってきました。こういうものは、現代の土木技術の中に生かされているものもありますけれども、明治以降の近代化、機械化の中でほとんど失われたものが多いのです。

しかし、江戸時代の石垣を築いた技術を個々に見ていくと、非常に納得させられるものが多いです。それらを逐一紹介できませんが、設計段階から、「石切り」、「石引き」、「石を積む」という一連の工事の中に、現代では失われてしまった伝統技術があって、それを我々は調査・研究して復元しています。しかし、古い技術を調べ、好奇心を満足させる。研究の目的はそれだけではないはずです。

技の話はここで終わりにし、これから石垣造りに携わった人々を見ていきたいと思います。金沢城の多様な石垣の中の一つの特徴である「数寄の石垣」と呼んでいるものがあります。言葉は適切かどうかわかりませんが、数寄というのは、風流とか、風雅を尊ぶ、茶や庭の世界の言葉です。玉泉丸庭園の借景になるような所に集中的に造られた石垣群のことを仮にこう呼んでいます。築造年代は、石

### ③石を運ぶ

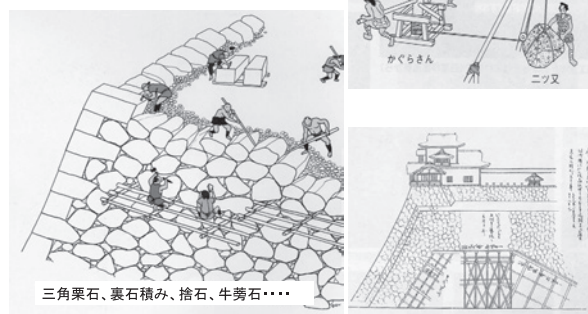


(図6)



(図7)

### ④石を積む



(図8)

垣編年の研究で寛文から元禄の頃としています。これを誰が企画設計したかというのは、実はよく分かってない。デザイナーというふうに書きましたが、元禄元年に玉泉院丸で千宗室に築庭を命じたという記録があります。庭造りのプランナーが、場合によってはかなり指導しているかもしれません。ただプランナーだけではもちろんだめで、それを具体化する技術者が必要です。その中で出てくるのが後藤権兵衛です。これは後藤家3代目の穴生です。代表的な石垣に、玉泉院丸庭園の石垣ではありませんが、鯉喉櫓台、崩れ丁場石垣であるとか、二ノ丸の菱櫓の下の石垣があります。後藤彦三郎が、城内で1、2の出来栄えだと評した、実際に非常にきれいな石積みです。その後の地震でもそれほど傷んでいない石垣です。こういう見事な石垣を築いた後藤権兵衛という穴生が、玉泉院丸庭園の借景石垣の仕事にも携わっていたようです(図9)。



(図9)

加賀藩には穴生が沢山いましたが、異色の穴生、金沢ならではの、という人物を二人紹介したいと思います。まず今ほど木越さんの方からお話のあった、正木甚左衛門。私は体力派、技能派と書きましたが、この人の記録というのは、後藤彦三郎の語った人物像でしか我々は知ることができないのですが、実は後藤彦三郎とは正反対の人格として記録に



二ノ丸五十間長屋台

(図10)

出てきます。扶持人石切の出身でした。お祖父さんは天和年間に江戸の本郷邸の石仕事のために行っており、同じ正木甚左衛門という名前が出ています。ですから安永年間に活躍した正木甚左衛門も、扶持人石切として下積みを経験した現場の叩き上げなのですね。絵図が非常に得意であったということで、宝暦年間に穴生に出世しました。この人の仕事ぶりというのは、本当に伝統にこだわらない、その場その場で創意工夫に富んだ仕事をしていたようです。この「御始石」(図10)を置いた、宝暦大火の後の二ノ丸五十間長屋の修築は、この人がやったわけですが、工事中に藩の上の方から工事費を半分に減らしなさい、と言われた。大変なことですね。穴生というのは、ちゃんと設計見積もりをし、工事費を全部積算して、仕事に入っていくので、途中からそう言われても困る。それを無難にこなしたわけです。地車という石運びの台車がありますが、石引きの大変な苦労を軽減する地車を正木が発明したと言われていています。発明したというよりも採用したというのが正確だと思います。伝統にこだわらずに新しい技術や道具を採用した。このほか、彦三郎が語っている面白いエピソードなのですが、例えば、辰巳櫓台の塀の不整合事件があります。これは五十間長屋の石垣修復の時に、焼失後の中を隠すため石垣の上に塀が建っていたのですが、これを本来は作事方が解体してから石垣の解体工事に入るのですが、甚左衛門は何でも器用にやる方ですから、自分で塀を解体して、石垣が出来た時に、またそれをぴったり元に戻しました。これを今度は辰巳櫓の時も同じように本来作事方がやるものを、自分が塀を解体して、石垣が出来た時にまた元のように戻そうとしたら、今度は寸法が合わなくなってしまって、作事方が慌てて出てきて、塀の寸法を変えてようやく完成した。そういう事件があったようです。まだ他にも面白い逸話がいっぱいありますが省きます。何れにしてもこ

のように工夫の人なのです。現場をよく知っている人なのです。

これに対し、後藤彦三郎は、木越さんの方から紹介があったように、穴生家の生まれではなく婿養子として入って来た人物ですから、見習い期間が非常に長く、一生懸命勉強しました。石垣に関する古典、歴史、あるいは兵学、算学、そういうものを学んで家のために沢山の技術書、歴史書を書き残しました。彦三郎が一番こだわったのは、「伝統」です。あるいは、「法式」という後藤家に代々伝わってきた石垣の秘伝、自分が歴史や兵学を学んで作り上げた、彦三郎流の法式、それにこだわった。正木甚左衛門を非難するのは、例えば辰巳櫓を造る時にも、彼は設計図も作らず簡単にああいう工事をやっているんだとか、それは許せないことだと記録に残しています。彦三郎は秘伝技術を体系化するに当たって、基本にしたのは、「陰陽五行説」という当時の思想、あるいは芸術に通底する「真行草」の考え方でした。後者はわかりやすくいえば、書道の世界という楷書・行書・草書です。「陰陽五行説」というのは、万物世の中の世界というのは、陰陽、あるいは五行、木火土金水という五行の調和の上に成り立っているのだ、という考え方です。ですから、石垣の世界であっても、金沢城の縄張りの世界であっても、こういう陰陽五行が調和していないと、その城の価値、石垣の価値は定まらず、安寧は生まれないと主張します。彦三郎以前に造られた既存の石垣、あるいは技術というものを、自分なり

## 積方五行

- 山目積・・・東(木)
- 鶴目積・・・西(金)  
(金場取残積一西)
- 三角積・・・南(火)
- 亀甲積・・・北(水)
- 四方積・・・中央(土)

多様な石垣があればこそ・・・



(図11)

真行草……本来漢字書体に用いられた概念。日本では中世以降、「形態論」「階梯論」「適場論」として芸能(連歌・能楽・華道・茶道・庭園)に取り入れられた「石垣積方角石組様ニ真行草三ツハ真を以骨とす、行を以肉とす。皮を以草とすといへり。石垣ハ不及云ニ、手跡は猶更の事、其外諸芸此三ツある也」『唯子一人伝』

### ■石垣積方の真行草

真……本伐合・中伐合・半伐合・亀甲・金場取残・山目打込・同崩シ・面伐合  
行……鏡積・野面・半鶴半伐合・蘭伐合  
草……打込積・胴伐合・四方積・布築鶴目積

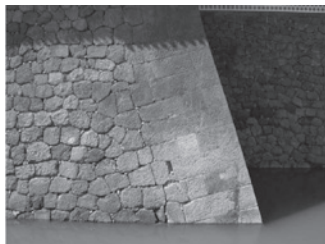
※山目打込・野面には草の角、半鶴半伐合・鶴目積には真行の角

### ■隅角部の真行草

真……角脇石3本  
行……角脇石2本  
草……角脇石1本

- ・「積方五行」……山目打込(春・東・青・木・陽)・鶴目(秋・西・白・金・陰)・三角(夏・南・朱・火・陽)・亀甲(冬・北・黒・水・陰)・四方(中央・黄・土・陰)
- ・「陰陽和合」……矩方・規合、陽石・陰石など、ほかに天人地(鏡積)
- ・「三忌五禍」……石の縁を切る、など

## (資料1)



1. 五十間長屋台石垣(真行の角)



2. 鼠多門続櫓台石垣(行の角)



3. 本丸辰巳下石垣(草の角)



4. 三十間長屋台石垣(陰陽石)



5. 尾坂門石垣(鏡積)



6. 石川門菱櫓台石垣(縁切れる)

(図12)

に勉強して陰陽五行の世界に位置付けたわけです。そこで、「新たな『型』の創出」という言葉を使いましたが、最終的に後藤流石垣秘伝と呼ばれるような世界を作っていたのです。ただ、これは他の芸能の世界と違って、もう既に石垣普請の技術は衰退期に入っており、江戸時代後期以後、継続することはありませんでしたから、「後藤流石垣」の世界が陽の目をみることはありませんでした。

真行草の角をスライドで紹介します(図12)。角脇石を3つ使えば真の角です。角脇石が2つののであれば、行の角。野面・山目には角脇石が1つで草の角。こういうものが調和的に城の各所、要所要所に配置されている。これで、万物きれいに調和しているのだと、いう考え方です。

この鏡積の石配りについても、天人地の考え方、そういう世界観が一つに調和した姿とされます。こういう石の配し方に一つの法式があるといっているのです。これは彦三郎が積んだわけではなくて、ずっと前の人が積んだものを彼なりに解釈し「法式」というものを主張したわけです。

五行の積み方では、山目積が東をさすとか、いろんな理屈を付けて多様な石垣の調和を説きます(図11)。亀甲積であれば亀というのは、玄武であり北の神様です。玄武というのは蛇と亀の合体した神様です。だから亀甲積は北に置かなければいけない。そういう思想を持ち、自ら多様な金沢城の石垣世界を、彦三郎なりに体系化した。その上で、自身が石垣を積む時にも、例えば亀甲石というものを二ノ丸の北にある土橋門の石垣中に置き、後藤流の世界を実現しようとする。橋爪門の続櫓の石垣台を積む時には、四方積。四方積というのは、中央積ともいうのですが、城の中央に置かなければならない。城中枢の大事な門の所に、四方積を自らが積んだというのです。こういう彦三郎の思想というのは、多様な石垣が金沢城にあったからこそ生まれたわけです。大坂城や江戸城では、後藤流の石垣の世界というものは生まれてこないのです。こういう所も、金沢城らしい石垣の中で生まれた、金沢城らしい思想、世界観だと思います。

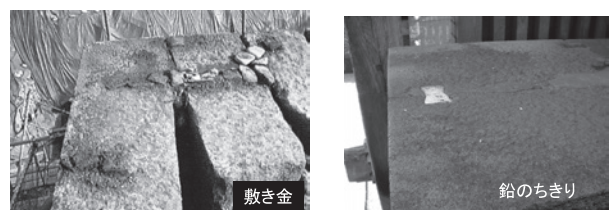
### 3. まとめ

時間がないので、最後に2つまとめをします。一つは金沢城らしい石垣を創出した人々、後藤権兵衛とか、謎のプランナーであるとか、正木甚左衛門であるとか、後藤彦三郎、皆、その時代時代で、地域にある資源というものを生かして、自らの個性によって、そこに新たな価値を創造していった。このことは金沢城跡の整備を託された現在の我々へのメッセージではないでしょうか。金沢城の石垣は、そんな彼らを顕彰する記念碑でもあると思います。

もう一つは、石垣造りの伝統技術。例えば、石の目を見るとか、木の種類によっていろんな所に使い分ける。石垣の基礎の土台木は松の木を使う。あるいは土についても、土を堅く叩きしめる時には、どういうふうに積んだらいいのか、石が開かないように、鉛のちきりなどを入れたりする。金属の性質をよく知って使い分ける(図13)。石垣普請の技術の隅々に、自然・物質に対する深い理解というものがあります。石垣普請の技術というのは、人間が生身で自然と戦う経験の中で積み上げられてきたものです。そこには沢山の知恵が詰まっている。機械化・技術革新が著しい現代社会の中で、伝統技術というものは、もういらなくなるかなあ、とさえ、我々は錯覚してしまう。けれども、実は今だからこそ、こういう伝統技術の世界にある、人と自然との良好な関係の中から生まれてきた知恵、技というものを我々は学んでいかなければいけない。

人類が後世に伝えていかなければならないものではないかと私は考えます。

最後に時間がなくて端折ってしまいましたけれども、討論で少し補足できればと思っております。ご静聴ありがとうございました。



(図13)

# 金沢城本丸櫓群の図面類について

## —辰巳櫓・三階櫓の図面類の検証—

正見 泰

### 1 金沢城本丸櫓群とは

金沢城の本丸・東ノ丸には、天守をはじめとして、天守焼失後の三階櫓、辰巳・丑寅・申西・戌亥の各隅櫓、大鎧櫓、小鎧櫓など10の櫓がかって存在しており、本研究ではこれらの櫓をまとめて「本丸櫓群」<sup>(1)</sup>と呼ぶこととする(図1)。これらの本丸櫓群によって、江戸前期の金沢城は百万石の大々名にふさわしい威容を誇っていたはずであるが、宝暦の大火(宝暦9年、1759年)により本丸櫓群は総て焼失した。その後、本丸三十間長屋を除いて再建されることがなかったため、本丸櫓群については、図面類や古文書等を検討するほかない。一方、利家の金沢城入城(天正11年、1583年)から宝暦の大火による焼失までの170年余の間に、元和6年(1620)の本丸火災、寛永8年(1631年)の大火や、寛文2年(1662)の石垣に被害を出した地震なども起こっており、同じ姿の櫓が建ち続けていたとは限らない。しかし、本丸櫓群の形態等の変遷に関し、吉田純一氏が、「金沢城三階御櫓之図」に描かれている櫓について、「仮に寛永期の「三階御櫓」としても慶長期つくられた「三階御櫓」をほぼそのまま踏襲し」と述べている<sup>(2)</sup>に留まり、江戸時代に作製された櫓の図面類を詳細に分析し、相互に比較検討して形態等の変遷を明らかにしようとする試みは十分ではなかった。

そこで本稿では、研究の端緒として本丸櫓群うち史料が比較的豊富に残っている辰巳櫓及び三階櫓について、その図面類を相互に比較することで、その形態等の変遷を明らかにしようとした。なお、これまでの研究等により、この2つの櫓について以下の事柄が知られている。

#### ①辰巳櫓

- ・何枚かの図面類が存在することは判っていたが、建築史の研究者の目に触れたことで、一重目の堂形向きの壁面に唐破風の「出し」と千鳥破風の「出し」が並ぶなど、特異な形態の二重櫓であったことが知られるようになった<sup>(3)</sup>。(写真1)
- ・寛永の大火で焼失した後に再建されたが、宝暦の大火後は再建されなかったとされている。
- ・明治40年の本丸石垣崩壊に伴う改修工事の結果、櫓台の大部分が失われた。

#### ②三階櫓

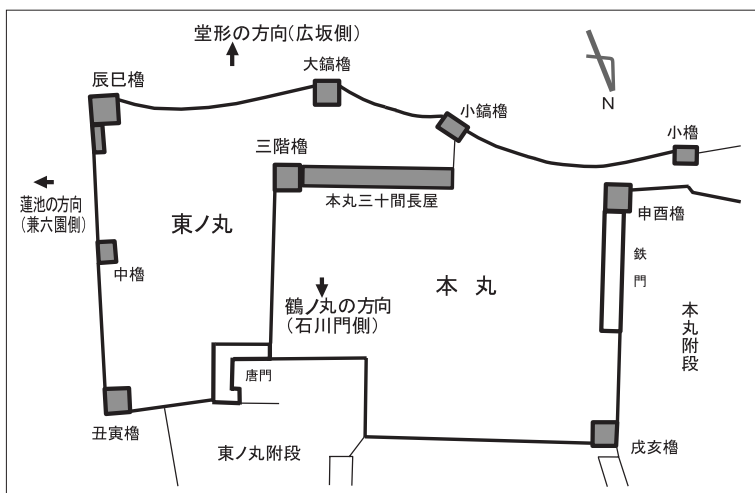


図1 金沢城本丸櫓群の図

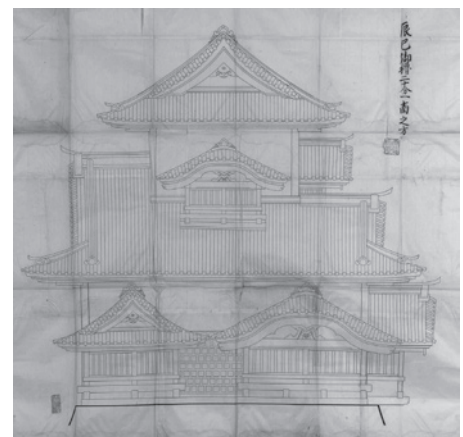


写真1 「辰巳櫓南方之図」  
(堂形向き)

石川県立歴史博物館蔵



- ・金沢城天守が慶長7年（1602）落雷により焼失したため、翌年にその代用として建築されたとされている。
- ・金沢市立玉川図書館蔵の「金沢城三階御櫓之図」（写真2）がよく引用されており、金沢城の三階櫓の姿としてよく知られている。
- ・この図には、櫓の各重の規模、開口部に関する書き込み<sup>(4)</sup>がある。
- ・この図の櫓は、内部構造を示す史料がないものの、内部は5階と推定されている<sup>(4)</sup>。
- ・寛永の大火で焼失した後に再建されたが、宝暦の大火後は再建されなかった。



写真2「金沢城三階御櫓之図」  
（堂形向き）

金沢市立玉川図書館蔵

## 2 図面資料の分類整理

これまで知られている辰巳櫓と三階櫓の図面類のうち代表的な図面を検討し、形態や構造の相違をもとに図面に表現された櫓の分類を試みた。

### 2-1 辰巳櫓の図面分類（表1）

これまで知られている金沢城の図面類のうち、石川県立図書館蔵の『加州金沢御城来因略記（以下『来因略記』）』と、清水文庫（金沢市立玉川図書館）の「辰巳御櫓絵図」、「辰巳御櫓図」、「辰巳御櫓建物図」、石川県立歴史博物館（以下「歴博」）所蔵の「辰巳櫓南方之図」及び松井家<sup>(5)</sup>所蔵の「辰巳御櫓南方之図」について所見を述べる。

（1）『来因略記』には、異なる平面図2種類が記載されているので、便宜上これら2種類の辰巳櫓を、掲載順にA型とB型と呼び、それぞれの特徴を挙げる。なお立面図は、B型だけが掲載される。

#### ① A型の特徴としては、（写真3）

- ・堂形向きでは、一重目の全長にわたって櫓台から突出する。
- ・一重目の堂形と蓮池の各向きにある3つの「出し」<sup>(6)</sup>が複合化している。
- ・一重目は五間<sup>(7)</sup>に四間半、二重目は三間四方であり、二重目の鶴ノ丸側の壁面と一重目の鶴ノ丸側の壁面が揃っている。
- ・入り口は鶴ノ丸側壁面の三階櫓寄りと続長屋<sup>(8)</sup>の妻面の2箇所である。

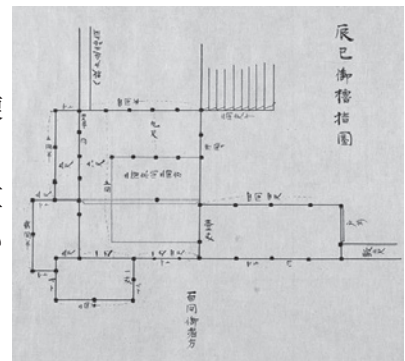


写真3『来因略記』から  
A型平面  
（←堂形の方向）

石川県立図書館蔵

表1 辰巳櫓及び三階櫓 図面類一覧

No.	図面または図集呼称	所蔵者	櫓別	図面種別
1	加州金沢御城来因略記	石川県立図書館	辰巳櫓 三階櫓	立面図（堂形・蓮池の方向き）、平面図（2種） 立面図（堂形・蓮池の方向き）、平面図
2	辰巳御櫓絵図	金沢市立玉川図書館（清水文庫）	辰巳櫓	配置兼平面図、櫓台測量図ほか計4枚
3	辰巳御櫓図	金沢市立玉川図書館（清水文庫）	辰巳櫓	配置兼平面図、検討図（2種）ほか計10枚
4	辰巳御櫓建物図	金沢市立玉川図書館（清水文庫）	辰巳櫓	屋根構造図、唐破風検討図計7枚
5	金沢御城櫓等之図	金沢市立玉川図書館（大友文庫）	辰巳櫓	立面図（堂形・蓮池の方向き）
6	金沢城御城櫓図	金沢市立玉川図書館（大友文庫）	辰巳櫓	立面図（堂形の方向き）
7	富田景周金沢城図（写真）	金沢市立玉川図書館	辰巳櫓	アクソメ様図
8	御城中総櫓並御門絵図	金沢市立玉川図書館	辰巳櫓 三階櫓	立面図（堂形・蓮池の方向き） 立面図（堂形・蓮池の方向き）
9	金沢城建物起絵図（本丸・東之丸）	金沢市立玉川図書館	辰巳櫓 三階櫓	立面図（堂形・蓮池の方向き） 立面図（堂形・蓮池の方向き）
10	辰巳櫓南方之図（歴博）	石川県立歴史博物館	辰巳櫓	立面図（堂形の方向き）縮尺1/20
11	辰巳御櫓南方之図（松井家）	松井家	辰巳櫓	矩計図（堂形の方向き）縮尺1/20
12	金沢城三階御櫓之図	金沢市立玉川図書館	三階櫓	立面図（堂形の方向き）
13	三階御櫓の図（『加賀松雲公』）	（旧侯爵前田家）	三階櫓	立面図（鶴ノ丸の方向き）
14	三階御櫓図（松井家）	松井家	三階櫓	矩計図（平）縮尺1/20
15	三階櫓図（歴博）	石川県立歴史博物館	三階櫓	矩計図（妻）

② B 型の特徴としては、(写真 4)

- ・堂形の向きは、千鳥破風と唐破風の「出し」が分離して並ぶ(間の壁面は白壁)。また、一重目の堂形向きの蓮池側の「出し」と蓮池向きの「出し」は接してはいるが、複合化は見られない。
- ・一重目の堂形向きの大鎬<sup>(9)</sup>側にある千鳥破風の「出し」の大鎬側側面は、大鎬側の檜外壁面と一致せず、段が付いている。
- ・一重目は六間<sup>(10)</sup>に四間半、二重目は三間四方で、二重目は、一重の中央部分に載っている。
- ・一重目の腰壁は海鼠壁になっていない。
- ・一重目の蓮池側に入隅が生じている。
- ・入り口は、鶴ノ丸側壁面の中央寄り<sup>ひら</sup>と続長屋の平面の2箇所である。

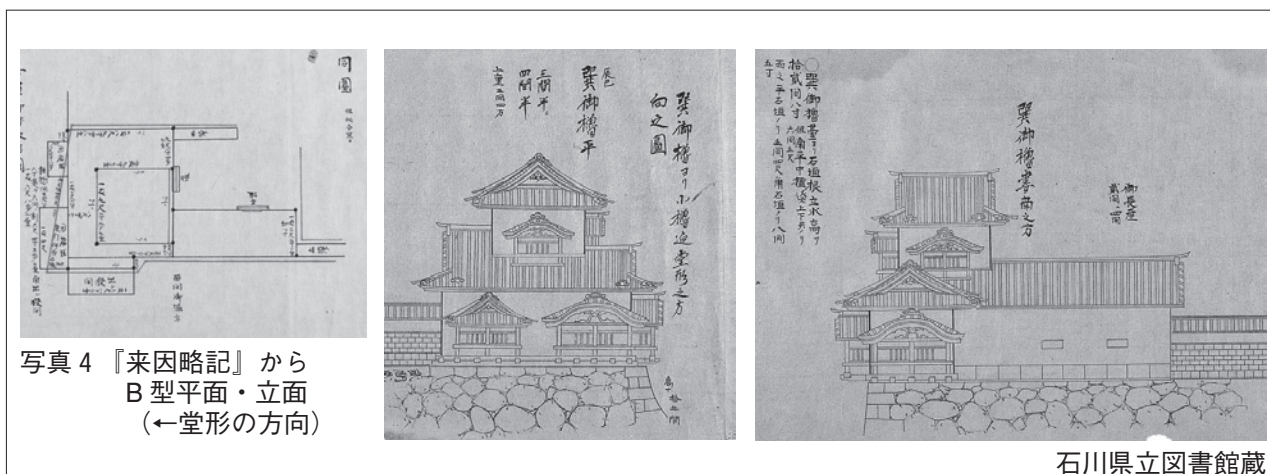


写真 4 『来因略記』から  
B 型平面・立面  
(←堂形方向)

石川県立図書館蔵

(2) 清水文庫の「辰巳御櫓絵図」(写真 5)、「辰巳御櫓図」、「辰巳御櫓建物図」と、「辰巳櫓南方之図(歴博)」(写真 1)及び「辰巳御櫓南方之図(松井家)」は、一連の計画の中で作製されたものと思われる。また、関連して、後述する同文庫の別文書である「異御櫓御入用銀差引書等」も、一連の計画に関係したものであることが、この間の調査で明らかとなった。この時の一連の計画によって、新たに設計されたと思われる辰巳櫓の図から読み取れる特徴としては、

- ・外観は、『来因略記』B 型とよく似てはいるが、一重目の堂形向きの大鎬側にある千鳥破風の「出し」の大鎬側側面と、大鎬側の檜外壁面が揃っている点が異なる<sup>(11)</sup>。
- ・「出し」の複合化が見られないことは B 型と同様であるが、堂形向きの千鳥破風と唐破風の「出し」の間の壁面は海鼠壁になっている<sup>(11)</sup>。
- ・一重目の蓮池側に、B 型よりも顕著な入隅が生じている。
- ・入り口は、鶴丸側壁面の中央寄り<sup>ひら</sup>と続長屋の平面の2箇所である。

以上を整理すると、辰巳櫓の図には次の3つの型が存在していることが分かった。

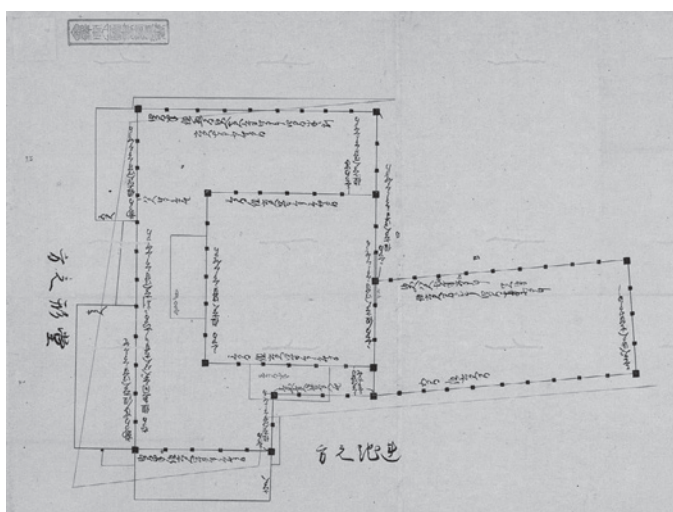


写真 5 「辰巳御櫓絵図」  
(←堂形方向)

金沢市立玉川図書館蔵

I型 『来因略記』A型に属する図

II型 『来因略記』B型に属する図

III型 『来因略記』A型・B型いずれにも属さない清水文庫の図、「辰巳櫓南方之図(歴博)」、  
「辰巳御櫓南方之図(松井家)」

辰巳櫓は、堂形向きに異なる形式の千鳥破風と唐破風の「出し」を並べるので、ほかの櫓には見られない特徴的で特異な意匠が目立つこととなり、辰巳櫓図相互に少なからぬ相違があるにも拘わらず、その相違が見逃されたのではなかったかと考える。

## 2-2 三階櫓の図面分類(表1)

同じく三階櫓についても、これまで知られている「金沢城三階御櫓之図」、『来因略記』、「三階御櫓図(松井家)」、「三階櫓図」に、調査の過程で新たに発見した「三階御櫓の図(『加賀松雲公』<sup>(12)</sup>)」を加えて所見を述べる。

(1)「金沢城三階御櫓之図」は、立面のうち1面(堂形向き)だけが残されたものであるが、図に書き込まれた注釈が豊富であることから、金沢城の三階櫓を研究する上での貴重な情報を提供してきた。このため、金沢城の三階櫓の姿を示した図面としては、最もよく引用されてきたと言える。また、内部構造が明確に分かっていないにも拘わらず、この図が示す開口の状態と、同じ三階櫓であって内部構造が知られている水戸城三階櫓を参考にして、内部は5階と推定されてきた。

この図(写真2)から読み取れる特徴としては、

- ・一重目は五間四方 二重目は三間四方 三重目は二間四方と書かれている。
- ・高さは、一重目の幅の1.65倍程度である。
- ・絵図中の注記では、一重目は「三方に窓二つ宛」<sup>(13)</sup>とされているが、一重目の中段に窓が切り貼りされて2つ加わり、一面につき4箇所となっている。
- ・一重目の櫓台近くに、切り貼りされた開口がある。ただし、この開口に関する注記はない。

(2)『来因略記』には、平面図と2方向(堂形向きと蓮池向き)の立面図が載っている。外観は、「金沢城三階御櫓之図」とほとんど同じであるが、微妙に異なる点があり、注意深く検討した。この図から読み取れる特徴としては、(写真6.1及び6.2)

- ・一重目は五間四方 二重目は二間半四方 三重目は九尺四方と書かれている(九尺は一間半に当たる)。
- ・高さは、一重目の幅の1.65倍程度である。
- ・二重三重が「金沢城三階御櫓之図」よりも一回り小さく、僅かだが縦長に見えるが、実際の高さ方向の長さはほぼ同じである。
- ・一重目の窓は、最初から図の各方に4つずつ描かれている。
- ・堂形向きの立面には、「朱引ノ窓・・・詮議スベシ」の書き込みがあり、堂形向き一重目の櫓台近くに朱引きされた2つの窓(開口)は、古い絵図にはあるが新しき絵図<sup>(14)</sup>にはないとしている。なお蓮池向きの立面図には、この部分の開口はない。

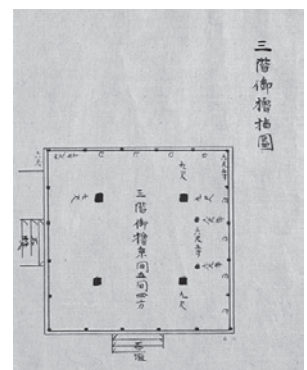


写真6.1(堂形の方向→)  
『来因略記』三階櫓平面図  
石川県立図書館蔵

- ・平面図では、入側に相当する内部の太い4本の柱と外壁の間の空間に、2本の細い独立柱がある特殊な柱配置が確認できる。この2本の細い独立柱は、四方ともに存在するのを省略して2本だけが描かれていると考え、文化の大火(文化5年、1808年)後を描く「金沢城本丸・東之丸の図」<sup>(15)</sup>に記載された、三階櫓台の礎石と思われる12個の四角形が環状

に配列されている状態と一致する。(写真7)

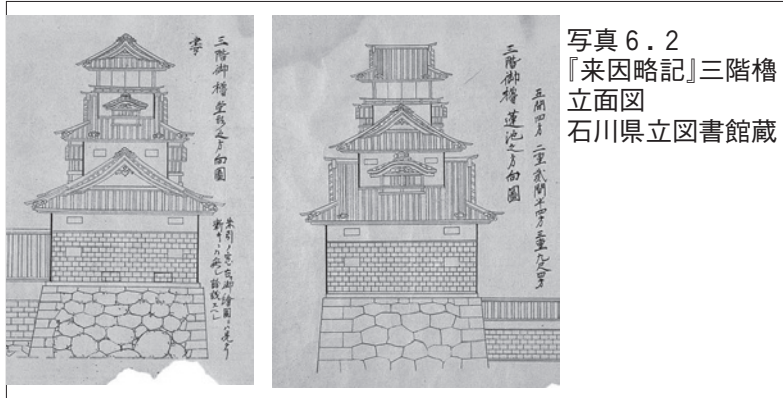
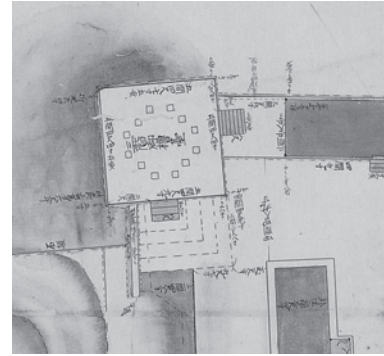


写真6.2  
『来因略記』三階櫓  
立面図  
石川県立図書館蔵



(↑堂形  
の方向)

写真7「金沢城本丸・東之丸の図」  
の三階櫓台部分  
金沢市立玉川図書館蔵

(3)「三階御櫓図(松井家蔵)」は、最上重の屋根の平を正面とする向きで切断した矩計図で、縮尺は1/20で描かれている。この図から読み取れる特徴としては、

- ・柱間数は、一重目は五間、二重目は三間、三重目は二間で描かれる。
- ・高さは、一重目の幅の2倍を超える。
- ・入口が一重目の正面中央に描かれており、次の(4)「三階櫓図」とは方向が90度異なる。入口の形状は、『加賀松雲公』の三階御櫓と酷似した両開きの扉である。また扉の内側には、片引戸がある。
- ・最上階には建具などは描かれていない。
- ・一重目の最下層の開口は確認できず、中間に窓がある。
- ・三重目の床貼りは確認できるが、1階は土間のみなのか床板は記入されず、二重目の床も不明である。
- ・1階の柱配置が、「金沢城本丸・東之丸の図」の礎石配置とは異なっている。

(4)「三階櫓図(歴博)」は、石川県立歴史博物館が所蔵し、最上重の屋根の妻を正面とする向きで切断した矩計図である。残念なことに、図の右側紙面の1/3が失われている。しかし、この図からも多くの特徴的な点を読み取れる。この図から読み取れる特徴としては、(写真8)

- ・柱間数は、一重目は五間、二重目は三間、三重目は二間で描かれる。
- ・高さは、一重目の幅の2倍を超える。
- ・最上階に梅鉢などの意匠が施された扉らしきものが描かれている。
- ・一重目の片側には2段の窓、櫓台近くに開口部も見られる。
- ・母屋の柱(間柱除く)だけが、礎石の上に立っている。
- ・1階は土間なのか床板は見あたらないが、二重目と三重目には床が見られ、三重3階のように描かれている。
- ・1階の柱配置は、「金沢城本丸・東之丸の図」の礎石配置と異なる。

以上の点が確認された。プロポーションや架構から判断して、前述の「三階御櫓図(松井家)」と同一建物に関する図面であると考えられる。

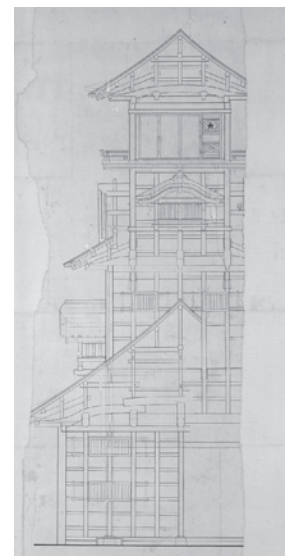


写真8「三階櫓図」  
石川県立歴史博物館蔵

(5)「三階御櫓の図(『加賀松雲公』)」は、近藤磐雄著『加賀松雲公』の中に掲載する、侯爵前田家所蔵とする「金沢城(其二)城壁の一部」の古図写真である。今回新たに確認した立面図(鶴丸向き)であるが、図面の原本そのものの所在は確認されていない。

プロポーシヨン及び外観から判断して、前出の「金沢城三階御櫓之図」で最初に描かれていた櫓と同一の櫓の図ではないかと思われる。この図から読み取れる特徴としては、

- ・注記は「金沢城三階御櫓之図」の書き込みとほぼ同じだが、本図が延宝(1673~81)の頃に作られた、との記述が書き加わっている<sup>(16)</sup>。ただし、延宝の頃に書かれた古い姿の写しなのか、延宝頃の姿なのかは不明である。
- ・1階五間四方 2階三間四方 3階二間四方と注記されている。
- ・高さが、一重目の幅の1.65倍程度である。
- ・この図の向きに入口があるためか、一重目の櫓台近くに入口以外の開口は見られない。
- ・一重目の窓は、屋根近くに2つだけである。

以上の分析結果を整理すると、三階櫓の図も次の3つの型が存在していることが分かった。

I型 「三階御櫓の図(『加賀松雲公』)」

II型 『来因略記』、修正後の「金沢城三階御櫓之図」<sup>(17)</sup>

III型 「三階御櫓図(松井家)」、「三階櫓図(歴博)」

三階櫓の図は互いによく似ているため、これまで相違点について検討されることなく、ほぼ同じ内容の図として扱われ、書き込みと図の間に食い違いがある点なども指摘されてはこなかった。

なお、II型については、堂形向きの櫓台近くに開口がある図と、「御城中総櫓並御門絵図」のように無い図が存在することを確認したが、実際には現状の「金沢城三階御櫓之図」のようにこの部分に開口があった可能性が高いと考えられる。

### 3 各型櫓の建築年代の比定

まずはじめに、金沢城の本丸櫓群の変遷を考える上での前提として、『来因略記』の著者である渡部知重は御大工<sup>(18)</sup>であり、金沢城の姿を後世に伝えようとする著作の目的から推測して、宝暦の大火以降、『来因略記』が記された天保15年(1845)までには、辰巳櫓及び三階櫓は再建されなかったと考える。また天保年間以降になれば、その他の関係史料も多く、これまでに両櫓の再建に関する記録は発見されていないことから、宝暦の大火以降に再建はなかったと考えて良いであろう。

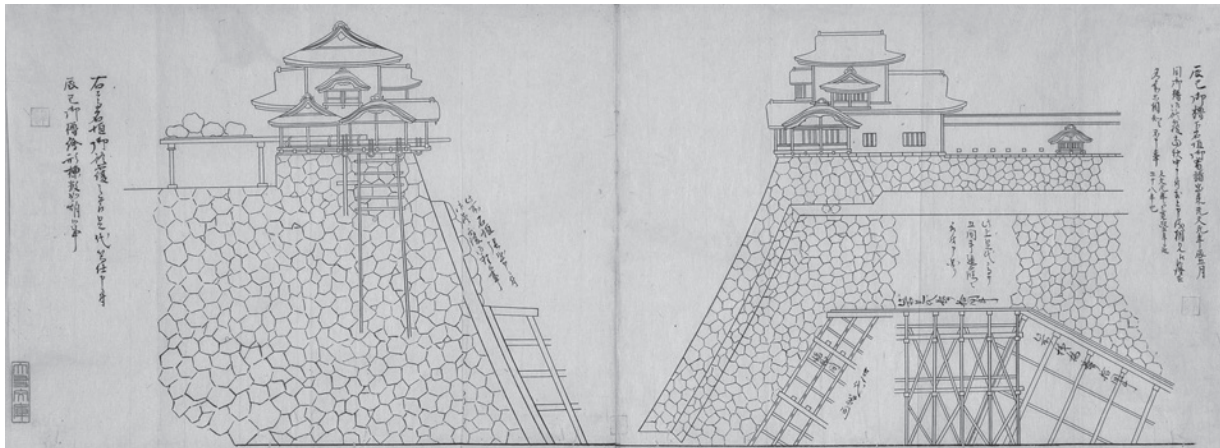
したがって、本丸三十間長屋を除く本丸櫓群に関しては、宝暦の大火までの期間について検討することになる。

#### 3-1 年代推定ための基準となる図面

描写年代を推定のためには、年代の基準となる図面等が必要であり、辰巳櫓、三階櫓それぞれについて、手がかりとなる図面等を示す。

##### (1) 辰巳櫓の基準となる図面

まずあげられるのは『来因略記』に載せる立面図(II型)であり、『来因略記』に書かれた注記などにより、従来からII型の櫓が宝暦の大火で焼けた櫓であると考えられている。



(堂形の向き)

(蓮池の向き)

写真9「金沢御城櫓等之図 辰巳御櫓台石垣御普請仕形足代等之図」

金沢市立玉川図書館蔵

次に、先に表に掲げた6種の辰巳櫓の図面のほかに、享保年間の石垣修復工事の指図である大友文庫（金沢市立玉川図書館蔵）の「金沢御城櫓等之図 辰巳御櫓台石垣御普請仕形足代等之図」（写真9）があり、この図に見られる櫓は、明らかにⅠ型の特徴<sup>(19)</sup>を備えていることから、Ⅰ型の櫓は享保年間以前とできる。

また、後述する清水文庫所蔵の建築図面類に、享保年中（1716～36）に作られた配置兼平面図の写しと思われる図がある。ここに描かれている一重目の平面と、Ⅰ型の櫓の一重目の平面が一致しており、この図からもⅠ型の櫓が享保年間以前のものであることが確認できる。

## （2）三階櫓の基準となる図面

基準図としては、延宝の頃と注記された立面図「三階御櫓の図（『加賀松雲公』）」が、まずあげられる。次に『来因略記』は、「三階御櫓の図（『加賀松雲公』）」や「金沢城三階御櫓之図」および同系統の図面集<sup>(20)</sup>などとほぼ同一の櫓図であり、完全ではないにしろ描かれた後になされた変更の概要が判る程度の書き加えはあるものの、宝暦の大火前の姿を原形としているので、櫓全般について基準を与える図面であると考えられる。したがって、Ⅱ型の櫓は宝暦の大火で焼けた櫓であると考えられる。

また、宝暦の大火以後の城絵図の中には、前出の「金沢城本丸・東之丸の図」（写真7）のように三階櫓台に礎石配置と思われるものを記した絵図が存在し、宝暦の大火で焼失した三階櫓の柱配置が判る。前述したように、その礎石配置と、Ⅱ型の櫓一重目の平面に記された柱配置が一致するので、このことからⅡ型の櫓が宝暦の大火で焼失した三階櫓であると考えられる。

### 3-2 辰巳櫓建築図書類の分析とⅢ型辰巳櫓の建築年代

辰巳櫓については、Ⅰ・Ⅱ型は、すでに述べたように建築年代がほぼ明らかになっているが、Ⅲ型については年代を推測できる手掛かりがこれまでなかった。

また、清水文庫に所蔵されている辰巳櫓建築図面類は、以前より存在は知られてはいたものの、これまで詳しく分析されることがなかった。「辰巳御櫓絵図」・「辰巳御櫓図」・「辰巳御櫓建物図」は、それぞれ複数枚の建築図面から成る3組の図面群と、積算に関する文書「巽御櫓御入用銀差引書等」、櫓台の形状寸法を示した「辰巳御櫓台石垣絵図」などからなっており、加賀藩の作事組織を解明するための史料と言うだけでなく、江戸期の城郭作事の設計過程を知る上で重要な史料である。Ⅲ型辰巳櫓の建築工事の年代決定に関わる情報も含まれていると考えられることから、今回その分析を試みた。

## (1) 図面作製に関する考察

書き込まれた文章から、これらの図面の作製経緯とその役割を考察する。「辰巳御櫓絵図」計4枚の図面のうち1枚は、享保年中に作られた配置兼平面図の写しと思われ、『来因略記』のA型平面と酷似している。残り3枚は、その後の再建のため新たに作製されたもの（写真5）で、亥年5月に作事方へ提出された図面の写しと考えられる。

「辰巳御櫓図」計10枚の図面のうち1枚は、前述の享保の配置兼平面図の写しと全く同じで、残りのうち2枚は、『来因略記』のB型平面と酷似した平面図である。残り7枚は、「辰巳御櫓絵図」の新しく作製された図と合致した図面であり、前年（戌年）11月に作事方へ提出された図面の写しと考えられる。

「辰巳御櫓建物図」は、清水文庫の他の図面と比較すると、書き込みは見られないが、より具体的な図面である。詳細部の検討用か、他の大工への指示に使ったのではないかと思われ、主に屋根や「出し」に関する詳細図である。

すなわち、A型にもB型にも属さない清水文庫の辰巳櫓の図は、「亥年」及びその前年に行われた新たな計画に関する図面の可能性が高い。

同じくⅢ型とした歴博及び松井家蔵の図は、その設計による具体的な工事のために準備した図面ではないか考える。また図の題字の特徴から判断して、この2つの図は同じ出処の図であることも考えられ、一連の計画の中で作製された「辰巳御櫓絵図」の提出後に作製された20分の1図、又はその写しの一部ではないかと推測される。

## (2) 「亥年」の特定

次に、この計画を具体的に知るために、清水文庫の一連の辰巳櫓建築図面等の書き込みに見られる「亥年」がいつのことを指しているのか、その検証を試みる。まず図面の書き込み等を含めて作事に関係した人物として、「阿部様」、「笹田七郎兵衛」、「羽田十郎右衛門」、「五左衛門」の4名が登場する。このうち「阿部様」だけは様付けされていることから、藩の役人（作事奉行等）と考えられ、他の3名については、図面の授受を行っていることから、作事所所属の御大工等と推測された。

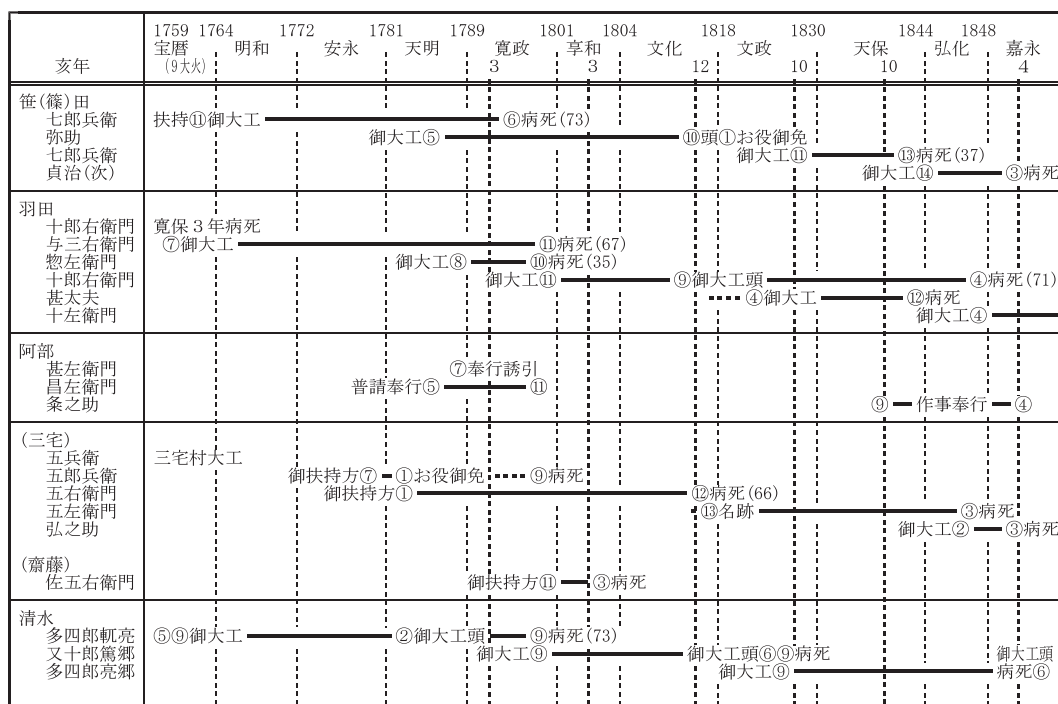


図2 辰巳櫓作事関係者の分析図 丸の中の数字は、履歴に変更が生じた「年」を表わす

また、図面の書き込み等の記述から、「寛政」年間以降に計画されたと考えられるので、寛政年間以降を対象に、これらの人物と同姓の者、類似の名前の者、清水文庫を残した清水家の当主の在任期間や生没年を、加賀藩の作事・普請奉行等に就任した藩士の氏名と在任時期を記した『諸頭系譜』<sup>(21)</sup>、大工頭・御大工等藩に召し抱えられた大工の出生・異動を記した『御大工知行帳』及び『寛政年中より大工名前等覚書』<sup>(22)</sup>から抜き出して、図化した。(図2)

この図から、書き込み等の記述と一番よく合致する亥の年を抽出すると、天保10年(1839)の「亥年」であると考えられ、記載人物と実在人物に全く矛盾がなく説明できるとの結論に達した。また天保10年以外の亥年では、なんらかの不整合が生じることが判った。

ところが、このことは、辰巳櫓が宝暦の大火以降に再建されなかったとする、従来の理解と矛盾する。前述のとおり、『来因略記』著者及び著作の性格から考えて、もし天保10年頃に再建工事が実際に着手されていたとすれば、御大工である著者の渡辺知重が、何の記述もしなかったとは考えられない。そこで当時の藩内事情を考察した。

城内作事の事情を考察すると、文政7年(1824)に主人を失って空き家となっていた旧竹沢御殿を解体した後の古材の再利用について、天保元年(1830)には藩内で議論された形跡<sup>(23)</sup>があり、また御殿の解体が進んでいた様子が天保10年頃の絵図等<sup>(24)</sup>で確認されている。このことから、天保年間は、再利用可能な大量の解体材<sup>(25)</sup>のストックが存在していた可能性が高い時期であり、このストックを利用して、櫓再建工事を行おうとする動きがあったとしてもおかしくはない。

一方で、天保年間には加賀藩でも凶作が続く飢饉が起こっており、天保8年(1837)には初めて「半知」<sup>(26)</sup>が行われている。さらに、翌9年には財政が好転するどころか、炎上した江戸城の西の丸の普請が加賀藩にも命じられ、巨額の費用が必要となった。したがって、天保中頃から後半にかけての時期は、加賀藩の財政事情からすると困窮していた時期であり、とても櫓再建工事などに着手できるような状況ではなかったと言える。

以上のような状況を総合すると、天保の櫓再建計画<sup>(27)</sup>は、天保10年以降の藩財政の好転を想定して、作事方主導で計画が立案・推進され、設計はほぼ完了していたが、最終的には、財政的な理由から工事は全くあるいはほとんど着手される<sup>(28)</sup>ことなく終わったのではないかと考える。なお、「異御櫓御入用銀差引書等」の詳細な紹介と検討は、次号に譲りたい。

### 3-3 三階櫓の年代推定

平成17年度に実施された本丸の埋蔵文化財確認調査<sup>(29)</sup>の結果、三階櫓台が17世紀後半頃(寛文～元禄期)に改修されたらしいことが窺われ、延宝年間を含む17世紀後半頃に三階櫓も改修されたのではないかと予想された。

そこで、この確認調査の結果を考慮して、あらためて三階櫓のⅠ型とⅡ型を比較すると、差異はあるものの、その相違<sup>(30)</sup>は小さく、全く新たに建て替えたと考えたよりもむしろ、17世紀後半に行われた石垣改修に伴って、Ⅰ型に手を加えた結果Ⅱ型となった、と解釈した方が良いのではないかと思われる。さらにⅠ型三階櫓は、延宝年間以前のものと考えられるとしても、寛永の大火以前の三階櫓であるとは断定できず、むしろ寛永の大火後に再建された三階櫓であるとするならば、「三階御櫓の図(『加賀松雲公』)」の「延宝の頃」との注釈とも一致する。

またⅢ型三階櫓については、Ⅰ型より古い三階櫓であるとの解釈を直接否定する史料は今のところ無いが、Ⅰ型より古いと考えると疑義が生じる。例えば、「三階御櫓之図」等の描写を信用すれば<sup>(31)</sup>、Ⅰ型よりもⅢ型の三階櫓の方が5～6mも高いのである。天守を失って三階櫓に建て替えた時、天守の代用としての役割を考えると、失われた天守よりも櫓の高さを低くしたと思われるが、その後Ⅲ型三階櫓からⅠ型に建て替えて、城の象徴である櫓の高さをさらに低く改める必要はなかったのではな



表2 三重天守および三階櫓（吉田純一氏作成 『金沢城研究』創刊号（2003）より転載）

天守・櫓名	所在地	建築年代	型式	建築形式、外観などの特徴	平面規模			高さ	位置	備考
					一階	二階	三階			
高崎城三階櫓	高崎市	慶長3年(1598)	望楼型	3重3階	7間×5間	5間×4間	3.5間×2間			「お櫓」とも呼ばれる
高島城天守	諏訪市	文禄～慶長3年	望楼型	3重3階、柿葺	7間×7間	5間×5間	3.5間×3.5間	約59尺	本丸北西隅	2層の小天守と連立、明治8年取り壊し
金沢城三階御櫓	金沢市	慶長8年(1603)	望楼型	3重3階、1重目に海鼠壁	5間×5間	3間×3間	2間×2間	約51尺(8.5間)	本丸南東隅	宝暦9年(1759)焼失
彦根城天守	彦根市	慶長11年(1606)	望楼型	3重3階	11間×7間	7間×5間	6間×4間	約51尺	本丸	
高槻城天守	高槻市	元和3年(1617)	層塔型	3重3階						明治7年?
佐倉城天守	佐倉市	元和年間	層塔型	3重3階	7間×8間	6間×7間	5間×4間	約64尺		文化10年焼失
白河城三重御櫓	白河市	寛永9年(1632)	層塔型	3重3階、下見板張	170㎡	73㎡	16㎡	約46尺	本丸北東隅	慶応4年(1868)戊辰戦争で焼失 絵図に「土台上ヨリ鬼板上迄四丈四尺五寸とあり
古河城御三階櫓	古河市	寛永11年(1634)	層塔型	3重4階	8間×7間	7間×6間	5間×4間	約66尺		明治7年取り壊し 絵図あり
小浜城天守	小浜市	寛永12～13年	層塔型	3重3階、下見板張り	7間×8間	5間×6間	3間×4間	約61尺		明治7年解体
白石城大守	白石市	正保3年(1646)	層塔型	総塗籠	9間×6間			約52尺		本丸西北隅櫓を二層から三層に改修、三層大櫓文政2年全焼、文政6年復旧、明治5年払い下げ、大櫓とある
延岡城三階櫓	延岡市	承応2～明暦元	層塔型	3重3階	6間×5間	5間×4間	4間×3間	約42尺	本丸下の腰曲輪	天和2年(1682)焼失
丸亀城天守	丸亀市	万治3年(1660)	層塔型	3重3階	6間×5間					櫓と記す
宇和島城天守	宇和島市	寛文5年(1665)	層塔型	3重3階	7間×7間	5間×5間	4間×4間	約52尺	本丸東南中ほど	
新発田城御三階櫓	新発田市	寛文8年焼失後	層塔型	3重3階、海鼠壁					本丸西隅	最上層入母屋をT字型
関宿城御三階櫓	千葉県関宿町*	寛文11年(1671)	層塔型	3重3階				約60尺	本丸北西隅	江戸城富士見櫓を模して再建、明治5年払い下げ
盛岡城三階櫓	盛岡市	延宝4年(1676)	層塔型	3重3階	5間四方				本丸東南隅	明治7年取り壊し
水戸城「御三階櫓」	水戸市	明和4年(1767)	層塔型	3重3階、1重目に海鼠壁	6.5間四方	4間四方	3間四方	約74尺	二の丸中央	昭和20年空襲で焼失 絵図あり
岡城天守	竹田市	明和6年(1769)	層塔型	3重3階	9間×8間	6間×5間	4間×3間	約47尺	本丸南西隅	
弘前城天守	弘前市	文化7年(1810)	層塔型	3重3階	6間×5間	5間×4間	4間×3間			本丸辰巳櫓を改修、五層天守は寛永16年落雷焼失
福山城「三重御櫓」	北海道松前町	嘉永2年(1849)	層塔型	3重3階、銅板葺	45×39尺	36×30尺	27×21尺	約55尺	本丸東南隅	昭和24年焼失

筆者注\*合併により現在は、野田市

いかと思われる。

次に、江戸前期の三階櫓等との高さの比較を試みると（表2）、一重目の平面規模が8間×7間の「古河城御三階櫓」で高さ約20mになるのを最高に、18mを超える他の三階櫓等の一重目の平面規模は、五間四方の金沢城の三階櫓よりも1回り以上大きく、しかも形式の異なる層塔型ばかりであることが判る。ところがⅢ型の図面から読み取った金沢城の三階櫓の石垣天端からの高さは、四層天守のそれに匹敵して20mを超え、これより高い三階櫓等は、江戸中期に建築された水戸城の三階櫓だけである。こうしたことから、江戸初期と言う早い時期に、一重目の平面規模が「古河城御三階櫓」よりも小さいにも拘わらず、望楼型の金沢城三階櫓が、それ以上に高く築いたとは考えにくい。

これらの高さの観点から検討した結果からは、Ⅲ型三階櫓がⅠ型より古い三階櫓であるとは考え難いと判断される。

一方、本丸櫓群ではないが、二ノ丸菱櫓の高さに着目すると、『来因略記』から割り出した宝暦の大火以前の同櫓の高さに比べて、文化の大火後に再建された同櫓の高さは高くなっている。文化大火後の再建菱櫓は、平成13年に史実に基き復元されたが、現在の復元菱櫓の石垣天端からの高さは約17mであり、Ⅰ・Ⅱ型の三階櫓のそれよりも高いのである<sup>(32)</sup>。三階櫓は天守に代わってその城を象徴する櫓であるから、もし文化の大火以後に三階櫓の再建を考えたとすれば、その高さは当時の菱櫓の高さ17mを超える高さとしたはずである。こうしたことから、Ⅲ型の高さが望楼型としては20mを超えて高いのは、宝暦の大火以後に設計されたからではないかと推測する。

加えて「三階御櫓図（松井家）」は、Ⅲ型辰巳櫓の図面の書き方と酷似した手法・形式であることから、辰巳櫓と同様、宝暦の大火後（特に文化の大火後）に三階櫓再建のために用意された図面の1つであり、Ⅲ型辰巳櫓図と同じ時期に、同じ保管者から松井家にもたらされたものと考えるのが合理的ではないかと判断される。

以上のように、櫓の高さの面からの検討結果と、Ⅲ型辰巳櫓の図面と酷似する点が見られることから、Ⅲ型三階櫓は、Ⅰ型を遡る三階櫓の図面とは考えられず、Ⅲ型辰巳櫓と同様に、宝暦の大火以後の工事未着手の計画図である可能性が高いと考える。また、高さを別にすれば、3つの型の三階櫓に

外観的相違が少ないことから類推して、吉田純一氏が指摘したように、寛永の大火以前からⅠ型に近い意匠の三階櫓が建っていたことも考えられる。

#### 4 辰巳櫓及び三階櫓の変遷

金沢城本丸櫓群のうち、辰巳櫓及び三階櫓の各図面類に描かれた姿を相互に比較し、相違を明らかにしてきた。同時に、清水文庫の一連の辰巳櫓建築図面等は天保9～10年頃に計画された、辰巳櫓再建のために作製された建築図面・文書、又はその写しであることを指摘した。また図面類の書き込み等を解読することによって、それぞれの櫓の変遷を次のように考えることができた。

- ・辰巳櫓については、享保以前にⅠ型が建築され、次いで宝暦以前にⅡ型へと姿を変え、宝暦の大火で焼失、Ⅲ型は天保年間に建築が計画されたが、ほとんど工事が行われることなく終わった櫓図であることが判った。
- ・三階櫓については、延宝以前にⅠ型が建築され、次いで宝暦以前にⅡ型へと姿を変え、宝暦の大火で焼失したものであり、Ⅲ型は宝暦の大火以降に計画図として作成された櫓図である可能性が高いことも指摘できた。
- ・これまで判明している三階櫓の中で最も古い姿であると思われるⅠ型は、延宝年間以前のものであると考えられるとしても、寛永の大火以前の三階櫓であるとは断定できず、むしろ寛永の大火後に再建された三階櫓である可能性が高い。

今後、三階櫓のⅠ型とⅡ型における開口の状態などによる外観の相違点や、Ⅰ型とⅡ型の建築年代をより明確にするために、『加賀松雲公』に一部が写真掲載されている金沢城の立面図集の原本を探し、その詳細調査を行うことが必要であると考えている。

また、「三階御櫓図（松井家）」や「三階櫓図（歴博）」は、計画だけで終わった櫓の図面である可能性は高いが、以前の櫓の設計を参考としたと考えられる節が窺われる一方、金沢城三階櫓の内部がこれまで推定されていたような5階ではなかったことも示唆しており、両図についても詳細に分析する必要がある。

#### 注

- (1) 金沢城の「本丸」に相当する曲輪には、このほか本丸附段と東ノ丸附段も含まれると考えられるが、本研究では、三階櫓及び本丸隅櫓が建設された本丸・東ノ丸に限定し、この2曲輪に存在した櫓について論じる。なお、櫓の名称及び表記については史料により相違があるので、最も一般的と思われるものに依った。
- (2) 「金沢城の「三階御櫓」」(本誌創刊号)。吉田純一氏(福井工業大学教授)のこの論文は、三階櫓の形態等の変遷を明らかにすることを目的とした論文ではないが、変遷に言及している。このほか、田中徳英氏(「金沢城の門・櫓・長屋について」(『石川郷土史学会々誌』第38号 2005)ほか)等が金沢城の櫓の形態的特徴などをあげているが、本丸櫓群については具体的な形態等の変遷まで明らかにした研究はない。
- (3) 石川県の地元情報誌である『月刊北國アクタス』(2001年5月号 北國新聞社)に、松井家蔵の「辰巳御櫓南方之図」が初めて掲載され、中村利則氏(京都造形芸術大学教授)により検討された。
- (4) 書き込みの内容や内部5階の推測については、吉田純一氏によって前掲の「金沢城の「三階御櫓」」で説明されている。
- (5) 松井家は、2代藩主利長から越中井波(現、富山県南砺市)に拝領地をいただいた大工の家柄で、以来現在まで建設業に携わっている。
- (6) 「出し」とは、一般には「石落とし」の「出窓」型に分類され、城壁や櫓の壁から飛び出した部分から下方向にものを落としたり、横方向に鉄砲等を打ち出すために設けられた攻撃用の装置を指す。金沢城ではこれを

「出し」と呼んでおり、屋根の形状の違いにより「唐破風の出し」と「千鳥破風の出し」と呼ばれている。

- (7) 『来因略記』ではこの寸法は直接表記されていない。図にある柱間の数からは四間または四間半になるが、図を実際に採寸した概数からここでは五間とした。
- (8) 金沢城では細長い平面形状の櫓を「長屋」と呼び、櫓と接続する比較的規模の小さなものを特に「続長屋」と呼ぶ。逆に比較的規模の大きな長屋や櫓門に接続する櫓を「続櫓」と呼ぶことがある。本研究では、辰巳櫓とその続長屋は一体的に「辰巳櫓」として取り扱う。
- (9) 大鑄、小鑄は、金沢城本丸のいもり堀側(堂形の方)、水平方向に曲線を描くラインを持った高石垣の呼称で、兼六園側から大鑄、小鑄となっている。延長の長い高石垣の場合、水平方向への孕みだしの危険度が高いが、水平方向に内側に湾曲する弧状の曲線を描く形状にすることにより、高石垣を安定させ、水平方向への孕み出しを防止したと考えられる。しかし、北垣聰一郎氏(『石垣普請』法政大学出版局 1987)によれば、金沢に伝わる江戸時代の穴太の技術書には、直線状の部分の中間に設けられた鈍角の隅のことを「シノギ角」と呼び、隅を設けて弧状の2曲線をつないだラインにすることは「輪取り」と呼んだとされている。大・小鑄は、江戸時代の絵図によっても、石垣のラインは曲線を描いており本来ならば「輪取り」となるはずだが、2曲線を直に継がず、継ぎ目となる隅部だけを直線化して出隅状にしているため、「鑄」と呼んだのかもしれない。
- (10) 六間は平面図からの寸法である。絵図の注釈には「三間半」と書かれているが、これまで知られているあらゆる図に実寸で三間半の辰巳櫓は見られず、他の隅櫓も五間四方程度であることから、『来因略記』の立面にある書き込みは誤記であろうと判断する。なお、木越隆三氏(『金沢城の地割図と二の丸御殿絵図』本誌第3号)によれば、1659~76年の景観と比定された安土城考古博物館蔵の「金沢城内絵図」などにも辰巳櫓(本研究でのI型の時期に当たる)の一重目の寸法として、「三間半・四間半」と表記するものが見られる。すなわち描写時期の違いはあるが、『来因略記』B型の「三間半」表記は、これらの絵図の誤記となんらかの関連があるのではないかと筆者は推測している。

ちなみに、二重目及び続長屋の寸法は『来因略記』A型とB型ともにほぼ同じ大きさであり、当該絵図に記載されている寸法とも一致しているため、「三間半」の誤記がB型と共通しているとの一点だけで、「金沢城内絵図」と同じくB型が享保以前の辰巳櫓であるとは現時点では断定するのは危険であり、より詳細な検討が必要と考えている。

- (11) これらのB型との相違点を、極些細なこととも受け取ることもできるが、一連の図の中では描き分けが見られるので、設計者が意識的に違えていると判断した。
- (12) 『加賀松雲公』は、前田家(16代利為)が明治42年に近藤磐雄に編集させて発行した書籍で、「松雲公」とは、第5代藩主前田綱紀のことを指し、綱紀の事蹟を編纂したものである。
- (13) 「三方に窓2つ宛」は、実際には「四方」と初めに書いたものの脇に「三」と書き加えている。ともあれ三方とは、四方の内、一方は本丸三十間長屋に接続しており、窓がなかったと考えられるので、それ以外の三方に窓が2箇所ずつあると表現されているものと思われる。

然るに、櫓台近くの開口を除いても、本図には一重目に窓が4箇所ある。「四方」の修正が現在の状態に修正されたのと同じにされたものであれば、「窓2つ」も同時に書き直したはずであり、本図の元々の状態は「窓2つ」であったと考えられる。なお、一重目の中段にある切り貼りされた窓と、屋根近くの窓の開口高さが本図では同じ位なのに対して、『来因略記』では開口高さに明らかな差が見られる。中段の窓は海鼠壁の中にあり、目地の割付の関係で自由に高さを変えられないことや、「三階御櫓の図(『加賀松雲公』)」には屋根近くの2つの窓しかないことから、屋根近くの窓が元々描かれていた窓で、中段の2つの窓が後から描き加えられたのではないかと推測している。

- (14) 注釈は、「朱引ノ窓 古キ御絵図ニハ見タリ 新キニハ無シ 詮議スベシ」と書かれている。しかし、『来因略記』には古い絵図に関する記述はなく、どんな絵図を指して「見タリ」としているのかは不明である。「新

シキ」とは、その絵図との対比で同じ宝暦の大火直前の三階櫓の姿を描いた「新しい絵図」のことを指していると考えられる。「詮議スベシ」とは、当該窓の有無は検討を要するということと思われる。

注(20)で言う同系統の図の1つであり、『来因略記』の櫓と同じような姿、すなわち同時期の櫓を描いた、規模等について同じ注釈が付けられている(但し、朱引き部分はない)、金沢市立玉川図書館蔵の「御城中総櫓並御門絵図」では、堂形・蓮池向きのこの部分に開口はないのに対して、同じく同系統の図の1つで同時期の姿を描く、金沢市立玉川図書館蔵の「金沢城建物起絵図」(乙号)には堂形向きのみこの開口が存在していることが確認できた。両絵図そのものを指したものではないかもしれないが、宝暦の大火直前の櫓を描いた絵図の該当部分に開口が無い絵図と有る絵図が存在することが確認された。

(15) 金沢市立玉川図書館蔵の加越能文庫の金沢城絵図。「金沢城本丸・東之丸の図」の描写年代に関しては、前掲の木越隆三氏「金沢城の地割図と二の丸御殿絵図」3章の注(9)を参考にされたい。

(16) これらの注記は、『加賀松雲公』の著者が付したものである。元の絵図にどのような書き込みがあるのか、あるいはないのかを確認する必要がある。なお写真撮影されている元の絵図は、注(20)で言う『来因略記』と同じ系統に属す図面集であり、注記のとおり延宝の頃の描写とすれば、注(20)で述べる「同系統の図面集」のなかの現在残っている絵図でも、最も古いものである可能性もあると考えている。

(17) 江戸期には、古い絵図・図面を新しい姿に修正する際に、貼り紙が使われることがよく見られる。本図では、切り貼りされている箇所が、開口部に絡む箇所に限られており、後世の本図の補修過程で、貼り紙であったものを、のち切り貼りしたとも考えられる。当初の状態のまま、1枚ものになっていたとすれば、また注(13)で考察した注記の修正の仕方から推測して、「金沢城三階御櫓之図」が『来因略記』や「金沢城建物起絵図」とは別に、独自に修正された可能性が高く、宝暦の大火で焼失した三階櫓の堂形向きの一重目には、6箇所の開口(のように見える部分を含めて)があったと考えられる。

なお、本図では描かれていない入口についても注記では詳しく言及しており、窓、「出し」等の開口部については全部と言える位に記述しているのに対して、櫓台近くの開口には全く言及していないことから、I型の櫓の堂形向きには、櫓台近くの2つの開口部はなかったのではないかと推測される。しかし「金沢城三階御櫓之図」の元々の姿がI型より古かった可能性も残っており、今後検討したい。

(18) 渡部知重は、文久4年(1864)に御大工頭に昇進している。詳しくは、本誌第2号の木越隆三氏「金沢城全城絵図の分類と編年—金沢城絵図調査報告I—」2章を参考にされたい。

(19) 金沢市立玉川図書館が所蔵するほかの資料のうち、彩色された「金沢御城櫓図」(石川県立図書館富田文庫蔵)の立面図に見えるアクソメ様の図もI型の特徴を持っている。なお、「御城中総櫓並御門絵図」と「金沢城建物起絵図」の立面図はII型である。

(20) 「同系統の図面集」とは、金沢城の建築物のうち城郭建築物について、その立面図等を網羅的に収録している種々の図面集のことで、起絵図に加工されているものを含めて考えている。『来因略記』や前出の「御城中総櫓並御門絵図」(金沢市立玉川図書館蔵)、「金沢城建物起絵図」(同館蔵)などはその代表的なもので、金沢城に関しては、この形式の図面・絵図が非常に豊富に残されている。しかし、これらの多くが基本的には同じ原図から派生したものと考えており、各図面集等を全く別個のものとして統計処理することは危険であるので、本研究では個別に比較する必要がない限り、「同系統の図面集」として一括して考えている。

(21) 『諸頭系譜』は、金沢市立玉川図書館蔵

(22) 『御大工知行帳』、『寛政年中より大工名前等覚書』は、清水文庫(金沢市立玉川図書館)所蔵

(23) 議論された形跡は、「御親翰帳之内」(『加賀藩史料』14収録)に記述されている。

(24) この天保10年頃の絵図として「竹沢并蓮池御庭御圍之図」(金沢市立玉川図書館蔵)がある。なお、この頃の兼六園については本誌掲載の長山論文「兼六園とはどこのことか」が詳しい。

(25) 現在成巽閣の辰巳長屋は、竹沢御殿の長屋門である七十間長屋のおよそ1/4を移築したものである。竹沢御殿には、この広大な長屋や多数の土蔵が建てられており、櫓の構造材に転用できそうな解体材も十分にあっ

たとえられる。

- (26) 天保8年から14年かけて、藩財源の確保と藩士・領民の生活安定を目的とした加賀藩版の天保の改革が実施された。「半知」はそれらの改革的政策の1つで、藩財源の不足を補うために、藩士の知行の半分を強制的に借り上げる制度である。当初は、凶作の翌年1年だけの予定であったが、江戸城の普請に対応するため3年間(天保8～10年)実施された(長山直治「奥村栄実と天保改革」(『ふるさと石川歴史館』北国新聞社 2002))。
- (27) 『来因略記』の巻末に近い部分に、前出の三階櫓、辰巳櫓の平面のほか、河北門の「ニラミ櫓」にも2種類の平面があり、その後に二重櫓(本丸の中間櫓か?)と土橋門の詳細な断面と平面が続いている。このうち土橋門だけが、『来因略記』の書かれる以前の文化2年に再建されている。本研究で再建が問題となった2櫓に続いて「ニラミ櫓」の個別平面図が記載されていることから、「ニラミ櫓」にもこの頃再建計画があったかもしれないと推測している。
- (28) 「巽御櫓御入用銀差引書等」の検討から、一部の材料は加工等まで行われていたのではないかとの指摘を、中村利則氏、河田克博氏(名古屋工業大学教授)や木越隆三氏から受けた。
- (29) 平成17年8月に記者発表を行った、金沢城研究調査室による平成17年度金沢城跡埋蔵文化財確認調査の成果の1つで、三階櫓の櫓台南面を確認し、改修跡を発見した。また、現在の地表面よりも当時の地表面が2.5m以上も低かったことも同時に確認されている。
- (30) 各図の注記からは、Ⅰ型とⅡ型の二重、三重の平面規模に差があったように受け取れる。三階櫓は望楼型の櫓であるため、改修に際して傷みの少ない下の一重を補修程度に止め、望楼部分である上二重を全面的に作り直した可能性なども考えられるが、Ⅰ型とⅡ型を寛永の大火前後の姿に比定する余地も残している。
- 一方、「一間半」ではなく「九尺」と具体的に尺単位で表記しているので、『来因略記』の方は実寸を示しているとしか考えられず、また、注(10)で木越隆三氏が言及し、本研究のⅠ型三階櫓の時期と判断している2枚の絵図では、三階櫓の二重目について「二間半四方」と表記していることから、Ⅰ型の二重目と三重目の柱の間数がそれぞれ三間、二間であり、二間半、九尺は各々の実寸であると判断でき、表現を変えただけで全く同寸の櫓のことを示していると考えられ、Ⅰ型とⅡ型の規模的な差はなかったと考えることができる。しかし、注(10)で推論しているように、これらの絵図の表記が時期の異なる『来因略記』の立面の書き込みに影響を与えた節も窺われることから、ほかの史料による検証が必要である。
- (31) 「三階御櫓之図」等の描写を信用すれば、「三階御櫓之図」によるⅠ型の高さは、吉田純一氏が前掲の「金沢城の「三階御櫓」」等で、15.3mほどであると推測している。しかし、この推測値は本図が縮尺の正しい建築立面図であることが前提となっており、本図が『来因略記』等の系統に属する図であるとすれば、縮尺に関する検証が必要ではないかと筆者は考えている。
- (32) 菱櫓の約17mと言う高さは、現存している彦根城や宇和島城の三重天守と比べても高く、吉田純一氏が推測した金沢城三階櫓の15.3mをも上回る。また、金沢城と同様に二ノ丸に城の中心を移した水戸城などのように、二ノ丸に天守代用の三階櫓を建設している例が見られる。こうしたことから、文化の大火後の菱櫓建設当時、本丸に三階櫓が存在しなかったからこそ、その代替として、菱櫓の高さを17mと高くしたのではなかと考える。

[謝辞] 本稿をまとめるにあたり、中村利則氏、吉田純一氏、河田克博氏、木越隆三氏の各氏から貴重なご教示を賜り、厚くお礼申し上げます。

ラ一、七貫八百目  
滑川御蔵相建申御入用、焼失ニ付相建申

天保八年

ロ一、百三拾目七分九厘  
金谷御屋敷御修覆

ノ一、拾壹貫八匁七分四厘  
竹之御間建修理

竹之御間建修理

天保九年

ロ一、拾四貫九百五拾八匁五分三厘  
金谷御殿品々出来

ツ一、貳貫五百三拾目八分貳厘  
蓮池御用所并御輿置所相建

ツ二、七百壹匁貳分四厘  
同所御門外御鎖口番等詰所出来

ロ一、七拾壹匁貳分九厘  
真龍院様向山へ御出ニ付御橋等

ロ一、貳百四十四匁三分  
金谷御殿塵芥箱等出来

ソ一、<sup>帳ナシ</sup>貳拾壹貫六百九拾七匁三分四厘  
越中境御関所建修理

ナ一、貳貫八百四拾目  
滑川御高札場等類焼ニ付建直し御入用

ナ一、壹貫目  
●同所御蔵番人御貸家右同断

ラ一、貳拾九貫九百目  
●同所御蔵類焼ニ付建直し三筋 ○

ム一、四百五拾五匁五分九厘  
●小杉御高札場類焼ニ付建直し

ナ一、五貫八百三拾五匁三分七厘  
○能州飯田村御蔵建直し ○

ラ一、九百四拾八匁壹分九厘  
真龍院様御道筋御修覆

ヤ一、拾貳貫七百三拾六匁  
如来寺兩院再建

〔貼紙〕  
「文政十一年」

ロ一、壹貫九百拾四匁

金谷御広式屋ね御修葺

文政十二年

ウ一、貳貫四百九拾四匁六分七厘

① 竹沢御屋敷雪下シ御入用

ウ一、六貫六百九拾貳匁壹分八厘

伏木御土藏所替御入用

ウ一、三拾七匁六分七厘

鶴林寺雪下シ

ウ一、三拾九匁五分六厘

竹沢御鎮守雪下シ

ウ一、九貫貳百九拾七匁七分三厘

御城中雪下シ

ウ一、貳拾七匁六分五厘

外作事方雪下シ

ウ一、四貫六百八拾六匁七分三厘

寺社方所々雪下シ

天保元年

ワ一、四貫四百八拾六匁貳分壹厘

福浦并狼煙御武具土藏新出来

ナ一、貳拾四貫貳百拾七匁五分三厘

竹沢御建物御取置御入用

天保二年

ツ一、貳貫百拾壹匁七分三厘

公事場窄屋狭間等御修葺

ナ一、拾五貫百八拾九匁八分五厘

魚津三浦又藏御貸屋焼失ニ付出来御入用

ナ一、壹貫三百三拾五匁五分

同所御高札場焼失ニ付出来

〔1-2〕 (24×64.5cm、二枚貼紙)

天保三年

ワ一、三貫五百九十貳匁九分三厘

奥納戸御土藏建修里

レ一、七拾壹貫四百六拾壹匁七分四厘黒津舟御再建并仮小屋御入用ヤシキ

ノ一、六貫四百四十三匁四分六厘 御居間書院建修理

天保四年

ロ一、四百壹匁三分九厘

金谷御居宅御修葺

ロ一、三貫七百八拾三匁三分貳厘

同所仮雪垣新出来

チ一、拾五貫五百五拾目

センキ 土清水搗藏火事損建修里

子一、四貫三百五拾目

越中大岩日石寺仁王門相立

天保五年

ロ一、八百貳匁七分八厘

金谷御屋敷御修葺

ソ一、八貫六百七匁

細工所役所建直シ

ラ一、貳貫百三拾五匁壹分九厘

能州輪嶋御塩藏所カへ相建御入用

ラ一、拾五貫六百貳匁三分貳厘

越中滑川西御藏類失ニ付四間二二

十間壹筋相建

天保六年

ロ一、三百四拾貳匁六分貳厘

● 金谷御屋敷所々雪下シ

ウ一、三貫六百四拾三匁八分貳厘

● 御城中所々雪下シ

ロ一、百貳拾貳匁三厘

金谷御屋敷御修葺

ウ一、九百五拾九匁六分五厘

竹沢御屋敷所々雪下シ

天保七年

ワ一、貳貫三百目

高岡瑞龍寺宝藏建替

〔1-5〕 (24×65cm、二枚貼紙)

ノ一、七貫七百七十四匁五分

御帰城前御次内御修葺

但シ折上之間ヲ敷台後廊下御見物所後廊下等

四十七貫貳百三十七匁五分壹厘 滑川御藏壹筋  
五十三貫七十匁八分八厘

ム一、貳拾三貫五百七拾貳匁八分八厘 遠所御藏建直シ所替等  
七貫九百七拾目五分六厘

(2) 作事関係の建物修築経費の年次別書上(文化11(天保9年))

[1-6] (16×6 匁)

ル一、貳拾五貫目 石川御櫓 □ □ 建直シ

一、拾四貫四拾目 如来寺 □ □

(下欠)

[1-6] (26×6 匁)

ワ一、セシキ六貫五百三拾六匁貳分 御普請会所土藏新出来

文化十二年

[1-9] (24×62 匁、二枚貼継)

文政元年

文政二年

ヨ一、三拾三貫八百七拾五匁八分貳厘 御樂屋銅屋ね葺替御入用 ナマリ 鉛

タ一、七拾七貫八百拾六匁 陽広院様御靈堂

タ一、三貫三百八拾壹匁六分貳厘 右同断御棟上御規式

文政三年

ヲ一、六百目 御算用場之内御仕法所建出シ (直カ)

ヲ一、壹貫百目 右同所定検地役所建替

文政四年

ワ一、五貫七百九十三匁七分八厘 金谷御広式御土藏御修覆

ワ一、八貫九百六十九匁貳分壹厘 二之御丸切手御門脇御土藏相建

ク一、五拾四貫百拾七匁五分三厘 高岡古御城御門等御修覆

ト一、貳拾六貫五百六匁貳分七厘 玉泉院様丸御武藏相建 (具土)

ソ一、五貫貳百七拾五匁八分七厘 高岡町会所相建

文政五年

文政六年

一、八貫四百五十四匁三分四厘

ロ一、八貫八百八拾目七分九厘 竹沢御殿御普請用材木 玉泉院様丸おひて木割 金谷御屋敷御表廻御取置

文政七年

レ一、五拾九貫四百九拾九匁六分壹厘 学校御鎮守御造営御入用

文政八年

一、六貫七拾四匁八分壹厘 竹沢御屋敷御修覆御入用

ソ一、拾六貫七百三拾六匁五分五厘 会所役所立替

ツ一、四貫三百貳拾貳匁四分壹厘 竹沢綿羊小屋金谷江移替

一、拾六貫七百三拾六匁 会所役所建替御入用

ヲ一、九貫六百七拾貳匁五分貳厘 瑞龍寺塔司龜占庵建直シ

[1-3] (24×64 匁、二枚貼継)

ツ一、貳貫百四拾目壹分 公事場窄屋御修覆

ツ一、貳貫五百七拾七匁三分八厘 右同断

ヲ一、七貫三百七拾壹匁九厘 繁久寺庫裏建直シ



リ一、五拾貫目

瑞龍寺御法事

又一、五貫目

御殿桐之間銅屋根被仰付候御入用

ル一、式拾五貫目

石川御櫓建直シ等

ヲ一、三拾六貫八拾三匁六分壹厘

外 如来寺庫裏建直シ  
外 桃雲寺庫裏建直シ

名倉氏採取文書

「1-1」(24×65cm、二枚貼継)

ワ一、式拾貳貫貳百九拾三匁五分壹厘  
三三三二九九四  
三拾八貫九八五六九  
二之御丸切手御門脇御土蔵相建遠所御土蔵等建直等

〔一〕御普請会所土蔵新出来

〔二〕福浦ノロシ

〔四〕金谷御広式御土蔵御修覆五貫七百九十三匁七分八厘

惣ノ四十二貫七百十六匁六分五厘

〔五〕高岡瑞龍寺宝蔵  
〔六〕宝形ヲトソ  
〔七〕奥納戸土蔵建修理

カ一、式拾五貫百目

御神忌ニ付御宮、神護寺御修覆

ヨ一、三拾三貫八百七拾五匁八分式厘

御楽屋鉛屋根フキカヘ

タ一、七拾七貫八百拾六匁

八拾貫八百九拾七匁六分式厘

陽広院様御靈堂等相建

レ一、百三拾貫九百六拾壹匁三分五厘

学校御鎮守御造営、黒津舟御再建并仮屋

ソ一、四拾七貫四拾目八分九厘

五二三百十六匁七分六厘

会所役所并御細工所建替、境御閑所建修覆セシキ、高岡町会所建替

ツ一、拾貳貫貳百七拾壹匁九分式厘

十四貫三百八十三匁六分五厘

竹沢綿羊小屋、金谷ヘ移カヘ、公事場牢屋等御修覆并ゴキサマ御修覆、蓮池御コシ置所御用分相建

子一、四貫三百五拾目

大岩日石寺  
仁王門

ナ一、十六貫五百卅五匁五分

二十貫八百式十目六分四厘

竹沢御取疊御入用  
一、魚津三浦又蔵

二、同所御高札場焼失同断

三、小杉御高札場焼失ニ付建直シ

四、滑川高札場焼失建直シ

五、同所番人御かしや共

ラ一、六拾六貫三百式拾式匁九分六厘

輪島御蔵所カヘ、遠所御蔵等焼失ニ付相建等滑川御蔵焼失ニ付建直シ、三筋力能州飯田村御蔵建直シ

検討した結果、

(1) 作事関係の建物修築経費の総括記録(文化↗天保年間)

1-4 ↓ 1-1

(2) 作事関係の建物修築経費の年次別書上(文化H↗天保9年)

1-6 ↓ 1-9 ↓ 1-3 ↓ 1-2 ↓ 1-5

の二つのグループにまとめることが妥当と推考されたので、紹介は上記の配列で行った。2番目以下の封筒には、文化年間から天保年間の城内および城外建造物の造営費用、部材・内装の購入手続等に関する算用記録、藩関係作事に雇用された大工・絵師・飾金具職人などに関する支払記録や、納品した商人たちの請取状等が多数含まれていた。城内建物の再建・修築年次や修築経費を記録した部分に、新発見の事実が含まれており、今後の金沢城調査研究にとって、きわめて重要なものといえる。さきに刊行した文化六〇七年の二ノ丸御殿再建の記録『御造営方日並記』と関連する内容も散見される。名倉氏の解読原稿は一二〇枚以上あり、今後、原本校合と復元作業を併行してすすめ、仮目録等の作成につなげたいと考えている。

### 3、史料紹介

- ・史料の翻刻にあたり、原則として常用漢字で表記したが、一部、変体仮名や近世古文書独特の略体・異体の文字を使用した。
- ・本文書には朱筆と抹消点が多数あり、その注記を細かく行うと煩雑となるので、朱書きについては、本文にアミかけを施し、抹消点は左に「ゝゝゝ」で示した。

(1) 作事関係の建物修築経費の総括記録(文化↗天保年間)

[1-4] (24×65.5cm、二枚貼継)

イ一、九百九拾目四分

御城方桐箱

ロ一、五拾貫九百六十九匁九分八厘  
六拾八貫七百六拾二匁七分六厘  
金谷御取置并御修覆等住居替トモ

文化 七年 御仏間国本智光院へや

文化 十四年 御屋敷屋ね御修覆ステ、カへ

文政 四年 金谷御広式御土蔵御修覆

同 五年 御表廻御置かへ等

文政 十一年 金谷御広式屋ね

天保 四年 仮雪垣等

同 五年 御修覆

ハ一、式拾貳貫九百八拾三匁六分

外 御規式御能御用

ニ一、五拾七貫目

外 越後屋敷御建物相建

ホ一、四拾三貫七百目

外 七拾間御長屋等建修理  
同所ツ、キ玉蔵

ヘ一、五拾貫九百五拾目

外 単多御門建修理

ト一、三拾七貫五百六匁式分七厘

外 金谷御門

チ一、三拾四貫四百四拾壹匁三分三厘

外 単多御門続御武具土蔵等  
玉泉院様御丸御武具土蔵

外 土清水塩硝蔵相建、  
土清水塩硝蔵建直シ

外 相建并々直シ火事損ニ付建直シ共  
同所蔵火事損ニ付建修理

## 【資料紹介】

# 金沢城作事所に関する断簡資料（1）

—名倉氏採取襖下張文書（金沢大学文学部日本史研究室蔵）—

木越 隆三

## 1、「名倉氏採取襖下張文書」発見に至る経緯

一九七三年頃、当時金沢大学法文学部四年生であった名倉慎一郎氏（史学科国史専攻）が、金沢市内の旧御小人町にあった下宿の襖の下張りの中から古文書を発見した。それが、ここで紹介する「名倉氏採取襖下張文書」と命名した古文書である。名倉氏は金沢大学史学科の井上鋭夫教授の指導のもと、プールで水にさらしたのち丁寧にはがし、当時史学科助手であった西節子氏（中野節子助教授）らの指導のもと解説した結果、金沢城の作事に関する史料であるとわかった。この事は当時、新聞記事に取り上げられ話題になったが、やがて、この史料の存在は次第に忘却されていったようである。

その後、この襖下張文書は、金沢大学文学部日本史研究室の所有となり、日本史研究室で保管されていた。東京大学文学部の吉田伸之教授らによる、加賀藩江戸本郷邸の発掘調査に関連した絵図・文献調査が一九八四年から始まると、この襖下張文書の存在を知った杉森哲也氏・宮崎勝美氏らが、本資料の所在等について調査し、静岡県で教職についていた名倉氏より、この襖下張文書の解説原稿を入手している。しかし、史料原本の行方まで確認できなかったため、本文書の存在は公表されないまま一五年以上の歳月を経ることになった。

ところが、名倉氏の解説原稿を所持していた東京大学史料編纂所教授

宮崎勝美氏が、金沢城調査研究（絵図・文献）専門委員会委員に就任されたことを契機に、この襖下張文書は金沢城造営に関する重要資料であることから原本の所在を調べてもらえないかと、二〇〇三年、金沢城研究調査室へ依頼されたのであった。金沢城研究調査室では、解説原稿のコピーをもとに関係者に聞き取り調査したところ、金沢大学文学部日本史研究室に保管されていることが、二〇〇四年四月、金沢大学の笠井純一教授によって確認されたので、同年九月、金沢城調査研究（絵図・文献）専門委員会による史料調査が、金沢大学文学部の協力を得て実施された。この史料紹介は、この史料調査を踏まえて行うものであり、調査に協力頂いた、笠井純一教授・中野節子助教授ならびに日本史研究室の学生諸氏に感謝申し上げたい。なお原本調査に参加した絵図・文献専門委員・室員は下記の通りである。

脇田修（委員長）・田畑勉・宮崎勝美・中野節子（以上、専門委員）  
木越隆三・石野友康（以上金沢城研究調査室員）

## 2、名倉氏採取襖下張文書の概要

「名倉氏採取襖下張文書」はいずれも断簡史料であり、どこまでを一点の文書とするか確定できないものもあり、まだ調査途上にある。したがって、史料点数は約一〇〇点と概数で示すほかない。二〇〇四年九月の調査では、グループごとに10個の封筒に入れられた現況のまま、仮の撮影（デジタル）を行い、解説原稿との対照を行うに止まった。今後、現状の封筒ごとにつけられた整理番号を尊重しつつ、断簡文書相互の関連を探り、出来るだけ元の古文書復元につながる分類を目指したいと考えている。そのため、今回は許された紙面の中で最初の封筒に収納された10点の断簡史料の中から7点選び紹介した。10点の断簡に、1―1から1―10までの整理番号が付されているが、今回、原本と照合し、内容を

## 執筆者紹介

北垣 聰一郎	元 東大阪短期大学教授 金沢城調査研究委員会委員 金沢城調査研究伝統技術(石垣)専門委員会委員長
北野 博司	東北芸術工科大学助教授 金沢城調査研究伝統技術(石垣)専門委員会委員
長山 直治	元 石川県立工業高等学校定時制教諭
出越 茂和	金沢市文化財保護課 金沢市埋蔵文化財センター所長補佐
田嶋 明人	金沢城研究調査室長
木越 隆三	金沢城研究調査室次長
正見 泰	金沢城研究調査室室員
富田 和気夫	金沢城研究調査室室員
滝川 重徳	金沢城研究調査室室員

研究紀要 金沢城研究 (第3号)

平成17年3月 発行

編集・発行 石川県教育委員会事務局文化財課 金沢城研究調査室  
〒920-0962 石川県金沢市広坂2丁目1番1号  
石川県広坂庁舎2号館

TEL 076-223-9696 / FAX 076-223-9697  
E-mail [kncastle@pref.ishikawa.jp](mailto:kncastle@pref.ishikawa.jp)